

る。縣道工事に刀劍の朽ちたるものを掘出したと云ふ。(山田茂子)

○ 貝ヶ洞 (田方郡西豆村)

下村にある。昔貝殻を噴出したと傳へられる。(山田茂子)

○ 貝積場 (田方郡西豆村)

貝ヶ洞から出た貝殻を積んで置いた爲この名を生じたと云ふ。(山田茂子)

○ 作久根島 (田方郡西豆村)

作久根島は西豆村小下田米崎沖約一軒の海上にある。昔千石船がこの島に差掛つた時、妙齡の女性の箱に乗つて流れて來たのがあつたが、無情にも見捨て、去つた。後にこの船が難波し且この島の附近に異變があつたので、祟であらうと、此の島の脈續きと云はれる字坂之上に祀つて八幡神社と稱したと云ふ。

現今でも龍神棲むと神秘的に考へられ、平常この島を踏む時は忽ち大暴風起ると云はれ、近村の漁夫さへ舟を寄せる事はない。唯雨乞の時のみ此の島へ上ることを許され、祈禱の幡、供

物等を此處に納めるを例としてゐる。(山田茂子)

○ 矢取り道 (駿東郡浮島村)

昔、浮島村井出の大泉寺にゐた今若丸が、この道の所で弓を射ると、其の矢と同時に犬坊、早坊と云ふ家來が飛出して行き、地に落ちようとする時には既に其家來達かそこに待つてゐて其矢を拾つて來たと云ふ。(原井美智子)

○ 市場 (沼津市)

沼津市の市場は、昔、市ツ子と六部が一緒になつて出來た町である。(岡林よしゑ)

○ 鹽場 (沼津市)

昔、寄せる潮を應用して鹽を得た所である。これによつても土地の隆起が分る。

(岡林よしゑ)

○ 鹽満 (沼津市)

昔は潮が満ちて、一帯に埋つたといふ所。今は一帯が田畑に利用されて居る。(岡林よしゑ)

○ 御前ゴゼ 歸り

(沼津市)

沼津の東南部にある鷺巢山に岩屋がある。そこは御前歸りと云ふ名で呼ばれて居る。昔、(頼朝時代と云ふ話)非常に戦争が多くて武士が互に相争つてゐた頃の事。ある侍夫婦が鷺巢山の麓を通つて行つた。處が丁度、彼方から敵らしい二人の武士が來た。そこで其の武士はよくよく妻に言ひきかせて、かくれさせ、自分は二人の武士を相手に戦つた。やがて二人を追拂つた。武士は妻のかくれて居る岩屋の前で頻りに其の名前を呼んだが返答がないので、さては捕はれたかと思つて馬を走らせた。處か妻の方は夫の呼ぶ聲が通ぜず遂に其所で終つて仕舞つたといふ話である。(岡林よしゑ)

○ オイノクボ

(富士郡上野村)

上野村の西方に西の山といふ山がある。其處に現在ではオイノクボと言つて、家もなく、島一、居る所がある。昔は大變に立派な屋敷もあり、澤山の家がたつてゐた。そして沼地で、萩がたくさんはえて居て、水がたくさんあつたので船等を浮べて遊んだとの事、實は萩の

窪といふのであつたが、なまつてオイノクボと言ふ様になつた。

今では、萩もなければ船をうかべる水たまりもない丘である。(佐野きよ子)

○ 楠クス

金ガネ

(富士郡芝富村)

窪尻クホジリ附近(天子嶽山脈の末端)に於て寛永年間金魂を見出した者があり、土中を掘つたところが、かなり多量の金鑛を採掘する事を得て、富士川原岸の岩に七八個の臼を刻みつけ、それで金を搗き、精製して負幣を造つたと。それから楠金の地名が出来たと言ふ。

現今にても金採掘の穴と石臼を存して居る。

穴は、東側から北側(川岸の方)へと、石を投げここむと突き抜けて出た等とも言はれてゐる。(佐野あき)

○ いびや

(富士郡芝富村)

楠金から長貫に下る鳥坂道のつきる處に一寸した澤がある。瀬戸之澤と云ふ家で、昔酒造りをしてゐる頃、米とぎした際多量の白米が流れてゐたので、其處を通つた馬が大層いびや、(馬のうれしさうにいなゝく事)つゝ其の水を飲んだ所から、いびや澤と名付けられたと云

ふ。(佐野あき)

一八〇

○ 一町六段の由来

(富士郡須津村)

昔、吉永村比奈に、非常に菊が好きでお菊さんといった人が住んでゐた。その人が或日人に頼まれて自分一人で一町六段の田植を始めた。日が西の山に沈みかゝつた頃には、さしも廣い田も殆ど苗が植ゑつけられて少しばかり残つてゐた。そこでお菊さんが「日が戻つて下さつたら」と云ふと、不思議にも太陽は西に沈む事を止めた。そしてお菊さんの田植がすむと同時に沈んでしまつた。お菊さんは「やれ／＼終つた」と腰を伸ばすと共に息が絶えたと云ふ。近所の人はお菊さんを哀れに思つてその田圃に圓い塚を拵へて、一杯菊を植えてとむらつてやつたといふ事である。今も吉永小學校の西の新道や、その周囲の田圃を一町六段といひ、地名として残つてゐる。塚もまだ残つて居る。(齋藤かつ江)

○ 鬼ヶ島

(富士郡元吉原村田中)

村の近くの田圃に鬼ヶ島がある。こゝは昔よく鬼が澤山住んで居て畑の農作物をとつたりして大變あらし、其上村人が畑へ一人で行くと随分苦しめたさうである。

長い間其處へは誰も行かずに居たが、かうして置いても仕方がないと皆揃つて鬼を退治してしまつたといふ。

今では浮島沼との間に堤防を作り、梨やその他野菜など作つて居る。村人はそこを今なほ鬼ヶ島と呼んでゐる。(杉山ふで)

○ 白鳥山

(庵原郡内房村)

白鳥山は駿甲の境界に接した峻嶺である。昔、眞白な大きな一羽の鳥が大和の方から來て此の山に下りた。そして美しい富士川の方を見てゐると、丁度私の村から正月のどん／＼焼の煙が上つてゐた。白鳥は村を向いて羽ばたきをした。それを見た村の人達は、いけないと云ふ事かと思ひ、それから白鳥山の見える村では決してどん／＼焼をする事がない。白鳥山の名のいはれはこゝから出たのだと云ふ。そして今でもどん／＼焼をすると白鳥が現れると謂はれてゐる。

又一に城取山とも云つて、武田信玄が駿河亂入の時、此處に城を築いたと云ふ傳へもある。

(中谷タカエ)

○ お染島

(庵原郡富士川町)

今から五十年ばかり前に大變コレラが流行したことがあつた。其時岩淵邊のお染さんと云ふ人が可愛想にもコレラになつて仕舞つた。コレラは非常にうつりやすいし、患つたら、ころり／＼と死んで仕舞ふ様な烈しい病氣であつたので、人々は傳染を怖れて、富士川の下流にある高い洲に堀立小屋を作り其處にお染さんを移して置いた。お染さんは離れ小島の様なその洲の上で誰一人付き添ふ者もなく、一人で苦しんで寂しく死んで行つた。お染さんが死んでからは雨が降り續いたりして、水嵩もまし、流れも早いので、村人は氣の毒に思ひ乍らもその死体も引き取りに行く事が出来なかつた。それでたう／＼お染さんの死体は風雨にさらされて其處で白骨になつてしまつた。それからお染さんの死んだ洲の事をお染島と云ふ様になつた。

お染島は富士川の鐵橋のすつと下の方で、避病院の東の方にある。富士川には明治以來幾度も洪水があつたが、お染島は一度も水に浸つた事がないさうである。そして今でもお染島の附近の魚は決して獲らない事になつてゐる。(遠藤梅子)

○ 嫁田

(庵原郡高部村)

昔、大内に大變口やかましい男があつた。この男の倅が年頃になつたので嫁を貰つた所が、此の嫁が親父の氣に入らず、何事につけても嫁をいぢめてゐた。嫁は母親から嫁入先は墓場と思へと、かたく言ひ聞かされてゐるので、辛棒に辛棒して毎日泣き泣き暮して居た。

或日の事親父は嫁に向つて「ダ、ヤ、田」に馬の目ばかりの田圃があるから、日の入るまでに苗を植ゑ付けてしまへ」と言ひ付けた。それも正午過ぎの事、しかも田圃は非常に廣くて、大の男が一生懸命に植ゑても一日はかゝる位の田圃であつた。嫁は親父の無理が又始まつたと思つたが、素直に「はい」と答へて田圃へ出掛けた。一生懸命に植ゑてゐる中に、もはや日は西の山に入らうとする。けれども未だ植残つてゐるので嫁は氣が氣でなく、「おれん植ゑ終へる迄待つてくれよ」と泣きながら太陽をさしまねき、さし招き、たう／＼植ゑ終つた。植ゑ終へて「あゝこれでやつと終へた。親父さんに叱られる材料が一つ減つた」と思つて畦に腰を下してほつとした時、連日の氣疲れが一時にとつとおそつてきて其の場にばつたりと絶命してしまつた。それから其の場所を嫁殺田といつて居たが、今は嫁田と呼んでゐる。

○ 神子崖(後家八家の話)

(榛原郡菅山村)

菅山村和田ノ谷に今でも後家が八家あるといふ。言傳へによると、昔、神子と云ふ一種のト

ひをする女があつた。大變金があるので、和田ノ谷の男が七人で相談して、此の神子を萩間村大寄の崖に突落して殺して仕舞つた。この時神子は七代崇るといつて死んだ。それから、此處を神子崖と云ふ。今は八人の子孫は五代目だとの事である。神子の死後この嶽へはお齒黒をつけた蛇が出ると云ふ。蛇は一体にかねを嫌ふものだが、これは神子の化物ださうな。

(萩原みな)

○ 牛 尾

(榛原郡五和村)

五和村に牛尾といふ處がある。かつて鹽が出たといふので潮と書いてゐたが、後に牛尾となつた。因に附近の横岡に田鹽姓を名のる家がある。この家の姓は昔は服部といつたさうであるが、所有地の田から鹽水が出たので十五代前の先祖が田鹽と改めたといふ事である。この地は金谷町の北部で海からは五六里離れてゐて海水のさす理はない。岩鹽であらう。(本多みち)

○ 嫁の田、姑の畑

(小笠郡日坂町)

日坂の附近に嫁の田、姑の畑といふ處がある。昔宮村に某といふ者があつて息子を千代藏といつた。その隣村鴨分といふ處に丈助といふ者があつて、その娘は容貌麗しく、千代藏はこ

れと密かに契を結び、妻とせんとして母に願つた。母が云ふには、今は早苗を植ゑる時である。こゝに一町餘りの田があるが彼の娘が一日の中にこれを植ゑて仕舞つたならば妻にしてやらうと云ふ。娘は之を聞いて朝早く起き出で甲斐々々しく夕月かけて一町餘りの田を植付けてしまつた。すると千代藏の父は又難題を構へて云ふには、彼の田の畔に二子石といふ石がある。それを傾けてみよと云ふ。娘は云はれるまゝに、神佛に祈誓して一心をこめてその石を傾け様とした。神佛の加護によつて石は首尾よく傾け得た。

それからこの石を縁定め石といひ、田を嫁田といふ。又その邊の少し崩れて畑となつた處を姑の畑といふ。(萩原みな)

○ 糸 線

(小笠郡千濱村)

千濱村千濱の西北部に糸線といふ處がある。昔この地に老婆が娘と共に住んでゐた。娘は非常に美しかつた。或夜若武士が訪ねて来て其後毎夜必ず来る。然し何處から来て何處へ行くのか分らない。婆は窺かに針に糸をつけ、侍の衣の裾に縫ひつけて、糸のくつて行くにまかせた翌朝其糸を辿つて行くと山陰の池に入つた。それから此の池を糸くりと云ふ。

南山村河東の山南中腹に、三ツ池といつて、三つの池があつたが、明治初年頃に埋められて

耕地となつてしまつた。糸繰の池はこれであると云ふ。(萩原みな)

○ 婆ヶ原

(小笠郡比木村)

比木村字中田原に婆ヶ原といふ處がある。昔、この原に一人の老婆が庵を建て、住んでゐた。何時も蕎麥餅を焼いて一人で暮して居た。すると或夜一人の老爺が来て四方山の話をし、蕎麥餅を食べて歸つた。其後毎夜老爺は蕎麥餅を食ひたいと云つて来て、老婆のすきを見ては陰囊を擱げこれを被せんとした。これをさとつた老婆は次の夜手頃の小石を拾つて来て蕎麥餅にみせかけて老爺の陰囊に投げつけた。すると忽ち古狸となつてキャン／＼となきながら姿を消してしまつた。この氣丈な老婆の住んだ處を婆ヶ原と云ふ。(萩原みな)

○ ババヶ原

(小笠郡池新田村)

この村の東北部の木高い原をババヶ原と云ふ。これは塞の番をしてゐたので番場ヶ原と云ふのだと云ふ人もあれば、或一人のおばあさんが住んで居たので、それで婆ヶ原と、云ふ人もある。又馬場があつたので馬場ヶ原と云ふ人もあるが、多くの人の云ふには塞の番をした處だと云ふ。此處に唯一つの墓があるが、なんだか分らない。(田中あい)

○ 忍澤の牛返

(小笠郡佐倉村)

昔、佐倉村の櫻ヶ池の畔で、或る武士が酒宴を開いてゐた所が、怪物が現れて、お酌の女をさらつて櫻ヶ池に入つた。武士は怒つて此の池を埋めようとする、二匹の牛の如き怪物が現れて逃げ出した。

その牛の一匹が忍んで逃げた所を忍澤(小笠郡佐倉村)と云ひ、他の一匹が途中まで逃げて引返した處を牛返(榛原郡白羽村)と呼び、今も地名として残つてゐる。(本多みち)

○ シノミ澤と駒取

(小笠郡佐倉村)

佐倉村櫻ヶ池の傍で一匹の牛が水を飲んでゐると、其の池の中から大蛇が現はれて牛を呑まうとしたので、牛は逃れて上之原にある澤に身を隠した。それからその澤をシノミ澤と云ふ様になつた。

此の村には駒取といふ處がある。此處は夏になると澤のぶとが出て、駒を取殺したと云ふので駒取と云ふ様になつた。(本多みち)

○ 大蛇谷と飯盛山

(小笠郡南山村)

南山村に、大蛇谷訛つてダイジン谷といふ處がある。昔、大蛇が通つた爲に土地が凹んで大蛇足窪といふ。此處に池がある。大蛇は二足目に牧野原を踏んだといふ。

この附近に、飯盛山といつて、高さ三四間、周圍五六十間の小丘がある。高天神に城があつた時代の事、此の小丘に白布をかけて食糧の如く敵に見せかけた。それで飯盛山といふ。

(本多みち)

○ 日暮し

(周智郡熊切村)

熊切村の北方は急坂となつて通行に最も難儀な土地である。此處を、日暮しまとよんでゐる。昔一人の乞食がそこを通過した時、餘りに長い坂道のために一軒の家をも發見せず、食物も貰はないで頂上で日を暮した。それから日暮しまの名がついた。(本多みち)

(周智郡三倉村)

周智郡三倉村の地は、徳川家康が、武田信玄と戦ひ或は大居城主と鉾を交へたりした事があ

つて、此の秋葉街道は徳川家康の度々往來した街道と聞く。故に徳川家康に關した話が山や寺に残つてゐる。老人等の話によると、家康が信玄と戦つて負けて三倉の方へ逃れて來た。敵の兵はどん／＼と迫つてくる。そこで仕方なく、此の三倉村の一農家に頼んで隠してもらつた。馬の鞍三つを使つてその下に隠れてゐると、敵兵はそのまゝそこを通過してしまつた。その御禮として家康が言ふのに「もし私が後日天下の政權を得るに至らば、目通りか或は十萬石かどちらかをやらう」と。そこで目通りを貰つて、その土地の大富豪として、明治維新後迄續いたといふ。今は衰へてその邸はない。その邸の跡は、三倉尋常高等小學校の校庭となつてゐる。かやの木と黒松があつた。徳川家康の植ゑたものであるといふ事である。學校建築の際引抜いてしまつたといふ。

そして又家康は其所を立ちのいて榮泉寺に行き、頭を剃り衣を附け、すつかり坊さんになりすまし、敵兵の目をのがれた。そしてその禮として、太平に暮す事が出来る様にと、太平山の寺號を呉れたといふ。今太平山榮泉寺といふ。

三代將軍家光公の時、家光は供をつれて全國を巡り、家康の恩になつた處へ立寄つたとか。この榮泉寺にもよつて「れん」の字を書いたり、短冊を書いたり、又太平山といふ字額を書いたりした。(長さ六尺巾四尺、字の太さ二寸位、直徑約一尺五寸)それは現に門前にかけてあ

る。(鈴木とし)

一九〇

○ 半 明

(周智郡三倉村)

三倉村の山の中腹に半明といふ所がある。

天正三年七月に、徳川家康が犬居城を攻めようとして出陣した。犬居城には、天野宮内右衛門が城主として、周智の山中三分の一を領し、遠江北部に勢力を振つてゐた。家康は此の戦に散々天野勢に追ひまくられてしまった。

この時には、天野氏のもとへ、田能、大久保の人達が猿の皮の鞆や竹槍等をもつて馳せ参じたと言ひ傳へられて居る。

進退度を失つた家康は、たつた一人でやつとのこと領家に逃れた。領家に逃れた家康は漸く一軒の百姓家作右衛門の家に入つて、「三倉に出るにはどう行つたらよいだらうか」と尋ねた。作右衛門は「あゝそれなら氣多川を渡つて、すぐ里へ出なさい」と言つた。そこで家康は村の人達に助けられて、草のぼうくと茂つてゐる所を、木の根、岩角をふみ越えくやうやく半明迄たどりついた。しかし、家康はこゝにも敵のある事を知つた。それは前に犬居の城主天野氏に加勢した所の、大久保の人達が天野の内命を受けて家康をさがしてゐたのである。

そこで家康はある一軒の民家を探してそれに入つて、一先道中の疲れを直さうとしたのであつたが、家康の所在をさぐり聞いて、早くも敵はせめよせて來た。

またくうちに家康の居た家は、十重二十重に取り圍まれて、邑民の持つてゐた竹槍は、壁と言はず、羽目と言はず、到る所からブスリ／＼つきさゝれて、家康の命は風前の燈より危くなつてしまつた。けれどもほんとうに奇蹟だつたのだらう。家康は縁の下に入ることを得て危く一命を助かつた。

そこで、こゝを半命と呼んだが、いつの頃にか、半明に改められてしまつた。(鈴木とし)

○ 衣張山、金掘山

(周智郡三倉村)

金掘山は衣張山の中にある。

三倉村の眞東天方村の吉川と境する所にある。

これは昔家康が武田氏と戦ひの時に陣を張つた。陣を張り廻したから衣張山といふ。光明様と秋葉様との間の信玄谷に陣を張つた武田氏と相對して戦つた。その時武器や金等の大切なものを金の長持に入れて埋めた。金掘山は、埋めた一部分の名で八尺位の直径の物、その周りに一面のぜんまいがはえる。けれどもそのぜんまいは決して増えも減りもしないといふ。

その上でとびはねると「かんく」と音がする。近年木の切出しをする荒男共がその金堀山を堀つた。三間堀り下したけれども長持は出なかつた。のみならず、その男共は病氣になつて皆山から他の人々に連れて來てもらつたといふ。(鈴木とし)

○ 小 豆 坂

(周智郡三倉村)

家康が光明様地方をば逃げてかへる時、光明様で小豆を炊いたのを呉れたが、食べながら歩いたため其のつゆ(汁)をこぼした。その爲六町位のみちのりが、石も土も全部小豆色に染つてゐるだよ。(鈴木とし)

○ 三 倉

(周智郡三倉村)

家康が戦に敗れて三倉村逃げて來た。敵が後から追跡するので家康は百姓家の倉にしのみ込んで隠れた。ところがそこには三つの倉が並んでゐたので、敵は探す事が出來ず、家康は辛うじて助かつた。そこで家康は三つの倉があつたので助かつたとて、非常に喜び、三倉村と名付けるに至つた。(本多みち)

○ 彌八山と佐傳次山

(磐田郡山香村)

昔大瀧に彌八と佐傳次の兄弟があつた。或日二人は山へ仕事に行つて、何か口論の末、彌八は弟の頭をよき(斧)で擲りつけた。弟は手にあつた蔦口で兄を擲りつけた。とうく大喧嘩になつて弟は兄に殺されてしまつた。そして兄もその場で我と我が首をよきで切つて死んでしまつた。それから彌八が死んだ山を彌八山、佐傳次が殺された山を佐傳次山といふ様になつた。

(本多みち)

○ 鳥 羽 山

(磐田郡二俣町)

昔時、蒼海であつた時、こゝに船をつけて苫を乾かしたのでとま山、なまつてとば、山と言ふ。(鈴木とし)

○ 鳥 帽 子 山

(磐田郡二俣町)

この山の形が鳥帽子に似てるので言ふ。またこゝに穴がある。昔海であつた時、大船がぶつかつて穴になつたとふ。(鈴木とし)

○ 寄 木

(磐田郡幸浦村)

幸浦村字寄木は海邊の村で暴風雨には屢々材木(俗にコハシと云ふ)や小枝等が海岸に澤山打ち上げられる。昔この村の東部の海岸に眞白い大木が漂着したので村人はそれを截つた。すると人の血と少しも異ならない生々とした血が流れ出た。村人達は驚いて之は何か由緒のあることであらうとて祠をつくり祀つた。木の寄つた處といふので遂に地名となつた。(本多みち)

○ 豆 こぼし

(磐田郡佐久間村)

佐久間とこは、やの間に天龍川が非常に曲つた瀬がある。其處を豆こぼしと云ふ。それは昔、或船頭が船に豆を一杯積んで其處にさしかつた。すると大波の爲に岩に船をつきあて、豆を皆こぼしてしまひ、船頭も死んでしまつたと云ふ。(本多みち)

○ 梯 子 坂

(磐田郡光明村)

光明村光明山の裏道に梯子坂といふ處がある。家康が武田勢に追はれて逃げる時に、坂があまり急なために梯子をかけて登つたと云ふ。それからこの地名が出来た。(本多みち)

○ 羽 ケ 庄

(磐田郡佐久間村)

佐久間村佐久間字羽ヶ庄は、長篠合戦の落武者が此處で數十名死んだので、墓所といつてゐたが後に羽ヶ庄と變つた。又一説に、樋口次郎兼光の妻が家康の家來十五人に追ひつめられて此地で自害した。その墓所といふ所から羽ヶ庄となつたと云ふ。(本多みち)

○ 大藤村の由來

(磐田郡大藤村)

大藤村は古名を滋野木村と云つた。家康が戦に敗れて此の村に逃げて來たが、敵の追撃益々急で到底何時までもこの村に忍んでゐる事が出来ず、遂に立去つた。去るに臨んで家康は大藤棚(現在小學校の建つてゐる地に二十間四方もある大きな藤棚があつた)の下で「驟雨の如き大軍に我凌ぎなからん」と詠じたといふ。大藤棚に因んでこの村名が生じた。(本多みち)

○ 成 子 町

(濱 松 市)

今の濱松市成子町の近所は、昔は険しい坂道で所々に松の木が植ゑてあり、唯地藏様があるばかりの淋しい道だつたさうである。

或冬の夜のこと、何處からか赤子の泣聲が聞えてきた。里人はその泣聲をたよりに段々探してみると、地藏様の前で生れて間もない赤子が泣いて居た。可愛想に思つて其人は拾つて連れて歸り、育てたと云ふ。それで其坂道を鳴子坂と呼んだ。それが後に成子坂となり、成子町となつたのださうである。(金原せつ)

○ 下 垂

(濱 松 市)

現在濱松市尾張町は元、下垂シモダレといつた。それは家康が戦に敗れた時兜の緒を垂れて逃げた處と云ふ。(本多みち)

○ 源 太 山

(濱名郡新居町)

濱名郡新居町に源太山といふ字がある。昔源頼朝が新居を通過した時、家臣の梶原源太も随伴し、現在の新居小學校の處に一本の松があるのに登つて、物見したと云ふ。その松は枯れてないが、其附近一帯を源太山とよんでゐる。(本多みち)

○ 隠 里

(濱名郡吉野村)

吉野村の隠里には林が茂つてゐる。昔、家康が武田軍と戦つて敗れて吉野村まで逃げて、谷の林の茂みにかくれて漸く敵の目をのがれた。それから此處を隠里とよぶ様になつた。

(本多みち)

○ 旗 見

(濱名郡伊佐見村)

伊佐見村大人見地内にある一地名で、小高い岡である。其處に二本の老松があつたが、近年伐り倒された。其處で家康が敵の旗を見たと言ひ傳へられてゐる。そして旗見の森とよんでゐるが、今ではアタミと稱してゐる。(本多みち)

○ 俵 ん ば し

(濱名郡白鵬村)

家康が戦に敗れて白鵬村三嶋の一農家に逃げ込んだ。丁度稲の取入時だつたから主人は庭で米俵を編んでゐた。家康は請うてその中へ隠れたので辛じて敵の目をくらす事が出来た。その後此の地を俵んばしといふ様になつた。(本多みち)

○ 根 小 屋

(濱名郡入出村)

入出村の前面は湖に望み、後方はすぐ小高い山をひかへた處に位置を占めてゐる。此處は昔他所の漁夫が漁獵に來て此處に出小屋を作つて起居し、漁期が過ぎれば郷里に引き上げる。その爲ね小屋と云ふ名が起り、現在は根古屋と書いてゐる。昔は漁期には人口が急増し、その他の期間は殆ど皆無であつたが、現在では時期の如何に拘らず、人口の上に季節的變化は至つて少く百餘戸の定住を見るに至つた。(本多みち)

○ 富 塚

(濱名郡富塚村)

濱松市郊外の富塚村西脇に御塚様、又は意富塚オツカと稱して小さい祠の中に石地藏様の如きものが安置してある。

言ひ傳へによれば、これを此の村の開祖だと言つて、村人は大いに尊崇し、毎年九月二十四日にお祭りをする。この意富塚様があるので、富塚の村名が出來たのだと云ふ。(本多みち)

○ 血 塚 噺

(濱名郡雄踏町)

明治維新になる少し前の事、雄踏の小山といふ處の醫者の家へ中年の女が屈はれた。彼女の夫は至つて狂暴なので遂に家出して女中となり、この醫者の家へ身をかしくたのである。しか

し執拗な夫は六部姿となつて妻を探しまはり、遂にこの醫者の家に居る事を見出し、女を村はづれにおびき出して、ずたずたに斬つた。斬られながらも彼女は一町餘りの噺を逃げまはり、爲に噺の上も草も悉く血潮で眞紅に染まる程であつた。それから人々はこの噺を血塚噺と呼ぶ様になつた。又彼女が殺された場所にその冥福を祈る爲、地藏様を作り、彼女の名前のお辨を取つて辨地藏と稱し、地藏様の前の道を辨地藏道と呼んでゐる。(本多みち)

○ 芋 瀬

(濱名郡河輪村)

河輪村に芋瀬といふ字がある。昔天龍川に大洪水が出て、丁度時期が夏で、上流地方にて芋を澤山栽培して居つたが、それが此の氾濫の爲、皆押流されて河輪村に漂着し、天龍川の瀬に堆積したので此處を芋瀬と稱へるに至つた。(本多みち)

○ 蒲 嶋

(濱名郡河輪村)

河輪村の蒲嶋といふ處は極く小さい字で、今では二三軒しか人家がない。昔、此の村の或老人が天龍川に魚釣りに行つてゐると、上流の方から蒲で編んだ筵の上に神様が乗つて流れて來たので、その老人は不思議なこともあるものかなと、恭々しく奉持して我が家に歸りお祀りし

た。それから此の村は非常に富裕となつた。それから蒲筵に因んで蒲島と稱する様になつた。今でもこの村の家では如何なる時でも決して疊は用ひない。常に太藪で織つた藪のみを敷いてゐる。(本多みち)

○ 貴 平

(濱名郡豊西村)

豊西村に貴平といふ字がある。言ひ傳へによると、源平時代に平家の落人が来て草を刈り分けて一本の大木の所に家を造つて暮してゐた。それで昔は木邊キベと稱してゐたが、後に貴平となつたといふ。又次の様にも云つてゐる。南北朝時代に、豊西村一帯は見渡す限り草原で一軒の人家もなかつた。所へ後醍醐天皇の皇子様が家來を従へられて、今の貴平の地に居を定められた。都より餘り遠くなく、まだこの豊饒な土地に於て時節の來到するのを待つて再び都に向はんと、一時の住所を定められたのが、遂に永住の地となつた。それから此の地に貴い方のお住居になつた處だからとて貴平と稱するに至つたと云ふ。(本多みち)

○ 三ヶ日の地名

(引佐郡三ヶ日町)

中の郷は姫街道屈指の繁華な地であつたが、昔火災があつて三日ほど續いた爲に三日火と稱

するといふ傳説がある。又或飛脚が京に上るにあと三日路といふより起つたといふ話もある。又昔八王寺宮に毎年正月三日に流鏑馬の嘉例があり、それは非常に有名であつたので三日矢場と云つたのが變じて三ヶ日の地名となつたのださうである。(山本ふみ)

昔皇太神宮をお定めする時に、伊勢にするか、引佐郡の三ヶ日にするか、と云ふ問題でいろ／＼調べた處が、三ヶ日は一箇所缺けてゐる處があると云ふので、伊勢に定まつたのださうである。(山本ふみ)

○ 鶴 退 治

(引佐郡三ヶ日町)

三ヶ日町に鶴代、尾奈の二區と胴先といふ半島が猪鼻湖に突出してゐる。昔、源三位頼政が鶴といふ怪物を退治した時、矢が當つて鶴の體は三つに飛び散り、頭が落ちた處を鶴代と云ひ、尾の落ちた處が尾奈となり、胴の落ちた處が胴先となつた。

今でも尾奈のある家にその矢が残つてゐると云ひ、その家は大矢と云ふ姓を名のつてゐる。又矢の落ちた處は矢塚とよんで、現在でも小さい塚がある。(本多みち)

○ ス ロ ウ

(引佐郡鎮玉村)

鎮玉村混川小學校の西方に「スロウ」と呼ぶ處がある。井伊氏の城跡であると傳へられてゐる。「スロウ」は城の訛らしい。(本多みち)

○ ごろごろ坂

(引佐郡都田村)

都田村一色にごろごろ坂といふ處がある。

都田村と中川村との堺に一本の大杉が立つてゐる。それは官有であつた。或夜の事何者かゞその杉を伐倒してしまつた。さあ大變、役人が来て色々取調べたが遂に判らず、仕方がないので兩村のどちらかゞ一人の犯人を出す事とし、一色から其の犯人を立てゝ詫びた。それ以來毎夜火の玉がその坂をごろごろ轉がる様になつたので、其處をごろごろ坂と云ふ。(本多みち)

十、海に關する話

○ 幽 靈 船

(賀茂郡仁科村)

昔まだ帆まい船(帆かけ舟)の頃の事、よく風上から向つて進んで来る船に出あふ。すん／＼此方の船に近寄る。これは以前海で死んだ人が化けたのだと云ふので、何かへ火を付けて其火を高くあげて海に投げてやる。すると其船は遠ざかつて行くといふ。又火の代りにむすびを握つて投げてやる。(山田かつ子)

(沼津市我入道)

大昔海で死んだ人の亡魂が、夜漁に出る船をおびやかしたと云ふ。普通船につけて居るあかりよりは少しぼやけた様な光がぼーつと海に浮んでゆられてゐるのである。「出た」といふのでおそれて船をそらせると、とんでもない方向に迷つて行つてしまふさうである。亡魂の出る道こそ正しい道であるとか。(芹澤いさ子)

○ 大 瀬 崎

(沼津市)

大瀬崎に天狗が祀つてあるが、夜天狗が淡水の池の側にある舟に乗つて朝になると上る。それは、朝早く其舟を見ると滴が舟から垂れて居るので判ると云ふ。大瀬崎に住む魚や其他のものを取つて持歸ると罰があたると今でも云つて居る。漁師は昔から此所に年に二三度は参る。

(芹澤いき子)

○ 汁かけ飯を食はぬわけ

(静岡市)

金比羅様は非常に汁かけ飯を嫌ふと云ふ。「汁かけ飯を食べなければ、どんな命の危い時でも一度はきつと助けてやる。」と云つたと云ふので、随分はかない命を持つてゐる漁師等は、御飯に味噌汁等をかけて食ふことを非常に嫌つてゐる。(牧田あや子)

○ 海 坊 主

(榛原郡御前崎村)

お盆の十三日の夕方晩くまで海で漁をしてゐると、きつと何か凶事があると云ふ。昔お盆の十三日に漁に出た漁師等が、あんまり釣れないので、もう少し釣りたい、もう少し

つりたいと思つて居る中に、すつかり日が暮れて仕舞つた。皆が「さあ歸らさあ」と云つて歸り支度をしてゐると、海の中からもつくりと大きな黒いものが出て來た。それを一人の漁師が見出して恐る／＼「そりやあ、なんだえ。」と云つたので、皆其の方を見ると、髪を振りみだした大きな海坊主だつた。さあたまらない。皆振へ上つて、身動きも出来なくなつてしまつたが、恰度其船の船頭は大變どきやうの大きい人だつたので、ぼんやりしてゐる人々に大聲で「さあ皆漕げ」と命令し、自分が先に立つて一生懸命磯の灯を目あてに漕ぎ出した。すると其海坊主も拔手をきつて泳ぎながら「柄長を借しよう、柄長を借しよう。」と云つて船へたぐりついて來るので、乗組の一人は柄長柄杓の底を打抜いて海へ投げ込んでやつた。さうすると船も、もう磯近く迄來て居るし、もう駄目だと思つたのだらう、海坊主はその儘消えて仕舞つた。漁師等は生きた心持はなくて船のともも廻さずに舳を陸の方に向けたまゝ引きずり上げて、がた／＼ふるへながら家へ歸つた。これは私の祖母の祖父の若かつた時代にあつた事實ださうだ。海の化物はよく柄長を借せと云ふさうだが、其時底を抜かずに柄長をやれば、その柄長で、水を船の中へ汲みこまれて船は沈められて仕舞ふといふ。(川口操)

○ 海 坊 主

(小笠郡横須賀町沖之須)

満天の星一片の雲もない海上を、大漁で遅くなつた歸りの漁夫達は、包みきれぬ喜びの色をあらはして、しきりに漕いで居た。突然すーつと生暖い風が舟のへさを過ぎたと思ふ間もなく、満天の星は何所へやら邊りは眞の暗、その上行手には大きな大きな小山の様な波が立つて舟を待つて居る。その大波の上に大きな黒い目ばかりきら／＼光る坊主頭がにゆつと突出て耳までさけた赤い口を開いてにた／＼物凄い笑を浮べて居る。餘りの氣味悪さに、さすがの漁夫達も、ぼうぜんとして漕ぐのを忘れてしまつた。その瞬間ぐら／＼舟はゆれて大波にのり上げ舟も人もその坊主頭も消えてしまつた。そして後は、何事もないさゞ波が星のまた／＼きをうつしてゐる。漁夫はその坊主に吞まれてしまつたのだつた。かうして一年に一度は限必人が海で死ぬといはれる。(横山テイ)

○ 亡

魂

(濱松市)

お盆の夜、釣の好きな人が海へ行くのに、経験のある人ならば必ず底なしの柄杓を持つて行くさうである。その譯は、其夜遅く海上にゐると、其海で死んだ幾多の亡者が出て来る。そして仲間を増さんが爲め、柄杓で船の中へ無氣味な音をたゞて水を入れるのださうである。その時其底なし柄杓を貸せば、唯入れる眞似するだけで水が入らないのださうである。

海でも山でも線路でも、人の死んだ後へ行くと、死神がつくと云ふ。それは、死んだ人には死番と云ふものがあつて其番に外れないと、いくら供養されても、浮ばないのださうである。そして其の爲、後から人の死ぬ様に招くのださうである。だから人の死んだ跡には行くのを恐れるのだ。(邊はな)

○

(濱名郡雄踏町)

祇園のお祭(六月十五日、但普通七月十五日)がすむ前に海に入るとカツバが来てシリコダマをぬいてゆくと云ふ。(山内きみゑ)

○ 盆の十四日

(濱名郡雄踏町)

お盆の十四日に海にゆくと海で死んだ人の死霊が現はれると云ふ。俗に海坊主とも云ふ。そして其の死霊が舟の水をかへ出すひしやくを貸してくれと云ふ。此時にはそのひしやくの底をぬいてやらないと死霊がそれで舟に水を入れ舟を沈ませてしまふと云ふ。(山内きみゑ)

十一、植物の話

○ 楠 木

(賀茂郡中川村池代伍軒家)

此處の山に二本の楠木がある。此の楠木に、何所から飛んで来た人魂でも必ずぶつかり、粉々となり、又再び一團となつて何所かへ飛び去ると云はれてゐる。其爲この二本の木は切らずに何時迄も残されて居る。(佐藤久恵)

○ 血の出る松

(賀茂郡中川村)

瀧山に一本の大きな松の木がある。昔、障子山と云ふ人が戦に負けてにげて来て、そこで戦死したので、その木の下に埋めたと云ふ。その松の木を切ると切口から血が出ると云ふので未だに切る人が無い。(土屋みどり)

○ 赤 松

(田方郡伊東町)

伊東家で供へた赤松が、昔、東林寺の庭にあつた。その赤松を打つと、血が出ると云はれてゐた。

ざつと六十年ばかり前、山火事があつて、その松の木も焼けた。それから十年たつて、山茶屋の主人が夢に「東林寺の赤松の下に、瓶が二つある」と告げられて、翌日住職を尋ねて、赤松の根元あたりを掘つた。告げの通り、二つの瓶が出て来た。その一つの瓶には鏡二枚、もう一つの瓶には、折れた刀が三片入つてゐた。その刀から、赤松の下が河津三郎の墓だといふ事が云ひ傳へられた。(尾崎敏子)

○ 十 本 松

(田方郡伊東町)

致須美海岸汽船扱所の裏にある老松は、昔は十本あつたさうであるが、今は七本しかない。その下に元祿十六年の津浪の記念碑がある。(三枝菊江)

○ 頼朝鐘かけの松

(田方郡三島町)

三島町芝町の法印塚に、頼朝が鐘をかけて軍勢の驅引の爲に用ゐたと云ふ二抱もあるやうな松があつた。然し此松は昭和七年の熱海線の工事のために切取られて、今はその痕かたもな

五。(五味松子)

○ 大山の逆竹

(田方郡田中村神島)

五百四十米の山をのぼりきると二坪位の平地がある。この北と東南は全く絶壁だ、その絶壁を下ること一丈にして逆竹をみる事が出来る。だが取ることは容易なことではない。逆竹といつても上に根はない。枝葉が逆生してゐるので奇とせられてゐる。

昔頼朝がこの山に登つて携へてゐた馬の鞭を地中に立てたのが、根を生じて遂に逆竹となつたと傳へられてゐる。

昭和七年よりこの山で植物を取ることを縣より禁ぜられた。こゝは畠山入道々誓の城金山城といつて豆州志にみへてゐる。太平記にも三津、金山、修善寺の三城を構ふとある。

(山口とみ)

○ 哭き銀杏

(郡浮島村)

昔、浮島村井出、大泉寺にある大銀杏の中で、木魚を叩くか度々したと云はれて居る。

(原井美智子)

○ 首かけ松

(駿東郡浮島村)

昔、幼名を今若丸、後の阿野禪淨禪師が鎌倉で首をはねられた時、其首が飛んで来て、浮島村井出の大泉寺の大松にかゝつたとの事である。(原井美智子)

○ 蛇松

(沼津市港町)

駿東郡清水村黄瀬川に若い修業者が住んで居た。或時みめ美しい一人の娘が尋ねて来た。そしてつい夫婦約束をした。がこの娘が或日のこと蛇になつて仕舞つた。そして港町の方に逃げて来た。若い修業者は餘りのことに轉倒して、發狂して自殺してしまつた。

その蛇は沼津狩野川口で死んだ。その跡に大蛇の這つた様にまがりくねつた松が地面に生えてゐる。(野田美津江)

(補一) 沼津市狩野川の西岸の河口の松林中に蛇松がある。昔二人の相愛の者があつて、其の女の方が殺されたが、其形がすぐ蛇の如き松となりうねつて居た。それを一寸でも傷付けると血が流れ出たと云ふ事であつたが、それが最近に到り、松やにである事が判つた。(百地嘉代子)

(補二)狩野川の川口に望んでゐる部落に近い處に松林がある。

昔、法印と云ふ若い修験者が住んでゐた。或日の事一人の美しい娘と結婚の約束をした。所が其娘はごうしたはずみか氣が狂つた様になつたので、直に法印は之を殺した。其の瞬間、女は、蛇のはつた様な形の松に變じてしまつた。後或人が此木に斧をかけると血が流れ出たといふ話である。(岡林よしゑ)

○ 鐘掛けの松

(沼津市)

香貫山の頂上に近い所にある。昔辨慶が鐘をかけてついたらと云ふ話がある。三抱えも四抱えもある様な大木であるが、一寸根にさはつても樹全体が搖ぎ、一葉にさはつても根まで搖れると云はれて居る。(岡林よしゑ)

○ 六代松

(沼津市)

昔北條時政が京都を守護してゐた時、平家の一族が京都の奥の山寺に隠れてゐる事を聞いて直に之を圍んで了つた。北條方では大騒ぎをして圍んだが、あまり平家の哀れな様に折れてしまつて、六代御前をのがしてやつた。其後、高雄に居る僧の助けによつて頼朝の許しを請ふ様に願つた。次第に東に下つて、たう／＼千本松原に到つた。北條氏が馬で追つて之を斬らうと

したが、どうしても斬る事が出来ない。皆躊躇して居る中に前の高雄の僧が馳せつけて、遂に鎌倉頼朝の許を得たと傳へたので、漸くにして免れた。其の時坐つた松らしい。其の高僧は文覺上人だといふ。(岡林よしゑ)

○ 曼陀羅松

(沼津市我入道)

我入道の曼陀ヶ原にあるもので日蓮上人が牛臥に來錫の時、津波除けの祈願として、曼陀羅をかけた松であるといはれてゐる。此の松は十年も前に枯れて了つて、現今のは其の側にあつた同じ位の大きさの松を代りに云つてゐる。(岡林よしゑ)

○ 天狗の松

(富士郡田子浦村)

昔、今の新濱の東の平松と云ふ處に、大變大きい、其後に人一人位は隠れてもわからない様な大きい松の木があつた。昔は其處から毎晩の様に天狗が出たといふ事で、其の所の人達は薄暗くなればもう出て歩く人もなかつたさうである。明治四十年頃迄其木があつたさうだが、皆氣味悪がつて其場所で木を焼いてしまつたと云ふ。(望月貞子)

○ さかさ柳

(富士郡芝宮村)

源頼朝公富士の巻狩の折、羽耐山中の古池の端で、晝食なされる時、柳の枝を箸として食せられ、それを何の氣もなく地に挿されたが、柳の事とて早くも元氣な芽を出し成長して行つた。

而も、さかさに芽をふきながらどん／＼大きくなつてゐるのであつて、珍しいとばかり見る者多く、遂に逆さ柳の名がつき、現在も二本、頼朝公の足跡を印するかの如く老木を茂らしてゐると。(佐野あき)

○ お産の松

(富士郡大宮町野中)

詳しくは知らないが木花咲姫さんがお産なされた所だと云ふ。(羽柴富貴子)

○ 衣掛の松

(富士郡大宮町)

木花咲姫さまがお産する時、衣を掛けておいた松だといはれる。

浅間神社裏一町程の所にある。(羽柴富貴子)

○ 本光寺の銀杏

(富士郡大宮町黒田)

此の木のところ、日蓮上人が、身延へ行く時に休んだといふ。昔の木は折れてしまつた。今の木は澤山のホイ(枝)が集つて出来たものだ。

潤五月十五日に一人の旅僧が銀杏の木の下で休んでゐるのを、近くの田で仕事をしてゐた田中の遠藤藤左衛門夫婦が見て、お盆へおみきとカシヤモチと、それに錢一サシをのつけて(乗せて)持つて来てやつた。この時その藤左衛門の妻が、年に似合はぬ子供を抱いてゐるのでその僧(日蓮上人)が聞くと、嫁に早く死なれて、この子供を育てるのに乳がなくて困つてゐるといふ話をした。と和尚さんは、それは困るだらう、たやすいことだから乳の出るやうにしてやらうといつて、銀杏の木の乳房へ針を通し汁を出してその婆さんに飲ませた。すると婆さんの乳が出て子供はすく／＼と大きくなつたといふ。

今でもその時の繪が額になつて、本光寺の本堂にかけられてゐる。又柏談議の時に、「主は遠藤藤左衛門、夫婦の者のやさしさに、盆におみき、かしはもち」と必ず一回唱へる。

この木の實を食べると乳が出る様になるといふので、乳の出ない人は御供物を上げて頂いて来る。今でも、乳の出ない人が多い時には澤山實がなり、少ししかならない年には乳の出ない

人が少くて貰ひに来る人も少ないので、いつもいづばいをうづ（一杯一杯にいく）様になつてゐる。

藤左衛門の家は未だに續いてゐる。その家には大變寶物があるといふ。（戸塚むら子）

○片葉笹

（庵原郡高部村）

梶原景時が國侍に追ひつめられて後の山に逃げ込み、尙も奥深く進んだ。その道々、摺墨が喰つた、と云はれてゐる小笹が、約一町の間今も半分喰ひ残されてゐるやうに生えると云ふ。これを片葉笹と呼んでゐる。（大木あき）

○道白の銀杏

（安倍郡千代田村北沼上宇足澤）

道白上人が植ゑたと云はれる。此銀杏の葉を取ると、白い乳液を出すので、女の人で乳が出なくて困つてゐる者は、白紙を切つて此樹に結び付けて祈ればよいと云はれてゐる。現在は天然記念樹になつてゐる。（青木きみ、伊良むめ、原川美江）

○八楠の大杉

（志太郡焼津町八楠）

志太郡焼津町八楠にある牛田橋にさしかゝる右側に、辨天様を祀つた小堂がある。此處のいはれについて老人に尋ねて見たら、次の様に話してくれた。

昔橋のたもとに三抱も四抱もあるといふ大きな杉の木があつた。雨のしよぼく降る日にはその梢にちら／＼火が見えた。之は本當の事で自分らも度々見た。之が何かの拍子に倒れてしまつたので、此所の者が挽いたら、崇られて屋敷へ火の王が轉げ込んだと云ふ。そこでお詫びに苗木を植ゑたが枯れた。昭和二年頃大水で牛田橋は真中が流れて通行出来なくなり、新しく今の橋が出来上つたのだが、此の杉の木が邪魔になるのでお祓をして頂いて挽いたが、ひどくひつちかられて長く土方は休んだ。そこで今の辨天様を祀つて供養する事になつた。枯木の根（直徑一尺許り）は堂の後に置いてある。（神尾すゞ）

○五本松

（志太郡焼津町）

牛田橋に向つて右の方の土手を登つて一町程行くと、左側に小さな地藏堂があつて、毎年八月廿四日におせがきを讀んで居る。昔此處には、根元から分れた五本の枝が、美しく擴がつてゐる盛な松があつた。これが卅七八年前に大風に倒されてなくなつてしまつた。今ではその後かたもなく松もないのに此處を昔ながらに五本松と云ひ、その地藏を五本松の地藏さんと呼

んで居る。その大風の吹いた時、木で刻んだ地藏さんは水に流されて仕舞つたが、石の地藏さんが後に残つて居たので之を祀つてある。木像の方は流れて伊豆に行き此處で拾はれて大切にまつられて居ると云ふことである。(神尾すい)

○ 慶林の御座松

(榛原郡川崎町字西町)

細江字東慶林の東部、寄子河口に近い畑中にある。高さ約六間、百歩の地域を覆ふ大きな自然の美しさを保つ大松である。二百年前、或お公卿様が大きな鹿に乗つて此所まで来た時に、鹿が死んだので、仕方なくその鹿を埋めてその上に莫産をかけて葬り、その上に松の木を植ゑたのが、今の御座松であると云ふ。所が近年そのお公卿様が泊つたとか云ふ家の女の子が病氣になり、非常な重態で明日にも命が危いと云ふ夜に、夢枕に「自分は御座松の下に埋められた鹿だが、誰も祭つてくれる者が無い。それで私は祭つて呉れ、ば病氣はすぐ癒して上げる。決して嘘でない、嘘だと思ふならば振袖の着物を見なさい。」と告げられたので、明朝箆笥をあけて着物をひろげると、袂にありありと鹿の姿が寫つてゐたと云ふ。それで大騒ぎとなり、鹿を祭るやら、御座松の側に祠を立てるやらした。又それを聞いた人達は我も我もとお詣りをし遠方からも参詣人が多かつた。これはつい近頃の話である。(海邊春子)

○ 乳母松—袖取松—

(榛原郡川崎町)

仁田口に一株の老松がある。根元で梓の木と互に交叉し相纏つて双樹一体となつてゐる。昔勝間田城が落城した時、乳母某が此地迄来て終に此所で相果てた。そこで遺骸を此所に埋め、標として植ゑたものが此の松だと云ふ。一に袖取り松とも云ふ。此の前で倒れると袖を取られる事があるために云ふのださうだ。此の松の根の岐れた間に小さい瓦焼の祠を置き、竹の折掛に茶湯を入れお香煎と共に供へるを見る。

此樹についての断片的な言傳へとしては、

松の木の下で轉ぶと袖が取れると云ふ。

又 お金を拾ふと云ふ。

又 足がくちけると云ふ。

袖取松のことをば、うば松又は、ばんば松とも云ふ。

人が乳母松の根のところの神様に、錢やお米を上げると、他の人が下げるが、その錢は直ぐ何か買はないといけないと云ふ。(海邊春子)

○ 能満寺の蘇鐵

(榛原郡吉田村)

吉田村片岡にある吉祥山能満寺の大蘇鐵は、高さ二丈五尺、枝は四方に開いてその數、數十條の偉觀である。安倍清明の寄附したものと云はれる。この蘇鐵の正体は龍だと云ひ傳へられてゐる。(本多みち)

(補) 徳川家康が駿府城に居る時に、能満寺に来てこの蘇鐵を非常に所望した。そこで住吉濱から船で清水港に廻送し、城内に移植した。するとこの蘇鐵は夜な夜な、「能満寺へ住なうく」と泣いたので、再びこの地に送り返した、と云ひ傳へられてゐる。(萩原みな)

○ 血 松

(榛原郡萩間村)

昔、萩間村東萩間鈴木八平氏の祖父某が馬を連れて西原へ草刈に行つた。原へ馬を繋いで置いて一生懸命に草を刈つた。

そして刈草を一把宛山から運び下したが二度目に行つて見ると馬が居ない。血眼になつてあちらこちらを探してみると、遙か下手の七曲坂と荒川坂の出會つた處の松に引つかゝつて死んでゐた。非常に驚いて近所の人達を頼んで馬は漸く下した。そこで其の人達が、この松を置く

と何時までも思出の種になつてよくないから、いつそ切つてしまつた方がよいといふので、截らうとすると、血がにじみ出て來た。

人々は驚いて遂に誰一人として切り得るものがなかつた。それ以來此の松を誰いふとなく血松と呼ぶ様になつて今も残つてゐる。(原木すづ)

○ 十二 雙 様

(小笠郡横須賀町沖之須)

村から餘り遠くない山の麓に松の木のコもりした所がある。そこには高い石段があつて、それを登り切ると小さな祠が雨にさらされて居る。此の祠は十二雙様と言つて、昔大津波があつて一面水に浸つた時、不思議にも此所の松の木の本根に十二雙の舟が連つたのでかう呼んで祭つてある。(大石よね、横山テイ)

○ 提 灯 松

(周智郡三倉村)

靈是官林中に大きな黒松があつた。非常に大きくて、その植ゑた年代も判らぬといふ大木で第一の枝がすべての木の高さよりも高い所に出てゐるし、周りは大人六人もかゝつて抱きかゝへるといふ程だつたといふ。それを掛川町から見ると、七月のお盆十五、十六、十七の三晩そ

の上に燈が見えたといふ。それによつて提灯松といつた。

昔その木を切らうとした人があつたがその前の晩になると急に病氣になつて切る事が出来なかつたとか。或は双物を入れると、血が出て切れなかつたとか。が、近年になつて切られてしまつた。(鈴木とし)

○ 蛇 繫 松

(磐田郡二俣町)

烏羽山にあつたが、今は無い。昔こゝで大蛇をきつたといふ。(鈴木とし)

○ 物 見 松

(磐田郡二俣町)

二俣城跡にある。これに上つてあたりを伺つたと云ふ。(鈴木とし)

○ 野口八幡公園の楠

(濱 松 市)

濱松には、逃げて勝つた徳川家康の遺跡が、三百年後の今日依然として澤山残つてゐる。野口八幡公園の雲立の楠は其の随一である。

元龜の昔である。武田勢に追ひまくられた彼は逃場に窮した結果件の野口の楠の洞穴に入つ

た。さうして一心に弓矢の神を念じて追手の發見せぬ様に小さくなつて、闇の中で眼をキヨロ／＼してゐると、不思議な事には楠の頂上から白雲俄に巻き上ると見る間に、白雲は二三度く／＼と廻ると白髮の御神体と化して天上した。

味方の者は、正しく武田勢を滅ぼすの機會なりとして、矢庭に鬨の聲をあげて敵勢中に亂入した。家康は涼しい顔をして楠のウロからノソ／＼と這ひ出し進め進めと激勵した。武田軍は利あらずと見てさつさと退いた。この間に家家は易々と濱松城に入つて身を全うした。翌朝楠の周囲を見ると神馬らしい蹄の跡が歴然と残つてゐた。家康はこゝに八幡宮を祀つた。

一説には楠でなくてクモの木から白馬に跨つた御神体が天上したとも傳へられてゐる。何にしても巧に芝居を打つて味方を勵激した事は事實である。(中村歌智子)

○ さざんざの松

(濱 松 市)

濱松野口八幡神社の東方に「さざんざの松」といふのがある。今のは何代目かの松で、秋風に枯枝殖え、當時をしのぶすがもなき、樹身わづかに七八尺の松になつてゐるが、祖先は甚だ大木であつたらしい。古老に聞くと、昔は八幡神社の東方約五丁の所にあつたといふ。が大風のために倒れ伏したが不思議にも五丁の距離を幹は空に向つて弓なりに圓を描き、下の八幡

神社の近くまでとゞいた。樹身からは再び根を生じたといふ。

或古人の話にこんな事がある。一代の畫聖狩野元信が或時濱松の宿に泊つた。其の翌日彼は有名なさざんざの松を寫生すべく根本に到りデッサンだけして傳馬町の旅館に歸つた。いよ／＼名墨をたつぶり筆にふくませて書き上げんとすると、どうも枝振が面白くないので再びさざんざの松を訪れた。

松は涼しい顔をして元信をひやかす様にさざんざ／＼を續けてゐる。デッサンを開いて見比べる。アツと彼が驚いたのも道理、それは似ても似つかぬ物だつた。今度こそはと入念に下繪を書いて元信は宿に歸つたが何度筆を取つても意の如くならず、そのみか例の松はそこの令嬢が着物を着かへる様に毎日枝根をかへてすまし切つてゐる。流石の畫聖も彩管を投げて嘆三嘆、神のこと吾の及ぶところにあらずと遂に思ひ止つたと。

星移り月變り、今は何代目かの松が將に枯死のなげきを秋風に訴へてゐる。(中村歌智子)

○ 雲立の楠

(濱松市)

濱松市八幡町にある八幡神社の拜殿の左側に、三抱も四抱もある大きな楠の木がある。非常によく茂つて、根本には大きな穴が出来て居る。それに「雲立の楠」と刻んだ石が立つてゐる。

る。

これは以前は御旗の楠といつて居たといふ。それは前九年の役に八幡太郎義家が奥州に向ふ途中、この楠のもとに源家の旗を立て、武運長久を祈つたからだと言つて居る。それが「雲立の楠」といふ様になつたのは、徳川家康が三方原の合戦に敗れ此所に退いて祈願をこめた時、忽ち瑞雲が現れた。それからだといふ。(金原せつ)

○ 小判松

(濱松市)

市内の刑務所の近くに大きな松があつた。それが沖を通る船から見ると、小判が一ばいなつてゐる様に見えたと云ふので、小判松と云つた。現在はない。(金原せつ)

○ 幡懸松

(引佐郡三ヶ日町)

大福寺境内の西北隅に、幡懸松とて、廻り二丈餘、實に千歳の壽を保つたかと思はれる松樹があつたが、明治初年に枯死したとか。

鳳來山の幡教寺(現大福寺の舊名)を現在の地へ移轉の際、時の和尚は開山の故智に倣ひ、幡を高く投げ上げて占つた。幡は高く舞ひ上り、紫の雲につままれて遙にとんで、堂山の麓の

松の梢に懸つた。よつて、瑞幡を收め、堂塔を建立して、移轉した。時の帝の勅願所となり。勅額を賜ひ幡教寺を改めて、大福寺と號した。(堀川てる子)

○大楠

(引佐郡三ヶ日町)

何時の頃に芽生えたのか、分らないけれど、五風十雨の恵をうけ、數知れぬ星霜を重ね、世にも珍らしい、大木よ、神木よと、はやされた日比澤の楠は、幹の廻り實に五丈一尺、高さ十二三間、幹枝張ること五畝に及び、根は四方に擴がり、所々に狐の穴等があつた。冬時は狐が朝早く等啼くことあり、人々が「楠木様が啼く」等と云つてゐた。それが不思議にも明治十年風も凩いだ靜かな朝、百雷の一時に落ちる様な大音響と共に、大きな枝(枝とは云へ、なか／＼木の幹にもまさる)が落ちて來たが、其の枝の空洞に巢くつてゐた朽繩蛇が枝と共にちぎれて落ちた。其後明治二十一年再び、同様の事があつたと言ふ。樹下に楠木神社、稻荷明神の二社を祠り、毎年二月初午の日を例祭とした。上下の旅人の立寄る者が多かつた。昔薩州侯が家臣に三間柄の槍を横にかまへさせ、この木をへだて、之を見たが、一向に穂先も石突きも見えなかつたと言ふ。如何に大きかつたかがわかる。明治二十三年商賈に買はれて、其形を斷られた。昔、東照權現が此の空洞にかくれたとか、又は忠臣正成は此の處に生れたのだとか、種

々の傳説もある。(堀川てる子)

(引佐郡龜玉村)

濱名郡赤佐村小野の山に石碑の様な石が立つて居て、松が五六本生えて居る所がある。これは戦國の頃徳川家康が武田氏と戦つて敗れ、濱松へ逃げる途中、此處に隠れて敵の目をくらましたと云はれる。(大西とき子)

十二、動物の話

1 蛇

○ えびす山

(賀茂郡濱崎村)

濱崎村の須崎に、えびす山といふ一寸した山が海に突出てゐる。昔こゝに大蛇が住んで居た。大きなほら穴に棲んでゐた、それが、須崎といふ區を今の様に盛にし、海の幸を作出したのだと云はれてゐる。この蛇は澤山の水がめを作つて、その穴に入れて置くと云ふ。今まで誰一人として此山に近づいた者は無かつた。處が今から五六十年前、海に入つて亡くなつた人があつた。神を信仰して居る或人に伺ひをたて、貰ふと、えびす山の蛇が怒つて殺したのであつて、その骨はほら穴に在ると云ふ。又いふのはこのえびす山を公園とし、其大蛇を神として祀ればその罪をゆるしてやる。けれども若しさうしなければ須崎全體を焼いて終ふと。そこで村人は騒ぎだし、その次の年早速、そのえびす山を公園にした。その時そこにあつた洞穴から、數

個の水がめと人の骨とが出て來たと云ふ。(大野しげ)

○ 蛇ヶ狭

(賀茂郡中川村)

小杉原に蛇ヶ狭と云ふ所がある。昔、甲州から絹商人が來て、蛇に呑まれた。その人の子供が二人あつたが、その仇と云つて甲州からわざ／＼伊豆に來て、蛇に弓を引いた。すると大蛇は大變苦しんで、そこで死んだ。それで蛇ヶ狭と云ふ。この近くに大蛇院といふ寺があるがこれも蛇に關係があるのでこの名がある。(土屋みどり)

○ 蛇が橋

(田方郡三島町)

頼朝が毎日三島大社にお参りに來た。或日の歸り、非常に雨が降り、今の間宮の所を流れて居る狩野川の支流(名もない川である)は雨のために多量の水が出て、どうしても渡ることが出来なかつた。すると蛇が現れて、橋になつて渡してくれた。これを蛇が橋と云ふ。

(五味松子)

○ 三つ股川の大蛇

(富士郡島田町)

三つ股川（今の潤川の河口）の事である。

二三〇

昔、此の川口には、一年に一度づゝ見るからにすごい大蛇が出て、年十四歳になる女の子を一人づゝ食べる。もし女の子をやらないと、村人達に大變な禍をするのださうである。それで致し方なく十四歳の女の子を犠牲として、籠の中に入れては、その大蛇に與へるのであつた。或時、又しても、娘もやらなければならぬ時が來たが、誰も籠に入る者が無かつたので、村人は非常に困つて居た。

其の時分、大宮の方に、或一人の女の子があつた。その子はか弱い母親と唯二人で生活して居たが、貧しい身の上であつたから、日々の暮しにさへも困つて居たので、孝行心に富んだ此の娘は、自分で死んで、母親の爲に犠牲とならうと、決心した。そして、その代價として、幾兩かのお金を母に與へてくれと云つて籠の中へ入つたのであつた。

恰度、其の折、此の川づたひに、一人の和尚さんがお妙號を稱へながら、その傍へ近づいて來た。そして仔細を知つて、一心に聲高らかに、何度も、何度も、お經を唱へるのであつた。すると間もなく、大蛇は非常に溫和しくなり、何の手出しも爲さず、すこゝと歸つてしまつた。そこでその女の子は助かり、和尚さんも元來た道を又とぼくゝと歸つて行つた。

その和尚さまと云ふのは、傳法村法壽寺の住職であるが、常は名もない、一雲水の坊さんで

あつた。

さて坊さんは、一日中の托鉢を了へて、夕方宿坊へ歸り、夜になると直ぐ寢てしまつた。

ふと夜更けて、枕元に立つた一人の女の子が言ふには、

「私は昨日の大蛇です。これからは決して悪い事は致しませんからどうぞお許し下さい。私はその形見として、私のこけら（うろこ）を、三枚置いて行きますせう。」

とこけらを三枚置いて靜かに去つてしまつた。

和尚さんは、はつ！として目を覺ました。するとどうだらう。確かに夢で見たとほり、枕元にこけらが三枚置いてあるのであつた。

そして、その年から大蛇の姿は見えなくなつた。

（町田つや）

○ 小池 大蛇

（庵原郡富士川町）

中之郷小池の田圃は今は青々とした稻が植はつてゐるが、昔は一面廣々とした底無し池で

あつた。それで四十九の近くにあつた地藏様に参詣する蒲原の人達は、舟で此池を渡らなければお参りが出来なかつた。然しそれは非常に大變な事だったので、その廣い小池ヶ淵の傍にある山にお花を立て、對岸のお地藏様を遙に拜み参詣を済ませた事にして歸る様になつた。それでこの山に花立山と云ふ名が付いた。

その頃富士川は大樂窪、寺山の下を流れてゐて、大樂窪、寺山の間にあつた山は富士川の急流に洗はれた爲に薄くなつてゐた。

その頃の小池ヶ淵の物凄く魔の底と云ふ處には、二三丈もある大蛇が住んでゐて、小池大蛇と呼ばれて怖れられてゐた。

或年の事、早が幾日もく續いて、田圃の稻も枯れさうになり、所々干割れする有様になつたことがあつた。中之郷、蒲原の百姓達は大變に困つて、どうか雨が降る様に、水が出る様にと願つてゐた。小池の村には大層信仰深い太七と云ふ若者が住んで居た。太七は氏神様である宇多利神社に心願こめて、「どうか雨を降らせて、百姓達の難儀をお救ひ下さい」と毎日祈つてゐた。すると早が續き始めてから四十五日目の朝の事、一心に祈つてゐた太七の目前に白鬚をぼうぼうとはやした氣高い老人が現れて「この早は小池大蛇の仕業である。今大蛇は大變飢えてゐるから一人の美しい娘を池に捧げなければ雨は降らぬであらう」とつけられた。この話

を聞いた村人達は色々相談の末、池に捧げる娘を太七の許嫁であつた蒲原の長者の娘、蒲原小町に決めて仕舞つた。これを聞いた太七は大いに驚き悲んだが、どうにも仕方がない。かくて或日の夕方蒲原小町は小舟に乗せられて舟と共に池深く沈められてしまつた。これを見てゐた太七の目からは、大粒の涙がはら／＼とこぼれた。

と、俄に天がかき曇つて見る中に大雨となり、そのおかげで村は救はれる事が出来た。

それから太七はどうかして小池大蛇を退治したい、小町の仇を討ち度いと、それ許り心掛けて居たが、間もなく同じ思ひの蒲原長者と力を合せて仇討をする事になつた。附近の若者多数を集めて、それぞれ太刀弓矢の武器を持たして池の周りを取り圍み、太七等は又武器を持つて大樂窪と寺山の間を薄くなつた山の麓に待つてゐた。又一手は金丸山で鐵を煮てどろどろに溶かし、それを小池ヶ淵に流し込んで大蛇を苦しめて池から追出す事になつた。

熱い鐵をどし／＼流し込むと、金氣の嫌ひな大蛇はすつかり弱つてしまひ、その苦しさに耐え切れず池の面に出て来て狂ひ廻つた。それと同時に金丸山からは黒雲が湧き出して物すごい嵐になつて仕舞つた。これを見ると若者達は、それ出たぞ、逃すなとばかり、弓を射る者もあれば石を投げる者もあつた。増々怒り狂つた大蛇は太七の居る方を目掛けて飛びかゝつて來た。太七は太刀を抜いて、大蛇の頭を目掛けて切りつけた。矢がさゝり、石が當り、刀で切ら

れて血だらけになつた大蛇は、ついに池の外へ逃れようとして太七等の居た後の山を突き破つて仕舞ひ、向ふ側の山の下を流れてゐる富士川へ落ちて死んでしまつた。

大蛇の血で赤く染つた小池ヶ淵の水は大蛇が突き破つた山の穴からどんどん富士川に流れ込んで、池は空になつてしまつた。そして小町の乗つて沈んだ小舟もその底から出て來たと云ふ。

それからは、大樂窪から寺山まで續いてゐた山は今の様に切れて仕舞つた。その頃すぐ山下を流れてゐた富士川は今ではすつと東の方へよつてしまつて、その頃水の流れてゐた所には澤山の人家が建ち並んでゐる。花立山は今でもあるが、四十九の近くにあつた地藏様は今では京都の近くの關と云ふ所に行つてゐると云ふ。

その時、空になつた池は、今の様な田圃になつたが、他の田圃とは違つて、大變底深くて、入ると何處まで埋まるか分らない様な處もある。それでこんな話が残つてゐる。ある時若いお嫁さんが家の人と一緒に田の草取りに出懸けた。暫く取つてゐる中に家の人があふと氣が付いて見るとお嫁さんが見えない。不思議に思つてよく探すと、お嫁さんの身体がすつかり泥の中に沈んで仕舞ひ、冠つてゐた菅笠だけが田の面に浮いてゐたと云ふ。現在ではそんな事のない様に、深い所には、巾三尺位の板を梯子の様にに入れてその上を傳つて歩きながら田の草取り

等をしてゐる。それでも腰の上まである様な處が所々にある。又二間位の竿を通してもまだ底に届かない所もあるさうである。その邊の田圃は畦道を歩いて、蛙道がゆら／＼と揺れる。

(遠藤梅子)

○ 平澤の蛇

(静岡市)

女の子が四人ばかりで草薙の山によむぎ(蓬)を摘みに行くと、變な女の人が出て來て「まあ、おまつち(お前達)は、恐ろしい事だ。平澤で取れた蛇を、夢枕が立つたのでこの山に放したばかりだ。早くお歸り」と云つたので急に恐しくなり急いで歸つた。道は一筋なのにその女の人の姿は、子供達にかう告げると、もう何處にも見えなかつた。女の子達は家に歸つて家人に告げると、平澤で一丈餘の蛇が出て、生浦りにし、見世物にする筈であつたが、夢枕が立つて放す様にとのことなので草薙の山に放したといふ事であつた。(杉山ヒロ)

○ 男神と女神

(榛原郡萩間村)

大昔、男神の石灰山には雄の大蛇が棲んで居り女神の帝釋山には雌の大蛇がすんで居た。帝釋山上には其の大蛇の穴と稱せられる空洞がある。男神の山の方は、昔はあつたさうだが人

爲的に山が變化したので現在は見當らない。

此の二匹の大蛇は時々往來した。田に稻のある時は其の通つた所、五六尺が幅といふもの、稻は泥中に布かれ、里人はその顯著なる跡にたまげたといふ。

帝釋山上のお宮へ毎夜燈火をつける人が、或時も何時より一寸遅かつたが、例の如くやつて行つて、今にもお宮に着かうとする所で、非常に大きな松の木が横はつて居るのを漸く越え、あかりを上げてさて歸つて來ると、不思議松の木がない。

そこではじめて大蛇であつた事に氣付き、急に恐ろしくなつたがやつと家へたどりついたといふ。

此の二匹の大蛇は兩地の主であると云ふところから、雄の棲んでゐた方を男神、雌の棲んで居た方を女神と云ふ様になつたといふ事である。(原木すづ)

○ 大蛇 切り

(榛原郡萩間村)

萩間村蛭ヶ谷に、昔、丑さんといふ農夫が住んで居た。

丑さんは大變よく働くので家の工面も追々よくなるし、村の人達からも褒められ者であつた。夏になると毎年の様に丑さんは朝早く牛に乗つて出かけた。所が或日小瀧の谷の入口まで

來ると自分の行手に途をはさんで、大蛇が、山から路傍の大木へ橋に掛つて居るではないか。而も牛に乗つて居る丑さんの目八分の所である。

丑さんは魂消て口もきけぬ程に驚いた。餘程歸らうかと思つたがそれでは大蛇に見込まれてどんなことをされるかわからぬと思つたので、大勇猛心を起して追はうとしたが、動かばこそ、爛々たる眼炎の舌物凄く、丑さんを睨みつけて居る。

然し丑さんはもう驚かなかつた。却つて憎惡の心がつて來た。

「おのれ何時までも防害する氣か」と腰の鎌を取るが早いか二つになれと切つて捨てた。然し其の時不思議な事には大蛇の頭が路添ひの川の淵へ飛込んで何處へ行つたか行方不明となつてしまつた。

丑さんは別に氣にもとめず何時もの様に草を刈つてお晝頃歸つて來た。お茶を沸かさうと思つて茶釜を見たらあつと魂消た。

それもその筈、朝丑さんの爲に切られた大蛇の頭が飛出したのである。それ以來丑さんの家には不祥事が頻繁に起つたとの事である。

又大蛇の頭の飛込んだ淵の水を飲むと喉が痛くなるさうである。

だから今でも誰一人として此處の水を飲むものはない。(原木すづ)

(小笠郡三濱村)

木挽が毎日山の奥へ木を挽きに行つた。妻が辨當を持つてくるのだが、或日、いくらまつても来ない。心配になつて途中迄見に行くと、妻は澤のくちで大蛇に吞まれて死にかゝつてゐた。側にある大きな木にしつかりつかまつてゐるやうに妻に言つて、木挽は大蛇を鐵砲でうつた。すると、とたんに妻の手が木から離れて蛇と妻とは一所に谷に落ちてしまつた。木挽はこれから六部になつて日本中を廻つて歩いたと云ふ。(松下きん)

(小笠郡三濱村)

或人が清ヶ谷と云ふ所を通りかゝると道に蛇がねてゐた。

そうつと通つたが蛇は目をさまして後を追つてきた。此の人は西大谷迄にげて來た。そして或家によつて「今わしは怖い目にあつた。蛇におはれて漸々今こゝまでにげてきた」と言ふと、此の家の人がそれでは「肌をぬいで見よ」と言つてぬがせて見ると、背中が眞黒になつてゐた。そこでお酒を吹いてはもみ吹いてはもみしたら良くなつたと云ふ。(松下きん)

大

沼

(周智郡城西村野田)

今の野田の大沼と云ふ所は、昔は大きな沼で、そこには大蛇が住んで居たと傳へられる。それでそこを通りかゝる前には、草鞋のひもをしめなほして、急ぎ足で通らなければならなかつた。今でもその草鞋のひもをしめなほした所は「くつうち場」として傳へられて居る。

その上、その池に影をうつさない爲に、朝は西の方を、夕方は東の方を通つた。

或時そんな事は何にも知らないほうえん(法印)が、女の子に赤い着物を着せ、疲れた足を引ずり乍ら夕方西の方を通り掛つた。夕日に照されて二人の影は長く池の面にうつり、女の子の赤い着物は特によく池にうつつた。そこで待ちかまへて居た大蛇は、大きな口を開けて子供を一飯みにしてしまつた。ほうえんは怒つて早速針を買つて來て沼にふりまき、七日間一所にこもつて大蛇が死ぬ様に祈つた。(そこは今もこもりのほつとして傳はつてゐる)すると大蛇はたえられなくなつて、黒煙をあげ乍ら沼を逃げ出した。それと共に沼になみくくとたまつて居た水は急に引いてしまつた。そして今の大野間がそこに出來たのだと云ふ。その大蛇の逃げ出した所はたぎり澤として今に傳はり、僅に水が流れ、昔の沼の底とおぼしき附近は、今は田となつてゐるが非常に深く、股の邊までも入る。餘り深くて人の入られない所はしきりをして

池となし入る事を禁じてある。(伊藤こと)

二四〇

○ 瀧つぼの蛇

(周智郡城西村)

西浦に小さい瀧が七瀧もある。その上の方に家があり、そこに一人の美しい娘があつた。そのむすめが朝起きると毎朝の様に寝る時しいて居たむしろをたゞく。家の者は不思議に思つて或時、まだ娘がむしろを持ち出さない先によく改めて見ると、ふとんやむしろに大きな蛇のこけら(へうろこ)がついて居た。怪しく思つて、娘に向ひ、「お前の所にはまあ毎晩どう云ふ人がどこから遊びに来るのか」と聞くと、娘は「美しい男の人が節穴から来る」と云つた。家の人達は、之は唯事ではない。ふし穴を出入りする様なものは普通の人間ではないが、何だらう、試してやらうと思ひ、その日から一生懸命藤糸をつむいで毬になし、それを針に通して娘にその針と糸とを渡して、「今夜その男が来たらこの針を頭の先へつき通せと」云ひ渡した。男はその夜も同じ時刻に相變らずやつて来た。待ちかまへて居た娘はその寝込むのを待つて針を頭の真中へ力一杯つき通した。すると男は狂ひまはりながら、又ふし穴を抜けてどこかへ逃げ去つた。翌朝夜の明けけるのを待つてその糸をたどつて行つて見ると、糸は件の瀧つぼに入り、而もたきつぼはにえくりかへつてうすを巻いて居た。そしてその後その娘は、七たらひへ

一杯の蛇の卵を産んだと云ふ。(伊藤こと)

○ 大大淵の龍

(周智郡城西村相月)

私の家の下の方に水窪川といふ水清らかな急流がある。それにかゝる城西橋から下へ一町程の所に、青味がすこいまでに濃い大大淵オホホライといふ一個の淵がある。

昔、といつても祖父母の時代、私の家のすぐ上に鉄竹さんといふお百姓さんがあつて(未だに隆盛)その家で何かお祝ひ事のある日その淵に行き、お願ひするとお膳やお椀をボカリ〜と浮かばして貸してくれたといふ。その家の人は喜んで拜借し使用してゐる中に、ふと過つてそれを損じた。悪いことをしたと、恐る恐る淵へ行きその由を告げ淵に沈めて歸つたが、その後はどんなに願つても借してくれなかつたのである。此の淵には龍が住まつてゐて、器を壊さない以前は、時々夜、鉄竹家へきてたばこ等のんで話してゐたさうだ。(荒山つる)

○ 八大龍王

(周智郡城西村相月)

私の家から二里程はなれた所に成瀬といふ所があつて、行者がすんでゐる。そこには大きな池が七つ程もあり、龍王が住まつてゐるといふ。八大龍王といつて眼病によい神として地方の

信仰をあつめてゐる。百餘年の昔、今この成瀬行者と共にすむおばあさんのお母様が川へ洗濯に行つた。洗つてゐる途中、つとたらひの中に入り川中めがけて流れ出してしまつた。他の人がびつくりしてみゐると、その人はげら／＼笑ひながら流れて行つたが、その途中龍の姿となり天龍川迄流れこんだ。そして、さてそこに止らうとしたところが、よい淵はなし途方にくれた。そこで名案を思ひつき、その龍の孫にあたる、おたつさんといふ人に眼を病ませ、遂に失明させた。不意のこととて一同打驚き、禰宜さまにみて戴くと、「お前のおばあさんが龍となり、この淵に止りたいので、お前に今止めてもらはうとたのんでゐるから、その願ひをかなへてやれば、たちどころによくなる」といつた。早速天龍川からその成瀬のお瀧まで竹を渡しそのつたふべき道をつくつてやつたら、その女の人の眼は忽ちよくなつたといふ。龍がその竹を渡る時、みち／＼みち／＼と竹がしだれた（しなふこと）といふ。今でも龍等居るものかなど疑へば、必ず姿を見せるさうだ。お祭の日には誰にも見せるとのことである。常には小さな姿となり普通のへびの如くになつて附近にあそんでゐるさうだが、眼光するどく一錢銅貨大だと云ふ。去年の冬ある人がそのお池で氷をわり米を洗つてゐたら、ちらつとそのへびが見えた。その人は忽ち失明してしまつたさうだ。私には本當か嘘か判断はつかないが、とにかく村人は絶對的に信じてゐる。（荒山つる）

○ 鳴瀬の大蛇

（磐田郡水窪村）

今から二百年程以前の事、或夏長續きの雨が降つて、信州街道に沿つた當時の水窪村は、村の中央を流れてゐる水窪川があふれて、もう二三日も降り續いたら、村全体水におぼはれてしまひさうになつた。村の人はいざと云ふ時には直ぐ逃げ出せる様に支度に夢中になつてゐる時辨天といふ所から、眞裸に丈なす黒髪を垂した一人の少女が、鹽に乗つて、小山の様に巻上げ谷底の様に渦巻く大波の中を少しも恐るゝ氣色もなく、満面に笑ひさへ浮べて下へ下へと流れて行つた。村人達が急いで見た時には遙か下手の波の間に見えなくなる時分であつた。

水窪の村におたかさんと云ふ非常に美しい娘さんがあつた。三年前に大工のお聲さんを迎へて子供二人と四人で仲よく暮して居た。丁度その大水のあつた時である。おたかさんの家には澤山洗濯物が溜つたので、その大水もいとはず川へ洗濯に行くと言つた。おたかさんの夫は「こんな大水に川なんかへ行つて、間違ひでも起るといけないから止めた方がよい」と云つたが、今迄夫の言ふ事に背いた事のないおたかさんは、夫の止めるのも聞かずに鹽を持つて辨天様の所へ洗濯に出掛けた。その鹽へ乗つて流れて行つたのはこのおたかさんだつたのだ。それから後しばらくはその行方が分らなかつたが、或夜の事であつた。おたかさんの夫の大工さん

の所へおたかさんが夢枕に立つて「私は今に大蛇になつて鳴瀬の淵に住んでゐるが、鏡を忘れて来たからどうか屈けて下さい。又私が此處へ来た證に砂をおいて行きます。」と云つた。翌朝、大工さんは言はれた儘に、鏡を持つて鳴瀬へ来てみると、何處からともなくおたかさんが現れて来た。おたかさんが大蛇になつた事を疑つてゐる大工さんは「お前がその姿では別れが悪いから、本當の姿を見せてくれ」と云ふと、おたかさんは何處ともなく姿を消してしまつた。そして今迄氣味の悪い程青黒くすんでゐた淵は、俄に荒れ狂ひ、白く飛び散る大波の底から、「これがおたかかの姿です」といふ聲と一緒に大皿の様な鱗の大蛇が現れた。ほんとにおたかさんは大蛇になつたのであつた。大工さんは餘りの恐さに青くなつて一散に逃げ歸つた。

(本多みち)

(補)この傳説で、鏡を頭道具と云ひ、湯處を水窪の橋の下だと云ふ人もある。ある寒中或人が鳴瀬の近くで、米を洗はうと思つて氷を割るさ中から小さな(或は大いとも云ふ)蛇が出てきた。その人はそれから病みついて死んだと云ふ。

○ 一の淵の大蛇

(磐田郡掛塚町)

鳴瀬の澤を段々奥へ行くと、大きな淵が三つある。一の淵、二の淵、三の淵と呼んでゐる。

その一の淵の青く澄んだ岸の上に、一人の年若い美しい女の人が寝てゐて、若しその女をみて可愛い女だと思つた人は皆その淵の中へ落されてしまふと云はれてゐたが、其處の大蛇を八大龍王様としてお祀りしてからその女もゐなくなつたと云ふ。お祀りしなかつた以前はよく鳴瀬で舟が沈んださうだが、それからは無事に通れる様になつたと云ふ。今ではその女から二三代目の縁つながりといふお婆さんが、その宮の守りをしてゐる。そのお婆さんの子におたまさんといふ人が有る。何時か不意に目が見えなくなつた時、龍王が夢枕に立つて一夜の中に目が見える様にしてくれたと云ふ實話がある。

雨の降る前日には鳴瀬の波が高く響き渡ると云ふ。それは澤にゐる龍が天龍川へ出て来る音ださうな。その時には大きな龍が先に立ちその後から澤山の小蛇がお供をしてくると云ふ。

(本多みち)

(磐田郡佐久間村)

昔、中部に子伊が三人ある夫婦が住んでゐた。或時の事妻が病氣になつてしまつた。薬を買つて来てやると「薬では治らないから鳴瀬の三の淵の水を汲んで来てくれ」と云ふので、夫は言はれる儘に汲んで来てやると、さも美味しさうに呑んで休んだ。その夜病人は大蛇になつて

濱名郡赤佐村岩水（今遊園地）に居る。これは昔、當所の裏山に住んで居た大蛇が、水を呑むために諏訪湖へ毎日通つた穴だと稱せられる。穴は天龍川岸に沿つて諏訪湖まで續いて居るといはれて居る。尙其の附近の人達は山へ薪取りに行つては時々大きな蛇を見かけると云ふ事である。（大西とき子）

2 河 童

○ 河童のかめ

（賀茂郡下河津村）

昔谷津の栖足寺に情深い僧があつた。丁度六月の田植時の事、一日の仕事を終へた村人は日暮れた河津川の邊で馬や自分達についた泥を落す。其の日は丁度雨の後故水は常よりも多くその上濁つてゐた。人々が夢中で馬の背を洗つて居ると、急に馬が足をザブ／＼させてなきだした。何事かと水をすかして見ると、これは又一匹の河童が馬の足に喰ひついてゐる。彼は、驚くと同時に大變怒り直ぐ其の河童を捕えて大勢の人々の前で半殺しにしてしまつた。此所を通りかゝつたのが彼の僧である。彼は彼の性質として、此れを見のがすわけにも行かず、早速河童のいちめられるわけを聞き、お金を出して、其の河童を買ひ、又元の河の中に、入れてやつ

た。

と、其の夜の事、晩くなつて栖足寺の戸をたゞく者がある。僧は今時分何處の家で人が死んだのだらうと思ひ乍ら早速戸を開けると、月明りに見えたのは、今日救けてやつたばかりの河童なのであつた。河童は夕方のお禮を言ひ、其のお禮の品として一つの大きい瓶を僧に贈つて別れをつげた。僧は其の瓶の何等他の瓶と變りのないのを見て、きつと何所かに落ちて居たものに相異ないと思つた。がその後一寸かめの口に耳をあてると、何だか水が流れる様な音がする。清い水が小川をサラ／＼と流れて居る様に聞えたのであつた。

かくて始めてこの瓶の價値を知る事が出来た。

此の瓶は今日もあり、通常、人に見せてくれる。（村越ちか）

○ 白濱の河童

（賀茂郡白濱村）

時代は明らかでないが、昔白濱の人が旅に出て歸りがけ、隣村の河津まで來ると、河の邊に大勢の人が集つて何かわめいて居る。何事かと思つて立寄ると、一匹の河童が人々につかまつてさんざんいぢめられて居るのだ。ふだんから、悪いことばかりすると聞いてゐた河童ではあつたが、どうしてもそのまま通り過ぎることが出来ず、助けてやる様に願つたけれど人々は中

々聞き入れて呉れさうにもない。「俺の娘が河で死んだのも此奴の仕業にちがひない」と、一人の老人は棒を振上げた。旅人はその老人にすがりつき「お前の娘が死んだところを誰も見てゐたわけではない。此奴が殺したとも限るまい、今度だけは助けてやつて下さい」と一心に頼んだ。すると、人々もその言葉を押切つてまで殺すわけにもいかないので、「では貴方におまかせしよう、お前方餘計なことで暇取つた。けへるべー」と云ひながら歸つて行つた。旅人はしばらくしてゐる河童のなはをときながら「お前はもう悪いこと等してはいけない。今度悪いことをして見つかつたらお前の命は無いのだよ」と言ふと、河童は「よく解りました。貴方は何處の村の方でせう」と云ふ。「白濱だ」「では今度から河を渡る時、白濱だ、白濱だ、と二回言つて下されば白濱の方には害を加へないでせう」と云ひ残して河へ入つて行つてしまつた。それからは、白濱の人は河童の云つたとほりにして河を渡るので、今まで河で死んだ人は無いといふことだ。(石原住江)

○ 稚 兒 橋

(清水市)

巴川にかゝつてゐる橋であるが、あの橋が出来た時に、巴川に住んで居た河童が稚兒に化けて、開通式の日の一番最初に渡つたと云ふことから、稚兒橋と名付けたと云ふ。(池山ゆき)

○ 河 原 小 僧

(静岡市)

これは、父が未だ十五六歳の頃の話だといふ。安倍川に、相當水の出た時であつた。近所の人々が二、三人遊びに来て、阿部川に面した縁側で碁を打つて居た。父はこの時、家の内に居た。すると、縁側に居た人達が、「早く早く」と父を呼ぶので、父はいそいで飛び出して見たが、何も見へなかつた。が、父が出て来ると同時に、その人達が、「あゝ見えなくなつて終つた。」と云つた。その話すところによると、こんなに水の出た安倍川を誰も渉る者もないのに一人の男が、所もあらうに本流の真直中に飛込んで、驚いて見て居る間に、胸から上をすつと出して、矢の様に、泳ぐとも、走るともつかないで、安倍川を下つて行つたのだといふ。そしてあつけに取られて見て居ると、ひよいと河原にとび上つた。見ると、たしかに、丈は七尺豊かものだつた。それが水から上ると、今迄下つて来たのより以上の、非常な速さで、すうすう走つて行つて、山が迫つて、その涯の下には奔流の渦巻いで居る所迄行くと、忽然と姿が消えて終つたのださうである。

それが丁度父の出て来た時で、ほんの一瞬間の出来事で眞晝間の事だつたと云ふ。皆は、これは多分昔から云はれて居る河原小僧だらうと話し合つたといふ。(永倉歌子)

○長川の話

(小笠郡比木村)

長川は比木下から流れ出て遠州灘に注ぐ川である。昔比木と玄保の境の處に大變慾の深い婆さんが住んで居た。或日川の近くを通ると、川に箴が流れてゐた。慾深い事とて早速飛び込んで箴をとらうとした。ところがこの箴は、河童の化物だったので、慾深い婆さんは直ぐ河童に喰はれて死んでしまった。これからヲサ川の名が出来たのだと云ふ。今でも此所は青く澄んだ深い淵で淋しい處である。(萩原みな)

○河小僧

(磐田郡上阿多古村)

昔阿多古川に河小僧が住んでゐたと云ふ。その小僧は、現在の阿多古村川瀬の泉屋と云ふ家へ時々行き。夏など夕立が降りさうになると洗濯物等入れるのを手傳つたといふ。常に蓼汁は嫌ひだと云つて居つたが、或時たはむれに泉屋の人が蓼汁を與へたら、それ限り再び姿をだ見せなかつたと云ふ。(鈴木さき)

附 ○浪小僧

(濱松市)

昔、一人の少年が曳馬野に母と共に住んで居た。或日田を耕して小川で足を洗つて居ると、傍の草の中から「もし〜」と呼ぶ者がある。見ると親指程の子供がゐる。そして、「お助けさい、私はこの前の海に住む浪小僧といふものでございます。先程の大雨にうか〜と陸に浮れ出たのですが日照りにあつてはとても家まで歸ることは出来ません。どうぞ海までお連れ下さい。」と言ふ。

少年は氣の毒に思つて言ふ通りにして助けてやつた。その後なほ日照りが続いた。田の水は枯れる、稻は萎れる、少年は途方にくれて、或日ぼんやり海邊に立つてゐると、海間からちよこ〜走つて来たものがある。よく見るとこの間の浪小僧である。「先日は有難うございました。早魘で大變お困りの御様子、私の父は雨乞ひの名人ですから、早速雨を降らして頂きませう。なほ今後は雨降る時には東南で、上る時には西南で豫め浪を鳴らしてお知らせいたしませう。」といつて姿をかくしてしまつた。言の如く間もなく大雨が降つて、少年始め里の人々は大いに助かつた。それから、この地方では、浪の音によつて天氣豫知が出来る様になつたといふ。(金原せつ)

補 一

(濱名郡伊佐見村)

昔、弘法大師が和地村大山のあたりにいらした頃、猪が出て附近を荒して困るので、之を防ぐ爲に麥藁

人形を作り猪をおどした。それから猪が出ない様になつたが、さてその藁人形がかう云つた。「今より後は人々に雨風を知らせん」そこで遠州灘に入れた。其後は天氣の悪い時は浪が音を立てる様になつた。この浪の音は三河でも駿河でも聞く事が出来る云ふ。(本多みち)

補 二

(濱松市)

昔、遠州秋葉神社を造る時、藁人形を作り之を使つた所非常によく働き、その上其の年は大豊作であつた。仕事も終つたのでこの藁人形を川に流さねばならなかつた。人々は非常に之を惜んで、藁人形に向ひ流された後もよく豊作になるやう、天氣の具合等を教へてくれる様にと頼んだ所、其後間もなく海が鳴つてその音で天氣が豫知出来る様になつたと云ふ。(松本とみ)

補 三

(引佐郡三ヶ日町)

この波音が西の方にて鳴れば「ひわ」と云つて西の風、晴。東南に聞える時は「うら」と云つて東の風、曇、雨。又その音の大小によつて暴風も豫知する事が出来る云ふ。(堀川てる子)

3 狐

○ 狐の嫁入り

(賀茂郡下河津村)

昔から、日あたり雨の日には、狐が澤田から合津山に嫁入りするから、地面を少し掘り其所

に草を入れ、其の上に硝子をのせてのぞくと良く見える、と言ひつたへられてゐる。

(村越ちか)

○

(賀茂郡三濱村)

昔一人の女が夕方遅くまで仕事をしてゐた。すると狐に化されて何處へか行方が分らなくなつた。村中大騒ぎとなつて、鉦や太鼓で探したが容易に見當らなかつたが、その賑かさに一匹の狐が飛出して、そばにあつた藤蔓にかゝつて轉んだ。すると間もなく、その女が歸つて來たと云ふ。だから子供は夕方遅くまで外で遊んだりすると、狐に化されて隠されると云ふ。

(澤村國子)

○ 狐の恩報じ

(駿東郡清水村)

三島町の或「骨なほし」のお醫者さんが、或時、骨をくづいて(挫いて)困つて居た狐を癒してやつた。すると狐は大變喜んで、このお禮は必ず致しますと云つて歸つて行つた。その醫者さんは、たかがけだものことだと思つて、あてにもしないであつた。ところが何日かの後、その狐がやつて來て、今晚こそこの間のお禮に私が御馳走を致しますから、是非私と一緒に來て

下さいと云つた。

二五六

そこでお醫者さんは狐について行くと、小濱山の方へ入つて行つた。そして立派なお座敷へ案内して、種々の御馳走を出してくれた。お醫者さんは喜んで澤山食べてから、それでも、狐がこんな立派な座敷なんかありやうがないと思つたので、心覺えに、柱に紙をベタベタはりつけて歸つた。

一方、三島近くの竹原の或家で、嫁入りの御馳走の膳が、四人分程足りなくなつてしまつた。そして大さわぎしたが、よくしらべて見たら、手傳ひに來た人が祝言の座敷に運ぶ御馳走を小濱山に運んだと云ふ事がわかつた。その運んだ人達は、祝言の座敷に運んだつもりでゐたさうだ。

だからそのお醫者さんは竹原の祝言の御馳走を食べさせられたわけで、後になつて來て見たら、前にはつて行つた紙はみんな松の木にはりつけてあつたといふ事であつた。

狐はそんなに人をばかすのが上手ださうだ。(山本よしゑ)

○ (安倍郡有度村)

皆が寢靜まつた頃一人でぼく／＼歸つてくると、背の高い人がハツビの様なものをびろ／＼着

て通る。これは泥棒かなと思つて「よし月があるから付いて行つてやらう」とそ／＼とついて行くと、山林の中頃迄行つてす／＼と消えちやつた。と向ふの嶺からふき出し、(花火)がばん／＼／＼上つて近くの楠の木の枝にあたつて落ちる。「これは狐だな」と思ふとたんにをへちやつた。(前島かね)

○ (安倍郡服織村)

昔、安西橋の西側の坂の處に狐が住んでゐて、夜、人がそこを通ると、その頭をなでる。するとその人は、ころりとその坂から崖下へ落ちて死んでしまふ。そんな事が度重なつたので、今では其の坂の兩側に柵が出來た。その柵は去年作つた。(増田きぬ江)

○ (安倍郡有度村)

昔、かんさかの九十一(馬走)と一本木の五、ロザン殿(新田)とア、ア、ア、ア、アのお菊さん(高橋)と言ふ三匹の狐が居た。お菊さんは大へん器量が良いので九十一も五ロザンもお嫁に欲くてしかたがない。九十一は悪智慧があつたので五ロザンを殺してしまはうとした。丁度其の頃秋山さんと言ふ大名の行列があると云ふ話を聞いて、「どうだ五ロザン二人で化けつくら

二五七

をしようじやないか」「よし／＼」「おれがこの〇月〇日に大名に化けてあの街道を通るから見てゐてくれ」「よし／＼上手に化けよ」九十一はこれはうまいと思つてほく／＼喜んだ。其の日が来た。五ロザンは通りでまつてゐると向ふからじゃん／＼どん行列が来た。「ようよく化けたな、」と思つて近づくのをまつてゐた。近くに籠が来たので手をかけて「上手に化けたな九十一」と言ふと「こら」と近くの侍がすばりと首を切つた。

九十一は近くの人からきらはれてゐたが五ロザンは好かれて今どこかに祠つてあるとか。九十一は後箱根へ高飛びをしたさうな。お菊さんはどうなつたか知らない。(前島かれ)

○ (静岡市)

昔、追分の乳母が池の側に、人の頭を剃るのが好きな狐が居た。村の人が見に行くと必ず頭を剃られて来る。或日庄屋は「そんな馬鹿な事はない。人間が狐に頭を剃られるなんてえ事はない」と云つて自分も狐を見に行つた。さうすると狐は田雨のあを、んどろを頭にのせて居た。そして見てゐる中に立派なお嫁さんになつて出て来た。庄屋は「よく化けたが後に尻尾が出てゐるよ」と言つたので狐はびつくりしてどつかへ逃げてしまつた。

それから庄屋が街道をひよつと見ると、殿様のお行列が段々に此方へやつて来た。庄屋は何

處のお殿様だか知らないけれ共、木の根つこにしやがんでゐた。其の時行列の方で、お鷹が逃げたので、これは曲者が何所かに居るに違ひないと探して庄屋をみつけた。殿様は庄屋を殺せと命じた。すると何所からか和尚が出て来て「殺すのは可憐だ。私に下さい。弟子にします」と云つた。殿様はそこですぐ頭を剃れと云つたので、庄屋もたう／＼頭を剃られてしまつた。行列はやはり狐だつた。(大村ちか)

○ |七十二歳老翁、六十八歳老婆二人の話|(静岡市)

舟山に五郎左衛門狐がゐた。(舟山とは安倍川の川原の所にある山の名)えらい狐で、狐もえらくなると、人は化さない。

祝言とか寄合がある時、五郎左衛門のところへ行つて言つて来ると、きつとその場所にお膳やお椀を持つて来てくれたと。

或時、柏原さんといふ醫者のうちの戸を、夜遅くた／＼のであけると狐が立つてゐて、「怪我をしたから、膏藥をはつてくれ」といつたので、はつてやつた。それで歸るとき、ちゃんと金をはらつて、「自分は五郎左衛門狐の弟子だ」と言つてつた。それから柏原さんが舟山に行く額に膏藥をはつた狐がゐて、「この間はお世話になつた」とお禮をちゃんと言つただよ。

畜生だつてえらいもんだ。おらん義坊なんて、かなはにやだんてなあ、(義男といふ孫が側に聞いてゐたので)(曾根さみ)

○ 駿府城内御本丸にゐた狐

(静岡市)

昔、或城代が、晩勉強してゐると何時の間にか傍に来て熱心にそれを聞いてゐる美しい一人の娘があつた。而も毎晩であつた。城代はこれは不思議だ。きつと獸に違ひないと思つて、お前は實の人間か、どうかと聞いた。すると其の娘は、自分は大昔からゐる狐だと言つたので、此の城が初まつてからの事をいろいろと聞くと何でもよく答へた。非常に喜んだ城代は褒美にお前の好きなものをやると仰せられた。自分は鼠のあげものが食べたいと狐が言つたので、早速それを作つて狐に與へた。狐は非常に喜んで食べたが餘り食べ過ぎて、揚げものに酔つて城の前の麥畠の畝に寝てゐる時、犬に食ひ殺されて仕舞つた。城代は非常に惜しがつたと云ふことである。(牧田あや子)

○ 池田の狐

(静岡市)

池田の射的場で練習をしてゐた兵士が夫婦の狐を見つけたが、一匹しか捕れなくて一匹逃が

して仕舞つた。そこで捕へた一匹を淺間神社へ奉納した。すると兵士はその晩から病氣になつた。

淺間神社に飼はれてゐた狐は一日に百枚も油揚げを食べた。それで人々はきつと夜中に他の一匹が尋ねて来て食べるのだらうと云つた。(杉山ヒロ)

○ 金山のお竹

(静岡市)

金山は安倍川の西にある山、今頂上に西洋館が建つてゐる。

昔金山にお竹と云ふ古狐が住んでゐた。手越の人々は葬式等の様な大勢の人々が集る時、皆に出すお膳が足りないから金山のお竹の處に行つて貸りて來やう、と云つて、夜、山に行き、「何時々までにお膳を十五人分、足りないから貸してくれ」と獨言の様に云つて歸つて來ると、其日に其の頼んだ處に行つて見ると、近くの竹藪とか林の中等にちやんと十五人分の立派なお膳がそろへてあつたさうである。(牧田あや子)

○

(志太郡大宮村)

くだ、(管狐)に取つつかれた家は、家の人も知らぬ間に金持になつてゆく。それはくだがさ

うさせるので、不正な事をして儲けて行くのだと云ふ。

又宵の中に、裏戸を叩く、その叩き工合によつて、其家が榮えるか衰へるかどきまると云ふ。(鈴木美代)

○ (志太郡大富村)

昔、狐が穴の中で子を養つてゐる時、近所のあるおぢいさんが、なんばん(唐辛)をその穴のまわりにつんでいぶしたので、狐は、おたまれず、そのおぢいさんにくつついてしまった。おぢいさんはそれから氣が變になつて、毎日「なんばんがらでいぶされて、むせつたいく(けむたい、むせつばい)クン〜」と、いつてゐたといふ。(鈴木美代)

○ (志太郡大富村)

俗に、「狐につかれた」と言ふのは、急に狂人になつた人をいふ様である。そして、その人の言ふ事がみな、狐に關する事ばかりで「おあげ(揚豆腐)をほしい、おあげと、おこはをもつて、道の辻まで送つてくれれア、いく」と言つたりする。こんな時、その人の床の下に、ミョウガを入れておくと、狐が逃げるといふ。又、おあげ等、舌の下でたべるといふ。

○ (鈴木美代)

○ (榛原郡御前崎村)

御前崎村地方で有名な狐の名前は、カケヤの「オナベ」キンスの「モジベ」ササラ「權兵衛」等、悪いことはしないが、村で名のある狐であつたと云ふ。カケヤの「オナベ」は足を何とかして一本痛めて三本しかなかつたので「オナベ」だと云つたのであると云ふ。

此の地方では、狐の穴にお刺身や魚などを供へて漁の當ることを祈る。(川口操)

○ (榛原郡上川根村)

○ (榛原郡上川根村)

或人が魚をツトツコ(蘘菔)に入れて、オシウト(ヌタブラの下)を通ると、木の枝に自分のしよつてゐた筈のツトツコがのつかつてゐる。あんなとこに俺のツトツコがと思つて、下まで行つてとらうとすると、又他の木へ移つてしまふ。何度も追ひまはしてゐる中に何も見えなくなつた。氣がついてみると、背中のツトツコは取られてしまつてなくなつてゐた。

二
食物をしよつてオシウトに休んでゐた人がクヅンマ川原（大井川原）をみてゐると、踊り子らしい着物をきた人が大ぜい繪日傘をさしてくるので、出かけようとする、しよつてゐた食物が、とられてなくなつてゐた。

三

一文商ひに出た婆さんが、歸りが遅くなつて、ヌタブラを通りかゝつたが、道が分らなくなつて、山の中をあちらこちらと歩き廻つた。その中に、差出た岩の上から轉び落ちると、そこが道だつたので、やつと安心して家へかへつた。後で、岩の上から落ちた拍子に、辨當箱を落したことに氣付いて、翌朝行つてみると、辨當箱はかみ碎かれて、残つてゐた飲は喰はれてしまつてゐた。

四

草刈りにオシウトへ行つた人が、どうかしたはずみに、滑り落ちて、あいまち（怪我）をしたので、一しよに行つた人がおんぶつて（おぶつて）やると、怪我人は「顎がながくておんぶさりづらい。」と云つたので、おんぶつてやつた人はぞんぐら（ぞぐぐ）した。これもお仙狐の仕業だと云ふ。（天尾富美子）

○

（小笠郡三濱村）

昔、さゝもん五郎様と云ふ人があつた。此の人は大變自慢する人で「狐にだまされたなんて云ふ人はよく／＼な人だ。わしはだまされないぞ」と云つてゐた。すると或日、側の山に住んでゐる狐が来て「我等は此の山に住んでゐる狐でござんす。さゝもん五郎様は狐にだまされる人でないが、今夜はわし等に頼まれてもらひたい」と言つた。五郎様は「何だ」と言ふと、「今夜はさいがに嫁入があるから、其の御馳走をわし等がはづしたい。それだから五郎様に婿になつて行つてもらひたい」と言つた。「そんなわけなら行く」と言ふと、狐が御輿を持つて來た。それに乗つてさいがの家の側迄行くと、一ばい提灯をつけて迎へが出る。そしてお輿で乗り込むと、内は賑かでごたく／＼してゐる。此の家の人「婿から先にお湯に入つてくれ」と言ふ。「それなら先に御免蒙らう」と言つて入ると、女中がきて「熱いか、ぬるいか」と尋ねる。「いゝえ、丁度よいお湯だ」等と言つて洗つてゐると、其の中に此の女中が踊り出した。五郎様が、此の曲者奴が、と言つて怒ると、とたんにあたりが急に眞暗になつた。はつとして五郎様がよく氣をつけて見ると、そこはお寺のため（肥溜）であつたと云ふ。（松下きん）

○ (小笠郡三濱村)

狐が、藤井の法院様を大變嫌つてゐた。或時大勢の人に見える様な所で「藤井の法院様になれ〜〜」と言つて青ん、どろを、田から取つてはくびに掛けた。そこへ丁度件の法院様がやつたきた。

狐のしたことを見てゐた村の人達は、「それ狐がきた」と言ふので、實の法院様をひどい目にあはしたさうである。(松下きん)

○ (小笠郡三濱村)

或人が、狐が晝寝をして居るところを見つけて叩いた。其の時は狐が逃げたが、やがて其の人が畠で仕事をしてゐると、眠くてたまらなくなつたので寝たが、さて眼が覺めてみると、動くことの出来ないやうに狐がおさへてゐたさうである。(松下きん)

○ (小笠郡三濱村)

濱野の人が濱野道を通つた。すると一人の女の人が小さい子供を遊ばして居た。此の女の

が濱野の人に「お前はどこへ行く」と聞いた。「わしは野賀に行く」と言ふと、「わしも野賀に行く」と言つた。其の人は氣味が悪くなつたので一生懸命に歩いて行つた。後から來るかと思つて見ると、火を一ぱい出してゐた。(松下きん)

○ (磐田郡浦川村)

祖母がまだ若い頃、親戚でお嫁さんを貰ふといふので、祝ひをした事がある。嫁さんが仲々來ぬので途中まで、祖母の親と、祖母と二人で迎へに行つた。一本道の細道で急に後から馬の驅けて來る音がしたので、山手の方へ身を引いて待つたが、音のみバツ〜として馬など一匹も見えず、來るやうでなかつた。二人は無言のまま家にと急いだ。家の門口へ來て始めて二人は「化されたなあ」と口をきいたと云ふ。狐か何かに化されたのである。(古澤はな)

○ (磐田郡掛塚町)

昔、と云つて大した昔ではない、二三十年前頃まで、私の地方には狐が居たらしいので、狐にだまされたと云ふ話は澤山ある。今その一つ二つを擧げる。

立石某(私の字の人で今は故人)が、或日のこと、仕事のかへり道で、道の傍の蕎麥畠へ入

つて「深いなあ〜」と云つて居たのを、近くの人が見付け出して、島から伴れ出すとやつと正氣にかへつた。色々たづねて見たら、立石某の云ふのには「たしかに海なのでそれを渡つて居たつもりだ」と言つたさうだ。夕方の事なので、狐にだまされたのである。この人は又、松の木と一生懸命で角力を取つた事もあるさうだ。

又、隣宇の鈴木彌平（今存命）さんは、他所から仕事の歸りに、渡船を渡つて或池の所まで来ると、急に用をたしたくなつたので、芋の中でして、其の後知らぬ間に向きを變へ今来た道をもどつて居たので遂に渡船の所まで来た。びつくりして引かへし又池の所へ来ると又便所へ行きたくなつたので、前と同じやうに用を足したが、其の時又向きを變へて渡船の方まで行つたといふ。何しろその人は三四度目ではつきりと氣がついて、その次は池の所を用心強く通つたので、漸くにして家へ歸り着いた。之も、狐にだまされたのだと云はれてゐる。

この他、川の中へお風呂だと思つて入つたとか、パンを食べたつもりで馬の糞を食べたとか色々話があるが、誰だかはつきりしない。（鈴木きよ）

○

(濱松市)

昔、淨妙寺と云ふお寺に狐が祀つてあつた。其所の和尚さんは、時々肩が凝るので、膏藥

を藥屋に注文しては、使つてゐた。所が或る月一度も注文した事もなく、膏藥を用ひもしなかつたのに、其の月末に藥屋の小僧が、代金を取りに来た。和尚さんは、不思議に思つて、よく調べたが、どう考へても妙である。そこで小僧に調べさせると、通帳にはつきりと、膏藥一枚と書き入れてあり、日まで書いてある。それで和尚がつく〜考へ、「これは屹度、コンジョウ、（狐の名）奴が買ったに、相違ない」と考へ、代金を拂つて、お經を擧げて、狐の姿を眺めるとコンジョウは、和尚の眞似をして、ベツタリと、大きなまゝの膏藥を体に張つて跳ねてゐたと云ふ。（渡邊はな）

○ 天林寺 狐

(濱松市)

寛永の頃曳馬城外天林寺に、或夜夥しい盗人共がどつと押寄せ青坊主の肝をひしいだ。この時一人の法師は坊主頭に鉢巻して方丈の長刀を取り、群がる怪盜共とチャンバラを實演した。或は犀ヶ崖まで追ひつめ或は寺の廣庭まで押寄せられ、大格闘劇の末夜は白々と明け放れんとした。日の目を苦手とする盗人共は何時の間にかチリ〜バラ〜と消えうせた。荒法師共は最後の大見得を切つてから、今更自分の働きに感じ一人氣をやつてゐた。次の夜も〜怪しい一連はこりもなく又々押寄せた。法師共は芝居でもする氣で長刀を永車の如く振つて

た。餘りの事に附近の人も不思議に思つて大勢百五十人で裏山を圍み狩りした。すると手負ひの狐が五六十匹木の影の穴にあへいでゐた。さては彼等の仕業であつたのか道理で手ごたへが無かつたのだと思つた。それ以來怪しい事はなかつた。初め此寺は天徳寺と云つたが狐が多いのでその頃天林寺と改めたと云ふ。(中村歌智子)

○ (濱松市)

明治三十年頃の事である。濱松市外篠原村西茶屋附近に狐が澤山出て遊んでゐると云ふ事だつた。或朝六時頃、勢よく走つて來た汽車が急に其處で止つた。機關手は早朝ではあるし、てつきり人を嫌いだと思つて見たら、それは大きな狐であつた。そしてその人間程もあらうと云ふ大狐を、村の人達は大勢で煮て食べてしまつた。するとその中に二人の青年に狐がついた。二人の青年が云ふには「母狸は機關手をだまさうとしてしかれてしまつた。残念だ。今から母を食つた人々を片つばしから食ひ殺してしまふ。」青年についた狸は殺された狸の子であつた。村人はそれから諸方の神社に巡拜して廻つたが、その青の口ばしるには「もう何日すると此青年は死ぬ」と云つた。そしてその日になつたら、青年は息を止めたと云ふ。

(金原せつ)

○ べんけい狐

(濱松市)

昔「きようでんのう」と云ふ野に、よくべんけい狐が出て人を化した。其の狐は非常に綺麗な女に化けて、着物は必ずべんけい飛白を着てゐたと云ふ。或爺さんが油買ひに行つた歸り、夕暮になつてその野を通りかゝつた。すると向ふから美しい女の人が來る。見ればべんけい飛白の着物を着てゐた。併し爺さんは、その女のアマリの美しさにうつとりして、それがべんけい狐の化けたのだと云ふ事は考へる事が出来なかつた。女は近寄つてきて「お爺さん、私は里から歸つて來たのですが、一寸内緒で家のお倉からお金を出したいのですが、一人では大變ですから手傳つて下さいませうか、お禮はその半分のお金を上げませう」と言つた。爺さんは根が慾深だつたので、「へいへい、宜しうござんすとも」と返事して、向ふを見れば、何時もはこんな所になかつた筈の立派なお倉がある。女はその中に入つて行つて「ほい百兩」「ほい二百兩」と云つては出す。爺さんは夢中で「ほいきた。ほいきた」と、自分の懐に、袂に、股引の間に、入れられるだけ突込んでゐる中に、やがて夜が白々と明けて來た。すると其處へ一人の農夫が通りかゝつた。見ると一人の爺さんが、空になつた油壺を横において、野中の穴から骨をとり出しては、「ほい百兩」「ほい來た」と、夢中で自分の懐に突込んで居る。農夫

はぎよつとしたが、「さてはこいつ、やられたな」と思つたので、擔ひ棒で背中を三つ程どやして、「ほい爺さん、しつかりせんかい」と云つた。すると、爺さん、始めて氣がついて、自分が体中骨だらけになつてゐるのを見ると、がたがた震へ出して、その農夫に家まで送り届けて貰つたと云ふ。(渡邊はな)

○ 松下屋敷の狐

(濱名郡芳川村)

濱名郡芳川村、頭陀寺の松下嘉平次屋敷には稻荷様がその西北隅にあるさうだ。毎年二月初午にはきつとお祭があるといふ。その時、赤飯を奉るのだが、子供一人で行くことは恐れられて居る。大てい大人なれば一人子供なれば三人位で奉納に行くといふ。社殿(小さいが)の拜む所に奉つて拜み、家路をさして歸るのだが、決してふりかへつてはいけないさうである。それは、狐即神様が食べるのを、ふりかへつて見たことになり無禮であるからと、神に遠慮するのださうである。今はこの屋敷も木を切り土を取つて畑と田になつて居る。或人は、この神を應仁天皇及び敦實親王を祀つてあると云ふが、稻荷様がほんとうらしいと云つた。でこの屋敷の畠を作る人は、狐がたゝるとか言つて喜んで作らないといふ。(金原せつ)

○

一 (六十七歳老婆の話) (濱名郡芳川村)

一 家のおぢさんが若い頃、畑へいつて、いつまでたつてもかへつて来やあしない。家中の人はみんな心配して、見にいつたら、白く花のさいた蕎麥畑を、お腹までまくつて「それ深いぞく」つて、うな(畝)を一通りづゝ歩いて居つたつて。

二

二 狐はよく、畑の中にあるこえだめ瓶へ、お風呂だつて、いれるさうです。そしてはいつた人はだし薬(二十種位に、切つて肥溜へ入れてある薬)を手拭だといつて顔を洗ふつて。

三

三 隣のよつきいさの親にみつさといふがあつたがその人が、ゴンゲン山つていふ山で、畑をけづつて居た。すると、向ふから彌宜様がひよこひよこやつてきた。さうすると、いままで、やりきつてすぐ下の田圃で青んどんをかぶつて居つた狐が、急にゐなくなつて、こんどは、ねぎさまが二人になつて、ひよこくやつてくる。「あゝあの狐のやつ、もうねぎさまにばけたな」と思つて、一つ奴をぶち殺してくれよう、つて、今使つて居つた鍬をもつていつて、そ

のねぎ様のくるのを待ちうけて、思ひつきり、がくんとぶつてやつた。そしたら、狐だと思つてぶつた方がほんとうのねぎ様で、前にいつたのが狐であつて、「キヤア〜」と狐は逃げていつてしまつたつて。

四

狐にだまされた時は、煙草をのむとよいと、言ひます。

五

又、だまされさうな時は「昨夜狐の肉を食べたので齒にはさがつて因る」つて言へばだまされないとか言つてました。

六

どつかの人が、親類へ用があつて夜行つたと。さうすると、道の真中で狐がやりきつて馬ぐそを道の白い土の上にくろがいてゐるだつて。だからその人が、「なんだえそんなことして」つてきくと、狐は「へエこれか。こりや、あそこの内のばあさんが今日は一人だから、こりよ、もつていつて、くはせてやるだ。そりあおもしろいにおめえ、みてなせえ」つていふもんだで、その人はこりやあ面白いと思つて、その狐と一緒にいつて見た。狐は「おめえこゝで此の障子の穴から見えてゐなせえ。わしん、中へはいつてばあさにくはせるから」つていふもんだで

その人はいまかいまかと障子からのぞいてゐたが、そのばあさんはいつまでもだべない。そのうちにだん／＼夜があけて来て見たら、自分は茄子畑の棚を一生懸命のぞいてたと。

(金原せつ)

○洗濯狐

(引佐郡鹿玉村)

引佐郡鹿玉村宮口東に平釜川といはれてゐる二間位の中の流れがある。附近に寺があり、木が茂つて居る所があるが、夜になると狐が出て川岸でザブ／＼物を洗ふ音が通る人に聞えると云はれて居る。普通洗濯狐といはれてゐる。狐の居る事は事實ださうだが、洗濯するかどうかは、はつきりしない。(大西とき子)

○狐がやられた話

(賀茂郡中川村)

吉山の老爺が川舟引きを業としてゐた。或時大水が出て南郷橋が流れて川を渡らねばならなかつた。そしたら南郷の向側の道に綺麗な女の人が居り、向ふ岸に渡してくれいと云ふ。この邊には古い狐が住んで居てよく人をだますと云ふのを知つて居たので、よし来たといつて、背負つて渡り、下してと云ふのを無理に家まで負つて行き、ひどい事をして殺した。正体を現は

さないので心配してゐたら、翌朝見ると大きい狐が死んでゐたと云ふ。(土屋みどり)

○ 流ナガレの三サン十アエウ

(富士郡大宮町)

私の郷里大宮町に隣接する岩松村の、四丁シチヨウ河原の流といふ部落の森に、三十と呼ぶ年老いた狐が住んで居た。

明治維新の前頃であつた。田子浦の村から澤山の荷物を馬に積んで、毎朝此の流の村を通つて、蒲原の宿にゆく一人の馬子があつたと。

この馬子が通始めてからは、毎日の様に朝こゝを通ると、後から眼も覚めるばかりの美しい娘が追すがつて来て、「オイ、馬子さん、是非私を蒲原までその馬に乗せてつて下さい」と頼むのである。馬子も始めの中はだまつて、逃げる様にして其處を通りたが、呼び掛けるのは毎日の事なので、次第にその娘に慣れて、行きには乗せてゆく様になつた。

馬子には美しい妻があつた。

ある時、いつもの通り家へ歸つて「明日は、とても美しい娘のお客を連れて来るから、薪を澤山用意して居つて、わしが娘を連れて来たら、表へ運んで火をつける様に、」と妻に語つた。

そしてあくる日、馬子は行きも歸りも例の美しい娘に呼びかけられた。

馬子は「今日は、私の家へ行かないか、」と云ふと、その娘は、非常に喜んで馬に乗つた。早速家に連れて行つて、馬子は門口に立ち、その娘を馬から下して、「オイ、昨日言つた美しいお客を流ナガレから連れて来たよ」と言ふと、妻は待ち構へて居た様に、薪へ火をつけた。火が焼え始めたと見ると馬子は、矢庭に娘の手を取つて、その火の中へ投げ込んだ。するとその娘は「キヤン、と異様に泣き叫んで、何處ともなく、風の様(渡邊富貴子)に逃げ去つたとの事である。

○
一七十三歳老翁の話(庵原郡兩河内村中河内)

木山野(兩河内村中河内木山野)に、梅といふ若者が、毎晩辨當タオヒを持つて田追(猪の番)に行つた。或夜小屋の中に寝てゐると、小屋の屋根の上をモソ、歩いてゐる者がある。しばらくすると、自分の体がしびれてしまつた。すると一匹の狐が小屋に這入つて来て自分の辨當を取つて食べて行つた。梅は体がしびれて手も足も出ないので唯見てゐた。

若い者の事で、恥になるとて人にを話さず心でくやしがつてゐた。其の明日の晩も又其の通り、かういふ事が十日も續いた。くやしがりながらある夜屋根の上を見てゐると、屋根の棟に

穴が有つてそれから狐のしつぽが下つてゐる。其のしつぽがピラツ／＼と動く自分の体がしびれてうごけなくなる。不思議の事があるもんだと思つた。

其の明日の晩は、狐の來ない先に穴の所へ手をやつて尻尾の下るのを待つてゐた。すると狐が來てしつぽを穴へさし込んで來た。

梅はそのしつぽをガツシリ握りグイと下へ、ヒキズリ下げた。狐はビツ、クラして（びつくりして）引き出さうとする。梅は又ひきずり下す。かうして長い間引き合つてる中にしつぽから血が出て來た。狐はギヤア／＼なきひなる（さけぶ）。梅はチクシヤウ／＼と云つて引ずり込む。ついに狐もよはつて引き上げる力もなくなり、鳴く聲も枯れてヒヤア／＼と小さく言ふ様になつた。其處で手をはなしてやつた。

明日の朝小屋の近所に狐が死んでゐた。それから梅は仇討をした話を人に話した。

（大熊治子）

（庵原郡蒲原町）

現在蒲原小學校のある附近は、昔は一面の竹藪であつた。新田の次郎兵衛と云ふ馬子があつて其處を毎日馬を引いて通つた。或夜狐が娘に化けて現はれ、次郎兵衛を種々と欺いた。又それか

ら數日後、馬を引いて通ると、復狐が現れて彼をだまさうとしたが、今度は彼は早くも之に氣がついて、「お前を馬に乗せてやるから乗りなさい」と言つた。すると狐は喜んで馬に乗つた。そこで次郎兵衛は、狐を馬にしばらくつけて、動けない様になると、狐も實に弱りきり、次郎兵衛に向ひ、「おつかない次郎兵衛さん。今度は化かしやあしないから勘忍しておくれ」と云つたので、彼は、今後を戒めて歸してやつた。

それから狐は見えなくなつた。（鏡島喜世子）

（安倍郡服織村）

昔、安倍川の船山に五郎左衛門といふ狐があつた。南薬科村牧川のしゆうどう院と云ふ寺に居た和尚が、その五郎左衛門に向つて。「お前は人を化すにどうして化すか」と聞くと、五郎左衛門は「おれは七かてんの法だ」と答へた。すると和尚は、「俺なら八かてんで化す」と云つた。そして「八かてんは、かわむこをどつさり冠つて人を化すのだ」と教へて、五郎左衛門にやらせた。しかし、五郎左衛門はその通りにしたが、和尚にだまされて百姓に追つかげられた。（増田きぬ江）

(小笠郡横須賀町沖之須)

昔、村に漁夫で源二郎と云ふ者があつた。此の源二郎の宅へ毎朝早く、「源二郎さ、海いきます」と言つて呼びに来る者がある。外へ出て見ると、いつも眞の暗で誰一人立つて居ない。餘りのいま／＼しさに或朝、そつと表戸の側にひそんで呼び聲の聞へるのを待ちかまへて居た。と、例の通りの句調で「源二郎さ」と呼びかけたので、此所ぞとばかりとび出して、聲の方をはつたとにらみつけると、夜目にもくつきり眞白い狐がさしまねいて居るのが見えた。此奴がと許り、口惜しさで一杯になつた源二郎は、その狐を追つかけた。とう／＼狐の穴の入口まで追ひつめ、そこで源二郎は狐の白いしつぽをつかまへた。引合つた揚句、しつぽは根本からふつりと取れて狐は穴の中へ見えなくなつてしまつた。残念に思ひながらもその手に残つたしつぽを持つて家へ歸り、庭においておいた。それからは朝起しには來なくなつたが、毎夜々々夜中とおぼしき頃、ほと／＼戸をたゞいて「源二郎さ、しつぽをおくれ」と云ふ悲痛な叫び聲を聞いた。

餘りのわずらはしさに堪へかねて、或日戸の外に例のしつぽを出して置いたが、其の夜は何事もなく、ぐつすりねこんで明朝戸を開けると出しておいたしつぽはなく、砂の上に物をひい

たあとがはつきり例の穴の近くまで續いて居た。それから後は一度も戸をたゞかなくなつたと云ふ。(横山テイ、大石よれ)

(小笠郡横須賀町沖之須)

馬子の金十郎は毎日向ふの町へ客を運んでゐた。一働きして歸る頃は日が暮れて山の中は眞暗だつた。客のない空馬にのつて調子の良い馬子唄を歌ひながら、或日いつもの様に暗くなつて山の細道を通ると、後に美しい女の聲で「馬方さま／＼」と聞へる。此の山の中に今頃と、不思議に思つてふりかへると、島田に結んだ髪も重げに、形の良い色白の顔が心もちほ／＼を染めてちつと自分を見つめて居るのに氣がついた。振り返つた金十郎に娘は再び「馬方さまどうぞ私を馬にのせて行つて下さい。その代り私の家へ着いたら澤山御ちそうしますから」と頼んだ。同情深い金十郎は一も二もなく娘を馬にのせて、暗い夜道を問もなく娘の家へ着いた。出迎の女中に足を洗つて貰ひ、通されたのが淡紅のぼんぼりがほのかに映つて居る娘の室だつた。此所で娘の言つた通り御ちそうを腹一杯食べて、眠くなりかけた体を娘の案内で風呂へ入つた。しばらく夢心地で風呂につかつて居たが、ふと急にあたりがざわ／＼して、寒さが身にしみて來た。漸く我に歸つた金十郎は、自分が道端の大きな溜池の中につかつて居る事を知つ

た。はつとしてとび出すと、近くに稻荷様の祠があつて、娘の室にあつたぼんぼりは其所にある破れかけたうすぎたないものだつた。その上、たらふく食べた御ちそうは馬の糞だつた。餘りのいま／＼さくやしさに、呆然と立つた金十郎は狐に態良く化された自分のをろかさを情けなく思ふと同時に、化した狐に對してははげしいにくしみの情が湧き上つて來るのだつた。

そして何時かの日をかたく心に決して、悪臭の鼻をつく体で家へ歸つた。それからしばらくは何事もなく過ぎ、化されてから丁度七日目になつて又例の通り暗い山路を通つて居た。すると復前の様に後に「馬方さま／＼」と呼ぶ聲がする。「來たな」と心に決心したが、表はさあらぬ態で振り返り娘を馬にのせて今度は道を違へて近道をし、馬子の家へ娘を連れて來た。そこで金十郎は「珍客に御馳走しなくては」と言ふので、家内の者を指揮して唐がらしと青松葉とを集めて娘を案内した部屋をたてこめてどん／＼いぶし出した。始め何事もなく美しい娘を装ふて座つて居た狐は、生松葉にいぶされて苦しまぎれに本性をあらはし「あな恐ろしや七つ山の金十郎キヤリン／＼」と啼いて、戸のすき間から自分の祠へ逃げ歸つたといふ。

(横山テイ、大石よれ)

(小笠郡三濱村)

口今澤に海の好きな徳兵衛様と云ふ人があつた。毎朝のやうに「徳兵衛様海に行きます」と言つて起しに來る者があるが、海に行くと夜中でまだ誰も海に居ない。徳兵衛様が怒つて、次の夜起しに來るのを戸口にまつてゐた。すると又起しに來た。すぐに戸を開けて飛び出すと狐がちよろ／＼逃げて行く。之を追つて今澤の辨天迄來ると、狐は河の中に飛込んだ。此の人も狐と同じやうにおよいだ。狐が向ふの岸に着く時に追つて尾をつかまへた。すると尾の皮がむけて取れ狐は逃げてしまつたので、徳兵衛様はそれを持つて家に歸つて來た。

ところで此の狐は、東濱に行つて或人についたが、そのつかれた人はかう言つた。「わたしは何も恐れるものはないが、唯今澤の徳兵衛様だけは恐い」それを聞いた徳兵衛様が例の尾の皮を持つて行くと、狐は直に逃げたと云ふ。(松下きん)

○ 鼠の天ぶら

(周智郡城西村)

昔或る處に古狐が住んで居て、人を化したり、作物を害したりして村人を困らせた。その狐は大變に鼠の天ぶらが好きであつた。それを知つた村のあるお爺さんは、ひとつ狐を生捕りにしてやらうと思つて、一生懸命鼠の天ぶらを揚げてゐた。そこへ丁度巡査に化けた狐がやつて來て、「お爺さんそんなものをどうするんですか」と聞いた。お爺さんは「あの村の古狐を生

捕りにしようと思つてゐるんです。あの狐は大變鼠のてんぶらが好きださうですね」と云つた。巡查は「ふんそうか、それは悪い事をする狐だな」と云つて歸つて行つた。その晩お爺さんがそのてんぶらでわなをかけておくと、翌日は狐がとれてゐた。自分が捕られるのだと知り乍らも、狐はてんぶらのほしさにわなにかゝつたのである。(伊藤こき)

○ (濱松市)

昔、狐がよく出て人を化すと云ふ噂が或村にたつた。若人等はどうにかして、之を見届け様と相談し、出掛けて行つたが、誰もく化されて、歸つて来た。ところが、一人の男が「そんな馬鹿な事はない。人間が畜生奴に、化されるなんて、馬鹿々々しい」と言つて、例の場所へ出掛けて行つた。夕方になると、いよく若者は、注意して、隠れてゐた。すると、一匹の白狐が出て来て、逆様になつたと思ふと、尾が美しい髪になり、木の葉をそれに着けたと思ふ間に美しい簪になつた。若者は、「化し出すな。」と思つて、何喰はぬ顔で、出て行つた。すると、狐は、品を作つて、シクく泣き出した。若者は、いろく宥める風をして、逆に、騙し大きな布の袋の中へ、「お入りなさい、」と言ふと、女は、喜んで入つた。其所で、若者は、口を締めて、「ヤイ狐、よくも、今まで人を騙した。おのれかうして呉れる。」と言つて地面

へどんく叩きつけたので、狐は本性を現はしてキャンく言つて、死んで了つた。それから若者はそれを持つて歸つて、肉を皆で食べて自慢話をしたと云ふ。(渡邊はな)

4 狸、 貉

○ (賀茂郡下河津村)

昔、佐野電気工夫が見高に行く途中の夜の出来事。彼は大變臆病であつた。彼は何時も此の山を越える時は誰か友達があれば良いがくと思つて居たさうだ。此の夜も誰か来れば良いがと思つて居た。と後から女の人来る。これは良い連れだと大變喜び此の人と一緒に行かうと少し足をゆるめ一緒になる様努めた。途中彼はふり返つて女の人を見ると自分が急がないのに女との間隔は常に一定で近よらない。彼が早く歩けば女も早く、おそければおそく。彼は大變氣持悪くなつて、きつとこれは狸のいたづらに相違ないと思ひ、夢中で山を下り茶屋に逃げ込んださうである。(村越ちか)

○ (賀茂郡三濱村妻良)

此話は實際私の家にあつた事ださうな。今から凡そ二百年近く昔、私の家で庄屋をしてゐる頃、菫山様といふ殿様が時々私の家に來たさうである。

其頃又、狸が化けて其殿様になつて家に來たさうである。そして「据風呂」に入る時に、六枚屏風を立て、「くれ」と云つたといふ。又食事の時に給仕は入らないと云つて一人で食事をしたといふ。(飯塚ヤス子)

○ (賀茂郡中川村)

鎌倉の建長寺から僧が來ると云ふので、村人足が出てお籠をかつぎに行き、其夜は小瀧に泊つた。そして澤山御馳走をしたが、食べる處を誰にも見せなかつた。處が村に大きな犬が居て僧の乗つた籠に吠えつき、中から僧をくはえ出したら、それは狸だつたと云ふ。

○ (土屋みどり)

○ (沼津市上香貫)

字殿の前の入口に大きな森があつた。或晩、香貫寺の前の或家のおかみさんが用たしに行つて日暮方にこの森にさしかゝつた。と、行手の路に突然大きな山が出來た。「これは」と思つ

て、見上げれば、見上げる程高くなる。驚いて逃げ歸つて他の人に行つて見てもらつた處が、もう何も無かつたさうである。多分このあたりに住んで居た古狸の仕業であらうといふ。

○ (野田美津江)

○ 杉田のむじな塚

○ (富士郡富士根村杉田)

杉田の安養寺より南半里の處にある塚である。昔、安養寺のお寺を貉が持つてゐた。そして貉の書いた標語や、南無妙法蓮華經なんかがあるとのこと。その貉がお經や葬式に出る時にはこの塚に登つて、犬が居ないかどうか見て、ゐないことがわかれば寺へ歸つて仕度して出掛ける。犬がゐるとどんなに頼みにきても出掛けて行かなかつた。貉の書きものはお寺の寶物になつてゐる。(戸塚むら子)

○ (富士郡田子浦村)

明治初年、富士郡富士根村安養寺に、狸の非常に大きいのが居た。そして、葬式の死人を食べて生活して居た。終りには住持迄も食べてしまひ、奥の間に住職となりすまして人にかくれて食事をしたりいろ／＼の用事をしたりした。或時この僧が、京都に位をとりに行くと言つて

御籠で岩淵迄行つたが、其處のお茶屋で一休みした。この岩淵には非常に賢い犬が居た。しばらくすると「キヤツキヤ!!」といふ聲がしたので人々が行つて見ると、件の犬がその僧に化けた狸にかみついて居たさうである。(望月貞子)

○

(静岡市)

昔、樵夫仲間が揃つて奥山の方へ行つた。すると向ふから大變美しい娘が來た。一同不思議に思つてゐると、その娘が「木こりさん、私が御飯を炊いて上げませう」と言つた。樵は「まあ今日は出來てゐるから」といふと娘は行つてしまつた。不思議な事があるものだと思つたがそのまゝ過ぎてしまつた。

さて小屋に歸り、夕飯がすんで子分等は寢てしまひ、親方一人双物を磨いでゐると、先刻の娘が子分等の顔を一人々々なめてゐる。そして間もなく親方の所へ來て「手傳ひませうか」と云つたので、親方は早速その双物で娘に切りつけると、キヤツと云つて血を流して逃げて行つてしまつた。後でみると、子分等は皆舌を抜かれて、あつたつた(呂律がまわらぬこと)になつてゐたと云ふ。娘は狸だらうと。(片井はつ)

○ 狸 屋 敷

(静岡市)

静岡市三番町に吉屋さんと云ふ大きい屋敷が有る。大きな木がこんもりと茂つてなんとなしに陰氣な家で、晝でも氣味悪く思はれる。此家の事をみんな「狸屋敷」と云つて居るが、吉尾さんはそんな事を云ふと大變嫌がる。私の祖母の十歳位の時の事ださうである。今此處らは家だらけだが、其頃は田圃ばかりだつた。其屋敷は夜になると、天井から大きな石が落ちて來たり、又色々の物がなくなるが、それが天井にあつたり、雨が降つて來たので一寸洗濯物を縁側へ取込んで置いたら、泥まみれになつてゐたりしたといふ。家の者は大變に氣味悪く思ひ、子供等は他家に泊りにやり、巡查を頼んだりした。

何が悪戯をするのか分らないので或夜、縁側へ新聞紙をしき其上に砂をまき足跡を見ようとしたが、朝になると何もめちやめちやにしてあつたといふ。程たつた或日、大きな狸が縁下に眠つて居たので、それを鐵砲でうつたら、大きな石になつて、ころころと轉げ廻りそして終ひには復大きな狸になつて死んでしまつた。

その頃さびしかつた私の家の邊も、狸を見る人が多勢出て店屋が出たりして大變賑かだつたさうである。(佐藤はる)

○むじな

(静岡市)

鎌倉の建長寺の縁の下に住んでゐた貉が、高僧に化け、庄屋附きで「下におれ〜」で廻つて来た。たま〜麻機村にもやつて来たので、時の村の名主、保崎孫右衛門の家では用意怠りなく迎へ御馳走した。所が畜生の事故、箸を持つて食事する事が出来なかつたと見え、給仕もつけず七重屏風で圍つて食べたさうである。此貉僧が安倍川を越え丸子にさしかゝつた時、白の、一もつといふ犬が臭をかぎつけ、とう〜此の化僧を噛み殺したといふ。

今保崎家には、むじな僧が書いたといふ掛軸が大事に保存されてゐる。人々はあるものは又とあるまいと云つて褒めて居る。然し此家は没落の運命にあるさうだ。(片井はつ)

○

—四十八歳の女に聞く—(静岡市)

昔、池田のダイジンと云ふ寺に毎晩毎晩狸がお客になつて和尚をだましに来た。和尚さんも終りに感づいて、今度来たら一つ困らせてやらうと思つてゐた。

或時狸は何時もの様にお寺へ遊びに来た。和尚は此の時眞赤く石を焼いて置いた。狸は、来て話をしてゐる間にそろ〜罫丸を八疊の座敷へ一杯に擴げ出した。和尚さんは其處へ焼石を

ポンと投げた。そして狸は驚いて、急いでくると罫丸を巻いて附近の山へ逃げて行つて仕舞つた。そして其處で罫丸を冷したので、今でも其附近の山をキン、ヒヤンと呼んでゐる。

(大村ちか)

○大坊主

(榛原郡上川根村)

ぎんさん、と云ふ人が大間へ荷負ひに行つての歸りに、澤間あたりから日が暮れて、こじりくぼ、(墓地の處で晝尙暗い杉林)を通りかかると、見上げるばかりの大坊主がゐる背中へおぶさつた。とても重くて歩けないので、やうやうその近くの大日様の處まで来て、一生懸命大日様を念すると、やつと取れたが、家へ歸つてしばらく寝てゐたと云ふ。(天尾富美子)

○狸切りの太刀

(榛原郡菅山村)

これは今菅山村の舊家である川田儀一郎氏の家に、寶として保存してある狸切りの太刀についての傳説である。

菅山村松本の里に川田清左工門といふ者があつた。同處の川田といふ地名に古くから居住するを以て苗字にして居た。代々清左工門、金石工門、と名乗つて、古く瀧谷氏、戸塚氏を取立

つたのによつて兩家では川田家を本家といつてゐた。

後土御門天皇の明應の頃の事である。清左工門は碁を好んだ。當時近傍の西山寺の上人も同じく碁を好んだので、折々彼の寺へ遊びに行つたといふ。行程は十四五町もあり、山道だの、切通したのもあつて晝尙暗く物淋しい通路であつた。

或時夜の五更になつて歸り、彼の山にさしかゝると傍に燈火が見える。立寄つてみると、八十ばかりの老婆が一人居て、「清左工門殿も汗をまいらしやれ」と云つて、何か差出した。清左工門は此處に人家のある筈はない、正しく狐か狸と思ひ、「是は御馳走」と云ひながら左の手で老婆の手をとり、右で脇差を抜きうち切りつけると、忽ち古狸となつて山深く逃げて行つた。

猶、其後も幾度も通つた。この人は常に半弓をたしなんで何時も持つて歩いてゐたと云ふ。或日又、此の日も一日寺で遊び夜に入つて歸つてくると彼の山道に何か黒い物が向ふに見えたので、矢を一つ放つたが、カンといふ音がして矢は立たない。續いて二の矢をうつたが前と同じ。これは不思議を思ふ中に、何物か、先の黒い物を投げ捨て、清左工門にとびかゝつて來たので、脇差を抜いて切り伏せた。よくよく見ると古い女狸で、彼の黒い物は釜だつたと云ふ。その狸は清左工門の半弓を恐れて釜をかぶつて出たが、二の矢も射損じたので、時分はよし

と釜を投げ捨て、清左工門にとびつき先度の意趣を返さんとしたのである。

狸を切つた脇差は以後狸切りと云ふ。又半弓も、今、川田家に所蔵する。この半弓は足利時代のもので凡五百年餘を経たものであると云ふ。

(補)

松本から西山寺に行く途中にボタ餅坂といふ、小さな坂ではあるが急な坂がある。この坂に毎夜毎夜「ボタ餅食ひたい」と云つては何か黒い物が出る。幾度か村人が殺さうとして弓を射るが、かんかんとなるのみで一向手こたへがない。そこで川田清左衛門といふ人が考へて足の方を刀で拂つた。するとこれは大狸で、釜をかぶつてゐたのだつたと云ふ。

又同じく狸の話に、西山寺の住職が隠居して離れた隠寮に居ると、毎夜何處からともなく盲人が來て「御隠居様お淋しう御座いませう」等と云つて按摩をした。或時、眠氣がさしてもませながら居眠りすると、盲人は陰囊を擡げてかぶせんとする。目を開ければ忽ち止める。それを悟つて翌日はよき程の石を拾つて來て火鉢の中へ入れ、焼石としておいた。すると其の夜も例の盲人が來てもみ始めたので、段々眠むる振りをしながら、彼の石を火箸に挟んでゐた。盲人は又陰囊を十分擡げてかぶせかけたので、時はよしと焼石をその擡げたものゝ中に投げ入れると、クワイ、ク〜と叫びながら古狸となつて消失した。翌朝血の跡を求めて尋ねて行くと、

關伽井澤といふ處の西の岩倉といふ岩の間に死んでゐたと云ふ。これは男狸で清左工門に切り殺された女狸と夫婦狸だつたとの事である。(萩原みな)

○ 彦兵衛、そばほつとり。

(榛原郡白羽村)

村の西北隅、石原の里に智積院といふ眞言宗の寺院があつた。今から六七十年前までは寺跡も明らかであつたさうだが、今は畑となつて西の森林中に、僅かに住職の墓碑を存するのみである。此の寺の西、四五丁の所に彦兵衛と呼ぶ山がある。今から凡そ三百年の昔、寛永の頃此に所人の老爺が住んでゐた、名を彦兵衛といつた。當時は此の邊は多く山野で人家は極めて稀であつたといふ。

或年の師走の事である。智積院の來盛和尚は夜毎に火爐のほとりで悟道に耽りつゝ、樹木のうち騒ぐを聞くのを常としてゐたが、彼の彦兵衛も毎夜必ず來て四方山の話などし、和尚の例となるのを例としてゐた。或夜例の如く彦兵衛爺が來て火爐のほとりで暖つて居たが、其の様が、何となく落ち着かないやうに見えたので、和尚も心にいぶかりつゝ、それでもその夜はすぎた。翌日になつても猶疑がとけないので爺の許に問ひ合せた所が、昨日は行かないとの事であつたので、和尚も心に領きつゝ、是はきつと狐狸の自分をからかふいたづらに違ひないと思

つて、「よしそれなら自分にも考へがある、目にももの見せてくれるぞ」と思ひ乍ら、素知らぬ顔をして打過し、彼の來る毎に蕎麥餅を作り之を焼いて御馳走した。かうして數日もすごした時、何時もの蕎麥餅を焼く様に見せかけて手頃の石を火中に投じ、火箸で焼いては反し、反しては焼き、居ねむる眞似をして彼の舉動に注意してゐた。それとは知らぬ、彼の爺、和尚の居睡るのを見て、時分は好しと、そろ／＼仕度に取りかゝり、陰囊をひろげて和尚を搦め取らうとしたので、和尚も時分を見計ひ、「そら彦兵衛蕎麥ほつとり」といひ乍ら、彼の焼石を、今しも十分に擴げ終らんとする陰囊の中に投げ込めば、何かは以つてたまるべき、その焼石を拂ひもあへず、そのまゝ寺を飛び出し、伽藍を數回廻つて何所かへ姿を消してしまつた。

翌朝足跡をたよりに行つて見ると寺の前の梨畑の中に、一匹の古狸が血に染つて死んで居たといふ。(松井せい)

此の彦兵衛が堀といふ所に角力があつた時、見に行かうと友達にさそはれたので、應と承諾はしたもので、まだあいにく食事前だつたので早速拔菜をゆで、和へ物に作り、大きな摺鉢に一杯あつたのを盡く食ひつくして相撲見物に出掛けた。そして益飛入つて大關と角力つた所、苦もなく之を打ち倒したと云ふ。拔菜は力を出すと言ひつたへはこのことから來てゐると云ふ。(同右)

○ (小笠郡三濱村)

野賀にお坊様が住んでゐた。その寺に毎夜、爺さんが、「寒いからあてて、(あたらせて)くれ」と云つては来た。始めのうちはあたりなさいと云つたが餘り毎夜来るので遂には不思議に思つて、狸では無いかと疑つた。

そこで或晩、石を焼いて置いて、「今夜はそば、ほつとりをくれる」と云つてそれを挟んで投げつけた。するときやん／＼泣いて逃げた。夜が明けてから、落ちた血をつけて行くと、山の穴の口に狸が死んでゐた。(松下きん)

○ (小笠郡三濱村)

木挽が山の奥で道に迷つた。夜になつたので、どこかに人の住んでゐる所は無いかと思つて段々と奥に行くと、ちか／＼火が見えた。行つて見ると、小さな家におぢいさんが一人で火をくべてあたままつてゐた。「道に迷つて行き暮れてしまつたから泊めてくれ」と言ふと「こんな見苦しい所だから泊めるわけには行かない」と言ふ。それでも困るから泊めてくれるやうに願ふと「それなら泊りなさい」と言つた。それからその家に上り込んで火にもたらしでもらつた

が、なんだかこんな所におぢいさんが一人住んで居るのは不思議だと思つたので、道具箱からさすがを出して床にくすいでは(さし通す)ぢいさんの顔を見た。するとくすぐ度に顔をゆがめる。そこで、こんな所に居れば今夜は食べられてしまふと思つて早速逃出したと云ふ。これは狸であつたさうである。(松下きん)

○ (周智郡三倉村)

郡南東の山奥に庄五郎といふ炭焼があつた。炭焼小屋に住んで暮して居た。ところが、或日夕方になると庄五郎のおかみさんが来て「庄五郎殿庄五郎殿」と呼ぶ。今頃来る筈がないと思つたので其の日は聲もかけずに寝てしまつた。次の日の夕方炭焼竈の所で、鐵砲を携へて何物がくるかと待つて居ると、夕闇の中に獣が来て、大きな木を門口に立てた。その獣は見られてゐるともしらす、その木の頂に木の葉をかぶせてゐる。とそれが手拭をかぶつた女の人になり「庄五郎殿」と呼んだり表戸を叩いたりした。炭竈の側で見えてゐた彼はこつそり近づいて意不に鐵砲でその女を叩いた。すると悲鳴を上げて、どこともなく行つてしまつた。

次の朝門口を見ると血痕があつた。それで犬をつれてその山へ入つてゆくと、一里以上入つた山の中の岩蔭に、鼻づらをぶたれた古狸が死んでゐた。(鈴木とし)

○ (磐田郡浦川村)

昔、といつても今七十歳前後の老人の若い頃の事であるが、狸に化された話である。浦川の町より半里餘の所に田島といふ所がある。その一軒屋におちいさんとおばあさんが住んでゐた。或雨の降る夜、おばあさんはおちいさんの歸りを、もうくるか早來るか、待つてゐた。その中に音がして、歸つたらしいので、戸を明けるとちいさんがづぶ濡れになつて立つてゐた。そこで大急ぎに家へ入れて、いろりのほとりへ坐らせ、食事などと色々な話をしてゐた。その中にちいさん火の端でいい氣持になつて眠り出した。不圖見ると、それは大きな狸だつた。おばあさんは驚きあはてて、そばにあつた燃え盛つてゐる木をしやつつけた。すると、狸はびつくりして外へにげ出した。(古澤はな)

○ (磐田郡浦川村浦川)

山へ、獸の番人に、毎晩子供を出して置いた家があつた。或夜、子供が「お腹が痛い」と泣いた。すると狸がそれを真似して「お腹が痛い」と云つた。家の人が其の子供を連去つた後も、狸は「お腹がいたい」と叫んでゐたと云ふ話である。(古澤はな)

○ (濱松市)

昔、六部が途中で日が暮れて泊る所もなかつたので一つの山寺へ泊つた。寺には六部を泊めるべき部屋とて無かつたので本堂へ泊る事にした。所が夜中頃になると廊下にあつた棺がごと／＼と揺れ出した。六部は眼を覺してびくびくしながら恐しい物見たさで、蒲團の間から見てゐるとやがて棺の蓋が開いて死人がひよ／＼と出て來た。六部は其のままきやつと云つて氣絶して了つた。翌朝この事を和尚に話すとそれは此の山に住む狸の仕業であらうと言つた。六部は狸の仕業としても餘りに物凄かつたので、その朝早々出立してしまつたと云ふ。

(渡邊はな)

○ ザザラザツタラ

(榛原郡上川根村千頭)

どこかの人山小屋に泊つて、一人つきりで火にあたつてゐた。さうすると入口の筵を上げて南瓜のやうな丸いものが、ころころと轉つて來てゆるい(ゐろり)のそばへ來て止つた。きびの悪いものが來たもんだなあと思ふと、その丸いものが「何でもないよ、おれはザザラザツタラと云ふもんでござんす。」と云ふ。どうも氣持が悪いなあ、早く行かんかなあと思ふと、

「よいよ。ちき行くよ。」と云ふ。

こちらで思つたことを、一々さつて返事をする。どうも恐しいのもつと火でも燃してやらうと思つて、もや(たきぎ)を取つて折つたが、はずみでそれがその怪しいものゝ、顔と思はれるあたりに、ぶつかつた。すると「これあ考へつかなかつた。」と云つて逃げて行つてしまつたと云ふことだ。(天尾富美子)

○ み こ し

(榛原郡上川根村)

見上げれば見上げる程大きくなつて、だんだん仰いでゐてひつくりかへると命を取られると云ふ。

昔、小長井の若い衆が二人許りで、夜石垣に腰を下して、見るともなく空をみてゐると、のぼりの様なものがひらひらと空を上つてゆく、見上げれば見上げる程大きく登つて行くので、これがみこしだと仰天して近所の家へ逃げ込んだと云ふ。

大工が山道で大入道に出會つた時、やつぱり見上げる程高くなるので驚いて、腰に差してゐた指金を抜いて高さを計らうとすると急に消え失せてしまつたと云ふ。(天尾富美子)

○ 青 坊 主

(小笠郡横須賀町沖之須)

春の長い日も暮れて、野に遊んで居た子供達も歸つた。唯麥の青い葉が夕風にさはいで居る。こんな時獨りの子供が家へ歸りおくれで麥島の間の道を走つて來ると、麥の中から眞青な青坊主が出て其子を連れて行くと云つて、春日暮れて後は、餘り島に子供を出さない。

(横山チイ、大石よれ)

○ 花柄坂の見越し

(周智郡三倉村)

三倉村木根の白山と云ふ山の花がら坂を、夜分通ると、一つ目入道、三つ目入道が出る。それを此方から「見越した、く」といへば、消えてしまふけれ共、恐れてゐて、向ふに見越されると邪魔されると云ふ。(鈴木さし)

○ ホ ッ チ ョ 婆

(周智郡熊切村)

熊切村の青塔の山中で、昔から夕方通るとよく化された話がある。ある一人の木挽が夕方薄暗い頃、家に向つて此の山中を歩いて來た。すると杉の葉が、氣味悪くすれ合つた。

と思ふと、行く手の道へ一人の婆さんが現れてやつてくる。

手拭をかぶり、手をぶらりとだらしなくさげ、その人のそば迄来て彼に手をかけた。それで恐しくなつて、大きな聲で叱りつけて二三歩後ずさりした。がその時はもう消えてゐた。それが大正十年頃評判となつて、一人のお婆さんが、日暮に荷を背負つその山へ来た時、他の木挽がこれはホツチヨ婆の化けたのに違ないと思ひ込んで、そのお婆さんを草原でたゞきのめして大急で歸つて来た。後、たゞきにたゞかれたお婆さんはしをくくと内へ歸つて来て其の事を話すと、それが村の者の間違ひだといふ事が判り、お酒を買つて詫びたといふ笑話もある。

又熊切村のぼう山と、大居村の古奈良安とは向ひ合つて在る。そして大居村の古奈良安で、祭や祝をやると、ぼう山でも祭や祝をやる様に、物音が聞えたり夜等あかりが見えたりする。處が實際聞いて見るとやらないのである。それは多分青塔山の怪物が業をして見せるのではないかと言はれてゐる。(鈴木とし)

5 狼、山犬

(賀茂郡下河津村)

下河津村濱區に天王様と云ふ處がある。それにデエと云ふものを作り狼の來るを防ぐ。

(村越ちか)

(田方郡葦山村奈古谷)

函南村田代から葦山村奈古谷にお嫁に來た人があつた。或日實家に歸らうとして山道を通ると、道側に山犬が大層苦しんで居る。びつくりして恐る／＼近づいて見ると、それは咽喉に骨がつかへて居るのだつた。其の人はびつくりして其の山犬に言ひ聞かせた。

「私は今其のお前の骨をとつてやるが後で害をするやうなことがあつてはならぬ。」と固く云ひ聞かせた。すると山犬は如何にもうなづいたらしい。高鳴る胸をおし鎮めてやつとのこと其の骨をとつてやつた。山犬は嬉しさうに尾をふり／＼山の中に入つて行つた。(木内たき)

(田方郡葦山村奈古谷)

西浦村に孝と云ふ所がある。その人で孝右衛門と云ふ人が山道を通りかゝると狼が苦しんで居る。見ると狼は咽喉に骨がさゝつて居るのだ。孝右衛門さんは其の狼に言ふのに「お前は今本當に苦しんだらうけど、今私が其の骨をとつてやるがお禮として私の言ふことを聞いてくれるか」と云ふと、うなづいた様に思つたので又話を續けた。「人間が金物等を足にさしたりした時に、それをとるのに本當に因るが、わしはそれを助けてやりたいと思ふ。さうするにはどうしたらいいか」と云ふと、狼は、「お守り札を作つてその金物のさゝつた所を何度もくなせると直にさゝつた金物が出る」と教へた。早速孝右衛門さんは骨を取つてやつた。狼は山の中に姿を消してしまつた。家に歸つて今日の出来事をすつかり話し、そして「今日から金物のささつた人は私の家に来ると治してやる、」と云ふふれを出した。さあそれからと云ふものは毎日一人二人と孝衛門さんの家に来た。そして守をもらつて「南無、孝の孝右衛門さん」と云ひながら、なせると、二三日するときつとさゝつた所が不思議にも口があいてさゝつた物が出たさうである。私の親類の家の人、足にも、がさゝつたので早速行つて守札を戴いて歸つて毎日のやうになせた。そしたらやつぱり口が開いて痛くもかゆくもなくて出たさう

である。(木内たき)

(田方郡小室村川奈)

昔、山犬が赤入道(畠戸へ行く道)の地獄谷に居て、よく家の半戸からのぞいたさうである。(高橋のぶ子)

(駿東郡長泉村)

南一色(愛鷹山の麓、私共の村の最北端に位する字である)に起つた話である。

其の字のある家、父親は毎日山に行つては木を切つて暮してゐた。今日も父親が山に行つた。晝時となつたので母親は子供に「わや(お前は)、お父ちゃんどこへ、おまんま(御飯)持つてけーやー。(持つて行きなさいよ)。えー(好い)子だに。」と言つた。

「うら(私)いやーだア」

と子供がしきりにいやがるのを無理矢理に馬に乗せて辨當を持たせてやつた。草深い林の前に來るとウオーと言ふ物凄いや、見れば恐しい山犬だ。一匹二匹三匹と次第に數をまして馬の

周囲をぐるりととりまいてしまつた。そして我先にと馬に飛びかゝつて行つた。飢えた山犬の牙の鋭さに馬はしやにむにあれば出し果ては死に物狂ひでかけ出した。子供は遂にふり落されてしまひ、後から追ひかけて来た山犬に食れてしまつた。(加藤わい子)

○
(駿東郡浮島村)

愛鷹山には明治の初年の頃まで澤山の狼が居て、野馬を食べ、時としては里に出て農家の馬をとつて食べたりのりで、農家では夜、馬屋をかこつて置いた。

この頃の鐵砲を持つて居た者は、三年に一度、狼の尾を葦山の代官に差出した。又各村に村づゝと云ふのがあつて狼をうつと、それを届け出、三年に一度は必ず葦山へ差上げたといふ。

矢張り明治の初年頃に或農夫が畑から家に歸らうとして遠い道を歩いて居ると、狼がその農夫を追つて来た。逃げようとする、その狼は早くも農夫の前に来てしきりに頭を下げながら口を開いて居る。不思議に思ひながら口の中を見てやると大きな何かの骨がのどにつゝかへて居た。それを取つてやるとよろこんで何處かへとんで行つた。

かくて其翌日から、その農夫が畑から歸る時に、きつとかの狼が家まで送つて来たといふ。

○
(原井美智子)

これは私達の村より南方の某村(村名不詳)にあつた事實談である。

昔、その村に一人の薬屋があつた。此の薬屋はいつも隣村に薬を賣りに行くのが常で、夏の夕暮、例によつて薬を背負つて家を出た。丁度隣村との界にある山の中腹にさしかゝつた時はもうあたりは夕闇にとざされて、物の形さへはつきり見分けられない時刻になつて居た。

ふと前方を見ると、右手にあたつて何やら黒い人影に似たものを見た。何だらう、と思ひながら近寄つて見れば、これは又どうした事か、………山犬がつるんでゐた。

ふるふる胸をおさへて隣村に到達し、いつもとまりつけの家に行き、夕食の折にさつき見たそのまゝを事珍らしげに話した。

すると其の家の主人を始め皆眞青な顔をして、目を見合せてゐる。薬屋は不思議に思ひ、どうしてそんなにびつくりした様な顔をしてゐるか……と聞いて見た。

「お前さんとはんでもない事をした。あんなの命は今夜限りないよ」「それは又どうした事だらう。」

「それは昔から、山犬のつるんだのを見て人に話さうものなら、其の夜になれば必ず何干とも知れぬ山犬が来て、其の話した人をかみ殺す。たとへ二階に居らうと三階に居らうと犬梯子をかけて登つて来て殺すだらう」

と言ふ話であつた。

「で今夜自分の家に泊られては、家の人も皆知つて居る事だから恐しい。是非隣の家へ行つて何にも言はずに、今夜一晩泊めてくれ、と頼んで、あの家へ行つて泊つてくれ」

と頼まれた。

薬屋も、とんでもない事もあるものだ、仕方なく又其の隣の家へ行つて泊めてもらふ事にした。

隣家では、喜んで泊めてくれたが、下へ床をのべようとするので是非今夜だけは二階にしてくれと頼んだ。

おかみさんは、妙な事を言ふと思つたが、其の家には子供が大勢あつたから、きつとやかましいからだらうと推察して、言ふまゝに二階にのべた。

薬屋はもうあきらめてゐた。……

時間は刻々に過ぎて行く……丁度十二時が打ち終つた時、二階の窓が音もなく開いたと

と、大きな山犬が大きく開いた口をこちらにむけて、今にもとびかゝらんばかりの有様をしてゐる。

覺悟はして居つたものの、その獸の恐ろしさ……

しかし、ふと、自分の腰につけてあつた護身用の九寸五分の釘に氣付き、どうせ殺されるなら一匹なりとも殺してから……といふ意氣込みで、急に窓ぎはに飛んで行き。先づ一番初めの山犬の頭をつきさした。不思議に山犬は抵抗せず、殺されたのはだらうと下に下つて行くが、新しいのが後から後からと續いて来る。その物すごさ……。犬は犬梯子にのぼつて來たのであつた。

薬屋はあらん限りの力を出して戦つた。へとへになつて動けなくなつた。もう駄目だ!! 絶体絶命……

其の時、コケコツコー……一番鶏の聲をきいた。すると不思議、今迄の犬梯子は崩れて、後から後から續いた山犬は、皆申し合せた様に下に降りてしまつた。

コケコツコー、又二番鶏がないた。

窓の下を見れば、山犬は、まるで、くもの子を散す様に散りつゝあるではないか。

商人はほつと安心して、つかれにつかれた体をぐつたりと床の上に横たへた。自分は生きてゐ

たのた……。

もう夜が明けるだらうと思つて、待つて居た所、いくら待つても夜が明けない。

自分の助かつた原因をぼつ／＼考へ出した。先づ釘、……………

釘をよく／＼見て居ると、それには金の鶏の目が、ほり込まれてあつた。鶏の聲がしたのはこの鶏の目が鳴いてくれたのだつた。

夜の明けないのも道理……………

いよ／＼夜が明けた。

泊めてもらつた家の人にそれを話すと、全然知らなかつたと言ふ、それにしても、有難い九寸五分の釘。それで薬屋は記念とお禮にその釘を其の家に譲つたとの事である。山犬のつるんだ所を見たら決して人に話してはならぬと云ふ。(佐野きよ子)

○ 送り 狼

(庵原郡兩河内村)

文化年間の事であるが、樽に、若藏と云ふ男があつた。小力もあり、好んで相撲を取つたといふ。此男は炭焼を業としたので、朝早く起き、有名な樽峠を越して甲斐の國徳間の奥で炭を焼き、又日暮れてから家に歸るのが例であつた。ところが何時からか知らぬ間に、毎夜狼が樽

峠あたりから付いて來るのが例になつた。元來狼は、人を送つて行つて、其の人が倒れでもすると直に喰ひ付くと聞いてゐるので、その男も餘程用心して行き來してゐた。其内に狼も狎れ人も狎れて格別恐れもしない様になつてしまつた。で若藏は、ある夜、狼に向ひ、「毎夜送つて下さる駄賃だ」と、鹽を五合ばかり紙に包んで與へた。狼は鹽を好むのである。然るに狼は其の禮の心であらうか、明夜猪の片股を引いて來て若藏に與へた。若藏は又赤飯を炊き、ごま鹽をふりかけて狼に與へた。斯くして數年間狎れて送つたと云ふ。(大熊治子)

(庵原郡富士川町)

以前に、富士山方面から田中別莊の處に狼が一匹來た。之を捕へようとして八番堤の所から富士川に追ひ入れた。そして蒲原の柵方ツギガキの中瀬に上つた所を、棒ヶ谷戸の八郎さんが木刀で擲り殺した。

そして新坂の水神さんの處で料理をして皆で頒けあつた。が其の後、東海道を通る馬が、此處に來ると、その臭ひがするので急に逃げ返つて困つたと云ふ。(西尾茂治)

附

(狼の牙を馬につけておくと、其の臭で馬が瘦せると云ふ。)

(庵原郡興津町清見寺)

のらあがり(田植のすんだねがひせつく)には若い者、老いた者、皆遊ぶものとしてゐる。此の日感心な娘さんが煙草の葉の虫取りに出かけた。非常に信仰深い人で、畠へ行く前氏神様に参拜してそれから出かけたのであつた。畠へつくとまもなく何者かのうなる聲がきこえる。氣がついて頭をもたげて見ると山犬とも狼とも判らないものが、こちらに向つて走つて来る。娘は驚いて逃げた。崖をかけおりたり畠の真中をとんだり無我夢中だつた。逃げてゐる中崖のところに来て後は下の田より逃げ道はない。飛び下りると履物が田にはまつてしまつた。それを捨て、後も見ずに人家の方へ、おそろしいものが來たと大聲で叫びながら、或る家にとびこんだ。山犬は履物の落ちてゐるところで臭ひに迷つてうろくしてゐたが、居ないことに氣がついたものか、又追ひかけて來た。娘が一軒の家へとびこむと、もうそのときは其處まで山犬が追つて來てゐた。村では夢中で戸をしめた。餓えてゐるのか猛り狂つてゐる山犬は村中を駆けめぐり、その果に田の方へ行つた。丁度田に居合せた一人を噛み倒して尙も狂つてゐた。壯年の人達や元氣の老人達も交つて狩りに出た。山犬は大勢の來るのを見て林にかくれた。多くの人は恐しがつて林へ行かうとする者がなかつたが、中に大助といふ命知らずの老人

が居て、他の一人となたをもつて林へ行つた。果せる哉、みがまへしてまつてゐた。そこで大助爺さん、なたで眉間を強くうつと、いかりにふるへながら其の場で夢中で二三回グル／＼廻つたかと思ふと、どうと倒れてしまつた。其のとき噛まれた人は三人とかあつたといふことである。(平野ゆき)

(安倍郡大川村)

大川村洗澤に少し以前までは夜になると山犬が出た。此方で手を出さなければ、害を及ぼさないが、恐しい鳴聲をたてる。口が裂けてゐる。火を恐れるから、夜は火を持つて歩けば恐ろしくないさうだ。(増田きぬ江)

(静岡市)

山犬はたいそう鹽が好きださうだ。自分のたつた一匹の子供でも鹽一升とかへる位ださうだ。であるから、夕方暗くなれば、鹽を買ひに、又借りに行かないやうにしてゐる。どうしても必要な場合には、その器の中に火を入れて行くといふ。つまり火で山犬を防ぐのださうだ。山犬はたいへん強いので山間の農家では馬小屋や牛小屋に丈夫な柵をめぐらして、これをさ

けたさうである。(片井はつ)

○ (静岡市)

山犬が澤山居るのを見て、他の人にその見て来た話を見ると、その夜その家へ山犬が澤山出て来ると云つて、他の人がよそへ行つて、その人だけ居させた云ふ。

夜になると山犬が澤山して来て屋根裏に行き、其處であばれたりするが、雞が鳴くと「夜が明けた」と言つて、行つてしまふといふ。(鶴田すみ江)

○ (静岡市)

麻機村の一番奥に池谷といふ所がある。此所に昔、大層鐵砲の上手なさきぢいさんといふ人が住んで居た。此の村では薩摩芋等を作つても何物か(動物)に荒されるので困つて居た。或日さきぢいさんが、つゝみんだんと云ふ所へ何時もの如く鐵砲を持つて行くと狼らしいものが居る。日頃畠を荒すのはこれだと思ひ、早速その狼を射殺してしまつた。村に歸り他の一人をつれて来て、つゝみんだんから、さゝあらしと云ふ所まで引きすつて来たが、その間狼と思つて射た山犬の連れ添ひのもの(雄か雌か不明)がづゝと吠えてついて来た。その後さきぢい

さんの家では、毎日家のまはりで吠える山犬の爲に恐くて夜などは一步も出れなかつた。やうやく一週間ばかり立つとその山犬は何處かへかくれてしまつたさうである。その後さきぢいさんの家では山犬の皮を大事に仕舞つて置いたさうであるが、くだ(狐)に附かれた人がその皮を借りて来て、そつと布團の下に入れて置くと、はなれたといふ。その皮はあちこちの家借りられて行き、多分今では無くなつたらうといふ話である。(片井はつ)

○ (静岡市)

母が未だ小さい時分、お婆からよく、夕暮になつてから、お鹽を買ひに行つてはならないと云はれたさうである。これは狼がともお鹽を好むからださうである。そして又どうしても買ひに行かなければならない時には、何かの方法によつて、つまり提灯でも、煙草の火でも、何か火をつけて行けばよいのだといふ。そして家に歸り着いたら、お鹽を一つかみ門口にまいてやるのださうである。(永倉歌子)

○ (静岡市)

狼は鹽を大變好んで居る。それで昔の人達は夜は決して鹽を買ひに行かなかつた。娘は又火

を嫌つたので夜中歩く時は火を持つて行つた。松を焚いたり、火繩を持つて行けばよいと云ふ。(豊田シゲ子)

(静岡市)

明治以前に敷地邊の山がまだ未開地で人も入らない様な所であつたので、随分雜草木々が生ひ繁つてゐた時の事である。

敷地の或馬方が、すつかり、暮れてしまつたぬすつと坂(手越から宗小路へ出る途中にある坂)を、馬に乗つて歩いてゐた。彼はしたゝか酒を飲んでゐたので非常に酔つてゐた。其時に傍の繁みの中から一匹の山犬が飛び出して馬の足に食ひついた。びつくりして馬があはれたので乗つてゐた馬方は振り落された。たけりたつた馬は其儘一目散に家に向つてとんで行つた振落された馬方は、酒の酔の爲にどうする事も出来なかつた。山犬は彼にくひついた。「又いかきくひついたやーい」彼の叫び聲が暗い闇について澤渡邊の人家に聞えて來た。然し恐しさに人々は助けにも行かなかつた。

彼の聲は次第に細々として遂に聞えなくなつた。かうして彼は山犬に食ひ殺されたのである。それから幾年、敷地、澤渡邊の人々は此の話を子供達によく言ひ傳へて居る。

(牧田あや子)

(志太郡焼津町)

木挽が山道を通つて仕事に出かける途中、山犬のさかつてるのを見たさうな。よく話に山犬はさかつた所を見られると、恥ぢて、若し之を人に話す様なものがあれば取殺すといはれて居る。大變な所を見たと思ひながら附近にあつた家にとめてくれと頼んだ。然し斷られた。どうしてもとめてもらひたい。いゝえ泊められない山犬のさかるのを見たんちやあ、なほとめられない。若しとまるなら私達は行つてしまふからと押問答の末、家の人の方が出て行つてしまつた。さて木挽は、今夜おそはれる事を豫期してそまよき(きこりが用ひる廣い齒のあるもの)をとぎ、屋根裏にかくれて居た。と案の定山犬がぞろぞろとやつてきて犬柱となつて順に背の上に乗つて屋根の高さになり、取殺さうとしてきた。木挽はそまよきでゆえ(上)からぶつさつらつて、(撲る)順々に殺してしまつた。翌日、家人も戻つて來たので、安心して屋根裏よりおりて來た。すると縁の下から一匹の山犬が出てきて、遂に木挽をかみ殺して歸つて行つたと云ふ。(神尾すゞ、岸本勝代)

○ (榛原郡上川根村千頭)

昔山犬と云ふものがあつたと云ふ。その山犬が方々へ出て来て、人を見ると後について来てつまづいて轉ぶのを待つて、かみ殺したと云ふ話がある。その山犬は鹽を好むと云ひ、之を與へる時は害をなさなかつたと云ふことである。又山犬がなく時は山が荒れたり、色々の災難があると云ふ話もある。(天尾富美子)

○ (榛原村上川根村千頭)

昔、山犬といふものが在所に出没し、人を見れば後からしたがひ來り、つまづき轉ぶのを待つてかみ殺したと云ふ。山犬は鹽を好むから、鹽を與へれば害をしないといふ。(和田正)

○ 鹽賣りと狼

— 八十五歳祖母の話 — (榛原郡御前崎村)

昔一人の鹽賣りのお爺さんがあつて、山家へ鹽賣りに行つた。その途中の道に狼が住んで居た。お爺さんは其處を通る時恐しいのでいつも一升づゝお鹽をくれてやつてその食べて居る間に其處を通つては行つた。或時も又お鹽をくれ様として穴の近くまで行くと、中からとび出して來た狼がお爺さんの着物の端を咬えて、中へお爺さんを引きすりこんでしまつた。お爺さん

はもう今度こそは食はれてしまふのだと思つて震へて居た。狼がお爺さんを引きすりこんでしまつて、自分は穴の口に行つて、その穴の蓋になつたかと思ふとすぐ非常にもの凄地ヅナリがして來て(丁度幾千とも知れぬ猛獸の足音とおぼしき)暫らくそれが續き、やがて通り過ぎて行つてしまつた。さうするとその狼は穴の中から又爺さんをくわえて引きすり出し、何の危害も加へなかつた。それは狼がいつもお鹽を貰つた恩に感じてお爺さんの危い所を助けてやつたんですよ。もしお爺さんが、外に居たならその恐しい音をして通つたものに食はれて了はなければならなかつたので、狼が穴へ入れて自分がその穴の蓋になつてその恐しいものを通り過ぎさせてそしてお爺さんを無事に通してやつたんですよ。(川口操)

○ (小笠郡三濱村)

昔ある人が金谷原を通つて籠をかついで商賣に出掛けた。いつも一匹の山犬が出てくる。が此の人は、此の犬を可愛がつてよく何かくれてはやつてゐた。或時、その犬が着物をくはえては引くので、日頃可愛がつてゐる犬だから悪い様にはしないでだらうと思つて、引く方について行つた。すると一つの穴に引き入れ、其の上に籠をかぶせてしまつた。どんな事が起るだらうと思つて小さくなつてまつてゐると、其のうちに大勢の犬がなきながら其の穴の口に集つてき

た。するとその山犬は片端から咬みふせてしまった。そして再びその人を穴から引き出したと云ふ。(松下きん)

(小笠郡三濱村)

昔、木挽が山道を通りかかつたら、山犬が子供を産んでゐた。面白いので長い間立つて見て居た。そして村に出て知つて居る家によつて此の事を話した。此の家の人は大變驚いて其の様な所を見ると今に犬が澤山で殺しにくるから速く此の家を出てくれるやうにと願つた。仕方なく其の家でなたをかりて出て行き、大きな木に登つて山犬の來るのをまつてゐた。

言の如く薄暗くなつてから、數限りない山犬がやつて來た。が高くて届かないものだから、順々に肩車に乗せてたう／＼その人の近く迄來た。その人は山犬が手の届く所迄來ると、なただ、切つてはすて切つてはすてた。夜半迄切り續けた所がもう犬は來なくなつた。

あれ程澤山切つたので犬の死骸がどんなに多く有るだらうと夜の明けるのをまつてゐた。が明る朝になつて見ると死骸は一つも無く運ばれて血も落ちて居なかつたと云ふ。

(周智郡城西村相月)

昔は狼も居たさうであるが今は居ない。山犬は夜末だ出る處があると云はれる。私の家から三町程はなれた處に、晝でもこもり繁つた竹藪の、清水が湧き出で、いかにも淋しく感ずる地があるがそこに出るといふ。山奥には勿論出る處が多いと云ふ話である。昔私の家の近所の人山へ行き日暮れて宿もなく、山小屋に一夜を明かさうとした時、山の犬が子供を多く引きつれて出て來てとびかゝらうとした。その人は食鹽をやるから助けてくれと云つたら、その食鹽を食べてそのまま歸つたといふ。

今でも、山の犬に出會ふからそれをふせぐとて夜草履をおろして外出する時は、その裏へ鍋墨をぬつて用ゐる。當地方では又縣社山住神社からお犬様といつて、山の犬をおかりして來て病人にとつついて居る狐狸を殺させる。若し「山の犬等來るものか」等と疑へば必ず夜、姿を見せ、又はあらたかに足跡をその家の附近につけるといふ。そのお犬様を山住様よりおかりしてくる時、連れてくる人が一度でも後を振返つたり、小便等などしてゐると、すぐおもどりになつて、來てくれない。故にその人は、餘程辛棒強い人でなくてはならないといふ。

(荒山つる)

○ (磐田郡佐久間村)

狼の牙等を親重代の傳へ物として煙草入の根付につけて居る人もある。狼は人間に掛るも山犬は人間にかゝらずと云ふ。山に行くとき毛の這入つた糞があるが、是を山犬の糞といつて恐れる。山犬は鹽を好むとて夜鹽の持運び忌む。死人を送るにも夜は山犬が付くといつて忌む。

(尾關すゞ子)

○ (磐田郡浦川村)

私の家の本家の大おぢいさんは、今日は死んでしまつてゐないが、生前よく祖母達にこんな話をしたさうである。或冬の夕暮、家の前で狼がウオー／＼と吠へてゐるので、おそる／＼戸をあけて見ると、口を大きく開いたまゝ、鳴いてゐる。變に思つてあかりをつけてよく／＼見ると、狼の咽喉には獣の骨がかかつてゐた。そこで大おぢいさんは可愛さうに思つて「食ひつくでないぞ」といひながら、口先へ木を食ひつけたい様に入れて、骨を抜いてやつた。すると其の明朝狼はうさぎを捕へて來て家の前へ置き、立ちさつたといふ。(古澤はな)

○ (磐田郡掛塚町)

山犬は大變お鹽が好きで動物だから、若しも山犬に襲はれた時には鹽をくれて置いてから逃げよと云はれて居る。(鈴木きよ)

○ (濱松市)

昔、或山家の人が麓へ用足しに出た。用を足して、家路に向つた途中、山で日が暮れて眞暗になつてしまつた。獸でも出ねばよいがと思つて歩いてゐると、向ふの方から大きな目が二つ光つて來る。ハツと思つてゐるとそれは段々近づいて來た。見ると大きな狼が一匹、口を大きく開けて其人の處へ向つて突進して來る。その人はどうする事も出來ないでちつとして様子を見てゐると、不思議にも其狼は自分を食へ様としない。よく見ると口の中に何か大きなものはさまつてゐる。そこで其人は「狼様、狼様、どうぞ私の家までお出で下さい。私の家にはお鹽の花が御座います。どうぞそれを召上つて下さい。さうすれば咽喉のものも取れませう」と云ふと、狼はどんどん其人の後についてきた。びくびくしながら、自分の家に導いてきて、お鹽を鉢一杯にもつてやると、口の中のものがすこつと取れてしまつた。狼は嬉しげに元來た方

へ戻つて行つた。それから數日して、其人が又町へ出て歸りが暗くなつた。又びくびくして歩いて居ると、後に音がする。見れば先日助けてやつた狼である。狼はその恩人に對する恩返しとでも云ふ様に、家の所まで後に従つて送つて来てくれたと云ふ事である。(渡邊はな)

○ (濱松市)

山犬が群つてついて来る時、「お鹽一升やるから里まで送つて来ておくれ」と云ふと、おとなしく送つて来てくれる。お鹽をやらないと後でたゝる。後へついて来る時「轉ぶと食ふぞ〜」と云ふ。(白井かをる)

○ (濱松市)

旅人が、夕暮山道を急いで歩いてゐた。と向ふから大きな口を開いた狼が走つて来る。旅人は覺悟をした。が又、どうかして逃げ得たならばと、持つてゐた杖で、構へてゐると、どうしたのか其の狼は、近よつても飛び掛らうともしないで、如何にも頼む様に口を向けてゐる。旅人は不思議に思ひ、口の中を見ると大きなとげが刺さつてゐる。旅人は、情深かつたので、それを早速抜いてやつた。狼は嬉しさうに、そのまゝ行つて了つた。かうして旅人は其の山を越

したが、やがて其の事は忘れて了つた。ところが又、或夕方其の旅人は其の山道を通つた。夕方になると、狼が出るので急いで歩いてゐた。すると、横の木の茂みから一匹の狼が出たかと思ふと、のそ〜〜と何時までも〜附いて来る。旅人は今飛附かれるか、もう喰はれるかと、びく〜してゐたが、遂に向ふの麓へ着く事が出来た。それで他の獸からの害も受けないで来たのであつたから、旅人は不思議でならなかつた。そしてどうしてもそれが自分を何如にも、麓まで守つて送り屈けて呉れた様な氣がして、ならなかつたので。早速家へ歸つて女房に言つて、鉢一杯に、お鹽の花を入れて、狼に捧げた。狼はそれをペロリとなめて了ふと、すたすた歸つて行つた。

後で旅人はその狼が何時かの狼であつた事に氣附いて、獸でさへあんなに立派な恩を返すのかとつく〜感じ入り、後々まで心の奥深く記しておいたとの事である。(渡邊はな)

6 猫

○ 猫の踊り

(田方郡伊東町)

岡の或る家で、「三年飼つてやるから、おまへさん三年たつたらどこかへ行つておしまひ」と言つて、猫をかつた。

三年たつた或日、ほんたうにその猫がゐなくなつた。家では大騒ぎをし、其處ら中たづねたそして「入りの洞」といふ所に猫がゐると言ふ事を聞き行つて見ると、其處の洞に、狐と踊りを踊つてゐた。

それからどうなつたか分らない。(尾崎敏子)

○ 猫の踊り

(富士郡富士町)

富士町の淺間様(官幣大社)の一寸西の方に、字をどり場と云ふ處がある。又一名猫山とも云ひ、周圍が皆田圃で割合に今でも寂しい處である。

昔此處で猫が集つては踊りをやつたと云ふ。或晩或人が此處を通ると、猫が三匹で踊つて居る。暫くすると三匹の猫は踊りをやめて「金子が來なけりや調子が合はない」と云つた。すると其處へ一倍身体の大きい金正寺の猫がやつて來た。此猫を金子と云つたのであらう。さうして金子は、外の猫に向つて「今夜は小母さんがおぢやをして呉れたので熱くて食べられなかつた」と云つたさうだ。(佐野なみ子)

○

(富士郡富士町)

昔、本市場から堀下へ出るそれはそれは淋しい一筋道があつた。この道は中島のかい、つんばと云ふ所を通つて居た。其處はとりわけ淋しい處で雜木が生ひ茂つてゐて、晝間も小暗い非常に氣味の悪い處であつた。昔、そのかい、つんばの林の芝原で、夜な夜な三匹の猫が現れて、さも面白さうに前脚を上げて踏みながら踊を踊るといふ話が噂されて、遠く迄傳はつた。

すると此の村のある物好きな人が、或晩その怪物を退治する様な積りでそつとその踊りを見に出掛けた。

夕日も沈んでいよく猫の出る時刻になつた。其の人は息を殺して待つて居ると、どうした事か噂とは違つて猫は二匹しか居ない。しかも二匹の猫はしよげかへつて居る。そして「金さん來なくちや踊りが出來ない」と云つてゐる。

へんな事を云ふと思つてゐると、遙か彼方の道を猫が一匹大急ぎに走つて來た。それをよく見ると富士町平垣金正寺の猫である。

それから三匹揃つて踊り出した。

金正寺の猫は方丈さんの寢靜まるのを待つてその衣を持つて來て、それを猫が三匹で着て踊

るのであつた。他の二匹は、本市場の常諦寺の猫と、延命寺の猫だつたと云ふ。その人は歸つてから其の事を近所の人に語り、その寺にも話した處が、それからはもう決して踊りを見る事が出来なくなつた。(渡邊静子)

○ 猫のたゝり

(賀茂郡稻取町)

或人が昔あつたとさ。其の人は船乗りだつたとさ。或日の事、晝寝をしてゐると、臺所にあつた魚を、一匹の猫が引いて行くのを見た。けれど追ふ事もせず黙つて居た。ところが其の家の婦が歸つて来て魚が無くなつたので大さわぎをした。するとその船乗は猫が取つた事を告げた。婦は大變にいかり、其の猫を庭の隅に埋めた。幾年かは過ぎて或冬の事、庭の隅に一つの南瓜が實を結んだ。皆は大變に不思議に思ひ、珍しいと云つて採つて来て煮た。そして前述の船乗りも居合はしたので、此の人にも與へた。そして皆で、さて食べようとする、其のかぼちや汚い虫からなつて居た。これはと思ひ、かぼちやのつるがどこから芽生えたかと思つたら、幾年か前に殺して埋めた猫の眼からかぼちやの芽は生えたのだつたとさ。

(田中綾子、田中淑子)

○

(駿東郡長泉村)

昔或る家で一匹の猫を幾年か養つて居た。その猫は、家人の居ない隙を見ては鍋の蓋を取つて尾を振つた。或日、それを家の老母が見付けて不思議がり、猫の後をつけて行くと、裏の竹藪に入つた。そして一本の竹の切口に尾を入れて又家の方に行つた。老母がその竹の切口を見ると驚いた。少し水のたまつた切口の中には一匹の死んだ青とかげが入つて居た。猫はそのとかげの水を尾につけて来ては鍋の中にとらして居たのである。(加藤わい子)

○ 猫の思返し

一四十九歳女の話(富士郡島田村)

昔、或る舊家に非常に長い間養はれてゐた、タマと云ふ猫があつた。舊家である位であつたから、中々裕福に暮してをつたが、或事から仕事に失敗して次第に家財が傾く様になり出し、田地を賣り、寶を賣りして遂にその舊家はすっかり零落してしまつた。所がタマと云ふ猫が非常に主人思ひの猫であつた。

或日の事、主人はこんな貧しくても可愛いタマにはと思つて夕飯を食べさせた。寝る頃になつてタマを呼んだ。ところがタマの姿が見えない。さては何處かへ遊び歩いてゐるのだらう

と、別に氣にもとめないで主人は息んでしまった。さて翌朝、彼が眼を醒して見ると……驚いた事には枕元に八文のお金がある。「自分は寝る前、枕元にお金を置くはずがない。八文のお金もない今では……どうして八文といふ金が自分の枕元に轉がつてゐるのだらう。」主人は其のお金のやり場に苦勞した。が、しかし零落してゐる今であるから人が恵んでくれたに違ひないと思つて頂いてしまつた。その日、又夕飯後になるとタマはゐなくなつた。そして朝になると枕元に八文のお金があつた。

かくて、その次の晩も……この様な事が毎日の様に續いた。主人は氣がついた。きつと此の八文のお金はタマの仕業に違ひないと目星をつけて、或晩夕飯後タマの姿をたよりにつけて行くと、或る廣い河原に出た。尙主人はタマに氣取られない様に見え隠れについて行くと、小さな河へ來た。タマは急に立ち止つて、あたりを見廻して後、カハモ（青いどろくした植物）を取つては頭につけ、カハモを取つては頭につけて、それを何回も繰り返して、人間、しかも盲人となつた。そして町を出歩いては、少し許りのお金を儲けてゐた。

「あゝさては、枕元の八文のお金はタマが盲人に化けて儲けた金だ」とやつと判つた。

その後も引續きタマは眞面目に八文のお金を主人に捧げた。

が後遂に、主人の元にゐられなくなり、主人からもこん／＼と言ひさとされて、タマは家を

出て何處ともなく姿を消してしまつた。と云ふ事だ。でも此の様に恩に報ゆるのであるから、吾々人間はより以上の恩を感じなければならぬ。（町田つや）

○
（周智郡城西村）

昔、或所に一軒の物持があつた。その家には一人の娘があつたが、又その娘と同年齡の猫を大切に飼つて居た。娘に魚の好い所をくれれば猫には頭だの尾だのをくれて育て居た。娘も猫も十七になつた頃、猫は少し悪い考へを持つ様になつた。自分はこの娘を殺さへすれば今度は一人で可愛がられて一人で自由に御馳走が食べられるであらうと考へたのである。そしていつかすきを覗つて娘を殺してやらうと思ふ様になつた。

毎年一回まわつて來る六部が、或日ひよつこりやつて來てこの家へ泊つた。そして娘の顔をしげ／＼と見て云ふには「好い娘におなりだけれ共あなたには死相が表れて居るから好く氣を付けなさい」かく云ひ残して又どこかへ行つてしまつた。數日過ぎると猫がどこかへ行つてしまつて一寸も歸つて來ない。いくら探しても居ない。始めの中は皆氣にしてさがしたけれ共日が過ぎるに隨つてそんなことはいつか忘れられた。それから又一年の月日は過ぎて例の六部が廻つて來た。そしてそこに出迎へた娘の顔をしげ／＼と見て「去年の娘はどうした」と訪ね

た。娘は一寸狼狽の色を顔に表して「あなたは何をおつしやるんです。先の娘は私ちやアありませんか」と云つたけれ共、尙六部は執こく、先の娘はどうしたと聞いた。が娘が口をわらなないので、突然そこにかけてあつた鐵砲をとつて娘を打ち殺してしまつた。家の人達はびつくりして「あなた何故家の大切な娘を殺してしまつたのです」と云つてなじつた。すると六部は「之は娘ではない猫だ。今こそ化け切つてしまつて娘の姿はして居るけれ共、二日過ぎれば猫になるから見て居てごらんなさい」と云ふ。が家の人達は可愛い、娘の事なので證據を見ない中は気がすまなかつた。六部は「それならどこか床下でも探してごらんなさい。きつと娘さんの骨がありますから」と云ふので探して見ると、ほんとうに娘の骨が出て来たので家の人は大いに驚き、初めて事情を悟り六部に厚くお禮をのべた。そして六部は又ふらりと歸つて行つた二日すると、果して殺された娘は大きな猫の姿となつた。一年は何事もなく過ぎた。そして例の如く三度六部が廻つて来た。家の人達は喜んで、色々去年のお禮等を延べ「今日は少し時外れのものですけれど珍しく家に南瓜が出来ましたから一つ之を煮て御馳走させよう」と云ふ事であつた。間もなく出来上つて「さあお上り下さい」と云つて出された。が六部は箸を取らうともしない。そして「一つ毒見をしない中は」と云ふ。家の人、人の折角の御馳走をと氣を悪くしたが、それでもと思つてそこに遊んで居た犬に投げてやると、犬はそれを食ふと間もな

く狂ひ廻つて死んでしまつた。六部は當然の事の様にならぬで居たが、家の人達はびつくりしてその南瓜の根を掘つて見ると、それは去年死んで葬つた猫の口から生へてゐたのであつた。死んでまでも猫は六部に對して敵を取らうとしたのである。(伊藤こゝ)

○ ク ワ シ ヤ

(賀茂郡松崎町)

松崎町の淨泉寺に、三河澄隆といふ和尚があつた。或晩客と將棋をさして居ると、そこへ隣村の中川村朋伏から夜更けになつてから葬式を知らせて来た。が和尚はウンウンとうなづくだけで容易に立上らうとしなかつた。そして、一丁の駒をびしやりと磐面に置いたかと思ふと、それを兩指でぐつと押へながらかう言つた。「死者は今火車クワッシャ(猫の年を経たもの)にさらはれるところだから、俺がかうして駒を押へてさへぎつてゐるのだ。家へ歸つたら、其の人の體を洗つて御覽。きつと何處かに駒の跡がついてゐるから」使者は歸つてから檢めて見た處が、和尚の言つた通り、その死者の臀部のあたりに鮮かに駒の跡を發見したと云ふ。

(青地豊子)

○

(賀茂郡竹麻村)

大寺の方丈さんは非常に猫を可愛がつてゐた。方丈さんは村人からあまりよく思はれてゐなかつた。そして遂に、排斥されるうはさが立つた。ところが或日、猫が突然、「方丈さん」と呼ぶ。驚いてゐると、いふのに「明日、村人があなたを追出しにくる約束をして居ります。けれど、明日は大臣の老母が死にます。そこで私は黒雲になつて死体をぬすみます。さうすると多くの和尚さまねいてお経をよむでせう。さうして遂にはチシキさん（智識）をまねいて経をよむでせう。でも私は死体をおとしません。最後にあなたがよんで下さいそうしたら返しませう」果して翌日その様な事實があつた。そして正しく方丈さんの経で死体が下りて来た。それこそ村人は驚いた。ほんとに「人はみかけによらぬものだ」と感心した。

このときから、死体を猫がぬすみにくるからといつて、刃物を死人の側におくと云ふ事である。（大野しげ）

○

(田方郡伊東町)

大湯オホユの側に山田屋といふ酒屋があつた。政須美の或人が、其處へ来て酒をのんで、家へ歸つた。酔つてゐたので、敷居を、蹴飛ばして、つまづいて死んだ。そのお酒は強かつた。

お通夜の晩、死んだ人の前に最後のご飯をそなへて、皆が念佛してゐた。

急に三毛猫が出て来て、その御馳走を食べようとした。

死んだ人のお母さんが、「○○（死人の名）そら猫が、猫が。」

と大聲をあげた。すると死んだ人が、ひよつくり起き上つた。

三毛猫が、起き上つた死人に、あはて、ぶつかつて、起き上つた死人は又、倒れたといふ。

だから、三毛猫は、葬式のとときとても嫌がる。（尾崎敏子）

○

—七十二歳の老爺の話—（庵原郡兩河内村）

昔、駿東郡の杉田といふ所に安養寺と云ふ寺が有つて、此の寺の和尚さんが大層猫を可愛がつてゐた。

長い間かつてゐたが、何時の頃か猫はこの寺を出てどこへか行つてしまつた。和尚さんは可哀想に思ひながら淋しく暮してゐた。

それから十年ばかりたつた或日、一人の十ばかりになる小僧が寺へ来て、和尚さんに言つた「和尚さん、お前さんには長く可愛がつてもらつて有難う御座いました。外に御恩のおくり様もないが今度あなたさんに御恩送りをすることが出来ます」と。和尚さんはさつぱり譯がわからないから「お前に恩をかけたおぼへはないが、一体どういふ譯だ」と聞いた。小僧は「和尚

さんわたしはあなたに長く可愛がられた猫です」といつた。和尚さんは「ア、さうかどうしてお前は恩送りをするといふのだ」と聞いた。小僧は「コンダ（今度）西國のお大名が江戸で死んで死体を國へ持つて歸るのです。それがあさつて箱根山を通るから、わたしが火車（カシヤ）になつてその死体を空高く引上げる。誰が来てしんじんしてもわしが下さない。いよくしまひに「杉田の安養寺」とわしが呼ぶ。するとあなたと頼みに来るだらうから、貴方が来て、熱心にお經をよんで水晶のずい、でわしをまねきなさい。するとわしが死体を空から下します。それで貴方の名も上れば、お禮も山の如く来るでせう」と言つてどこともなく消えて無くなつた。それから三日目に、はたしてその通りで有つたといふ事だ。（大熊治子）

○
（庵原郡内房村）

庵原郡内房村から一里ばかり離れた所に、窪山と云ふ山がある。可成り高い山で、家が麓に離れ離れに少しづつ、散在してゐる。昔、此の村で葬式をする時にきつと起つた事であるが、人々が大勢送つてお墓まで來、最後の別れをする爲に棺の蓋を開けるが、驚いたことには、中は空になつてゐるのである。斯くして村の葬式はいつも空棺を埋める外仕方なかつた。かくて困惑した村人は、内房村本成寺に御庵様と云ふ立派な和尚様があつたが、その人にお尋ねし

た。すると、それは山猫の仕業だと云ふ。村人は「それならそいつを殺して頂きたい。私達には姿は見えませんが」と願つた。そこで承知した和尚様は、呪文をとなへ、お前を天神として祭るから今後そんな事の無いやうにと仰言つて、お祀りをした。これ以後決して前の様な事は起らなかつたといふ。これが窪山天神にまつはる傳説である。（中谷タカエ）

○
（安倍郡大川村）

昔、服織村の洞慶院の僧が大川村栃澤の方まで托鉢に行つた。すると急に雷がなつて雨が降つてきた。丁度其の時向ふからお葬式が來るのに出會つた。僧は行列が近づいた時、「可愛想に棺の中には死人が入つてゐないが」とつぶやいた。人々はそれを聞いて「何を云ふだか、乞食坊主が。」と輕蔑した。しかし氣になるので棺の蓋をとつて見ると、なるほど死人はゐない。人々は困つてその僧に「お願いだから、元通りに死体を棺にをさめて下さい」と頼んだ。僧は承知して、呪文を唱へて「さあ入つた」と云つた。人々が見ると、なるほど入つてゐた。

○
（増田きね江）

○
一八十五歳老女の話―（榛原郡御前崎村）

昔、村の或人が死んだ。その當時は今の焼場でない。濱邊の方にある所で焼いて居た。その死人のお葬式の時、その焼場近くの砂スカで式をして居ると、向ふの方の空に、雲がホソマへになつたと思ふとその雲が忽ちに皆の上までも延びて来て棺を覆つてしまつた。此時引導をして居た僧は、その棺の上にとび上り、ほつすをふるつて一心にお經を誦して居た。すると暫らくして棺を覆つて居た黒雲は何處ともなく消えてしまつた。その和尚の法力が強かつた爲死体はさらはれなかつたと云ふ。併しその和尚もなか／＼大變であつたと見えて、その式を済ましてしまつた後、村の「二ツ家」の海福寺と云ふ寺で暫時休息されて、それから本寺へ歸られたといふ。

その死体をさらふものを「クワシヤ」と云ふ。(川口操)

(小笠郡土方村)

昔遠州土方村華嚴院の和尚さんが、牧野ヶ原高雄開山忌に行く途中、或所で葬式をしてゐるのに出遇つた。其處の前を通つた時に和尚は「何だ氣の毒な事だ。死人は棺の中にはゐないぞ」と云つた。それを聞いて人々は急に騒ぎだし恐る／＼蓋を取つてみると、たしかに入れた死人がゐない。そこでその和尚さんにすがつて、どうかその死人をこの中に戻してもらひたい

と願つた。和尚は承知して、直に經を読みだした。暫くするとがた／＼といふ大音響と共に、死人が棺の中に戻つた。人々はたゞ呆れる許りでその和尚に聞くと、それはヒヒが高い山の松の木の上に持つて行つたのだと分つたといふ。(湯川菊枝、野ヶ山ぎん)

(周智郡城西村)

或る所に位のあまり高くない僧が一人住んで居て一匹の猫を大變可愛がつて飼つて居た。然しだん／＼僧は貧乏になつて可愛い猫さへ飼ふ事が出来なくなつたので猫に向つて「お前も随分長く大事にして飼つてやつたけれども、もう今は飼ふ事も出来なくなつた。今になつてお前を手離すのも辛いけれど、どうも仕方がないから、どこへでも好きな所へ行つて幸福に暮してくれ」と云つた。さうすると猫はしばらく悲しさうにして居たが「それでは私も無理に居ても仕方がないからどこかへ行きますが、一つ御恩返しをしたいと思ひます。もう少しすると今病氣でねてゐる庄屋さんの所のおばあさんが死にます。さうすると私はその葬式の日にくわしやになつてそのおばあさんをまき上げ、誰が祈つても、もどしません、あなたが祈ればすぐ降しますから。」と云つてそれきり姿を消してしまつた。數月すると果してそのおばあさんは死に、葬式の日になると俄に黒雲が出てはげしい雨が降り出した。そしてそのおばあさんの死体

はするすると空へ上つて行つた。さあ大變と大騒ぎになり、色々位の高い僧が幾人もで祈つた
けれ共、少しも下りて来さうな様子がなかつた。致し方なく、位は高くなつてもと云つて例の
僧が祈ると、不思議や死体はする／＼と下りて来て元通りに棺の中へ納つた。それからその僧
の評判は一時に高まり大に出世したといふ。(伊藤こと)

○

(周智郡城西村)

水窪の善住寺で和尚さんが、三代の間一匹の猫を大切に飼つてゐた。或時和尚は小僧を
お供につれて信州の方へ出掛けた。そして峠の茶屋に一休みしてお茶をのんで居ると、死入が
する／＼引上げられて行くのが見える。之はくわしやだなど思つて、直に祈つてそれをとめて
置いて、茶屋の主人にこの近所に今日葬式の所はないかと訪ねると、すぐその峠の下のおぢい
さんが亡くなつて今日葬式だと答へた。和尚は早速山を下り、その家に行き、一心に讀經して
ゐる信州の○○寺の和尚に向ひ、その棺桶の中には死人はゐないから開けてごらんさいと云
つた。然しその和尚はそんな筈はないと云つて争つたが、そのふたを開けて見ると、果してそ
の棺の中は空であつたので、その和尚はびつくりして一心に祈つたけれども死人は歸らなかつ
た。仕方がないので善住寺の僧にまかせた。その僧が一度祈つたらその死人はする／＼と下り

て来た。それ故、今でも信州の○○寺より水窪の善住寺の方が格が上だと云ふ。之は猫がくわ
しやになつて恩返しをしたのである。(伊藤こと)

○

(周智郡城西村)

猫が死人の上をまたぐと、死人が動き出すといふ。それを箒でたくくと又元の通りになると
いふ。(伊藤こと)

○

(周智郡三倉村)

ある時榮泉寺の和尚さんが、熊切村の胡桃平を通つた事があつた。その時、丁度人が亡くな
つて、村ではお念佛の眞最中であつた。亡くなつた家では棺を眞中に、泣く／＼お葬式をやつ
て居た。

そこへ通りかゝつた和尚さんがふと見ると、棺の中に死人がゐない。「おや、あの棺の中に
死人が居らぬ」と和尚さんは思はず叫んだ。和尚さんの連れの者は大變驚いてその事をお葬式
の最中ではあるが人々に知らせた。「おゝい、皆の者棺の中に死人は居らぬぞ」さあ大變、皆
の者は「馬鹿を云ふな」と大層立腹した。が「いや確かだ、あれに見える榮泉寺の和尚が見た

眼に間違ひはない。さうでないと思ふなら明けて見たらどうか」と連の人は言つた。そこで蓋は取られた。と同時に皆の者は驚きの聲を上げた。成程死人が見えぬ。皆顔の色を變へて涙どころの話ではない。すると和尚さんは「いやさう驚かなくともよい。死人は魔物のためにさらはれてあの木の上にある」と指さし示した。成程そこにあるのを見て、人々は悉く膽をつぶしたといふ。

かうして胡桃平の一部分十二軒は、明治の初年迄、靈驗あらたかな榮泉寺の檀家となつたといふ事である。(鈴木とし)

○

(周智郡三倉村)

前の茅山に死人が出来て、葬式をやつて居た。榮泉寺の和尚が通りかゝつてみると棺箱に死人がゐない。が其處に居る和尚にわかるだらうと、そのまゝ通つて行つたが、どうにもその空葬式が氣にかゝる。そこで、其の日は瀧の様な大雨であつたが、和尚はもう一度雨をおかして茅山へ戻つた。そして、そこに居た和尚に話すと負嫌ひの彼の和尚は「なに居る」と大いに頑張つた。論より證據と、開けて見ると、果して榮泉寺の和尚が言つた通り棺の中は空。其の死體は鷹打抜といふ深山の松の木にかゝつてゐた。そこでその葬死は榮泉寺に委すことにして、

死體を元にかへしてもらつたといふ。故にその御禮として茅山五軒は榮泉寺の檀家になつた。

(鈴木とし)

7 猪、熊、その他

○ 猪

(賀茂郡稻生澤村)

昔はし、が大變農作物を荒すので村人が大勢集つて犬をつかひ追ひまはし、し、が進退極まつて弱つて來た所を鐵砲で打つた。

當時は家の中で肉食が出来なかつたので河原で大きな鍋で煮て食べた。

(附一)松本屋の離座敷で若者がゆる、(いろか)を食へた事があつた。その中の一人が歸つて話すると「ゆるかも獸だから正月からそんなものを喰ふもア家ん中へ入れる事は出来れエ」といつて一月家へ歸さなかつた。

(附二)下田港に黒船が來た當時、唐人が來ると牛をたべてしまふといつて恐れ、唐人が來たといふ報せが來ると、村中ふれが廻つて牛を山へかくした。(小針カツヨ)

○ (田方郡伊東町)

昔、猪が傷ついた身體を毎日運ばせて里へ来る。そしてその傷はだんだん直つてゆく、不思議に思つて或人が後をつけて行くと、葦の葉かげに、お湯があつた。これが元湯の始りで外傷にいゝと言はれてゐる。

かの「猪が髪結うて、チヨコと髪ゆつてお湯に來た。」の唄はこゝから出た。(尾崎敏子)

○ (田方郡西豆村小下田)

小下田あたりには昔猪が出たので、田島の山にせまつた方に深い堀をほつて猪の入るのを防いだり、其處に小屋を建て、番をしたと云ふ話がある。(鈴木れつ)

○ (田方郡菰山村)

猪が田畑を荒して困るので、猪土手と云ふ土手を築いて其の豫防をした。捕へるには落し穴を作つたり、猪の通り相な所で待伏せたりした。(木内たき)

猪は、狭い山作りの田に出て來たものだ。之を防ぐには多くの木材がある所ならば、大きな木を割つて圍ひを造り田に入られない様にしたが、それが出來ない所では山に小舎を作つて番をしながらそこに寝たもんだ。晝間枯木を燃すと夜になつてもその餘り火がほと／＼して赤く見え猪は之をおそれ出てこなかつた。又竹を三尺位に切り揃へて板につるし、その竹に細く長い糸をつないで之をひいて離すと竹と板とはり合つて大きな音が出た。猪は之をおそれ逃げた。又太い竹を水のたまる様にして置き一杯たまった頃に竹がひつくりかへつてその端につけておいた木が大音を出し、驚いて猪は逃げかへる等の事をした。

猪を狩るには、晝間猪がねて居るのをゆりおこしに行く。まはりの地には鐵砲持つた人達がりまいて居る。おこしに行つた人を追つておき上つてくる猪を鐵砲でうつのだ。毎年秋にやつたものだ。(神尾すゞ、岸本勝代)

○ (榛原郡上川根村千頭)

畑と、山又は藪との間に、幅三四尺、深さ三四尺の堀を掘つて、内側に柵を設けて猪を防い

だ。この堀のことを、わちと云つた。(天尾富美子)

三四六

○

(周智郡三倉村)

田の周り、畑の周りへワチといつて松等の大木を五六尺の定つた長さで切り三ツ割位にした杭棒を立て横棒を置き、それに隙間無く三ツ割にした物を置いた。又は田畑の小屋に夜火を燃して番をする事もあつた。

山の頂上に獵に馴れた人を置き、山の周りをとり巻いて山の中へ段々負ひつめてゆく。すると山にゐる人が追はれてくるのを打つてとる。又は、猪等は夜餌を食べにゆくので猪の通る道が出来ると、それをつけければ夜明方早くその道へゆき猪の歸るを待つてゐて打ち取るか、害獣防止のワチの一箇所の戸口へ落穴を堀つておいて、落してとる事等である。(鈴木さし)

○

(周智郡城西村)

猪を防ぐには、音だけして弾の出ない鐵砲をうつたり、夜は夜追ひと云つて山小屋に行きブリキ鐘等をならした。又ぼろ布を集めて繩の様になし、それに火をつけていぶしたり、毛を集めて焼いたりした。(伊藤こと)

○ 熊

(安倍郡大川村)

大川村洗澤より八丁目の所に地蔵がある。それより一丁か二丁行つた處で、或荷持ちの人が休んでゐると、大きな熊が出て來た。其の人は棒を持つて熊の二つの目にさしつけたまゝ身動きもせず、にらみ合つた。その中に熊の方が弱つて來て、遂に其の人は助かつた。

(増田きね江)

○

(周智郡城西村)

昔一人の獵師が雪の降る日に何か獲物はないかと山の奥へと入つて行つた。雪は益々はげしく降り出しとうとう道を失つてしまつた。途方にくれて尙奥の方へ行くと一つのほら穴があつてその中に一匹の親熊と二匹の子熊と合せて三匹住んで居た。一先づその穴の中へ入つて雪のやむまで待つ事にした。獵師がお腹がへると熊が手を出してなめさしてくれる。それをなめると何とも云はれない好い味でいつまでもお腹が空かなかつた。そして熊の親切でやつと命をつないで三四日すると雪も晴れて道も分る様になつたので熊に厚くお禮をのべてそこを出て家へ歸つて來た。そしてそれを友達に話すとその人は、よい金を見付けた、是非打ちに行か

うちやあないか、早くそこへ案内してくれ、と云ふので助けられた獵師はびつりして、私は命の恩人であるものを殺すことは出来ないからいやだと云つたが、友の獵師はどうしても聞かず「獸だからいゝちやあないか」とあまり熱心に云ふので、それなら二人は鐵砲をかついでそこまで行き三匹とも見事に打ちとめて歸つて來た。そして命を助けられた方の獵師が「これが一番澤山手をなめさしてくれたのだ」と云つて親熊の手を持たうとすると、熊は急にその男のど首へつかみかゝつてたうとうその人を殺してしまつた。かうして恩を忘れた獵師は熊に命をとられたのである。(伊藤・三)

○馬

(田方郡土肥村)

十月の氏神様の祭に、十二頭の馬に飾つけして、ネギさんと云ふ人が(青年がなる)乗つて約二百米直線の馬場をとばす(馬かけ)習慣が、土肥村小土肥にある。これについて話が次の二種ある。

昔、戸田村では家にかつてゐる馬が弱くなつて使へなくなると之を野に放した。處が、この野馬が大變多くなつて困つたので、戸田村では人が大勢出て、小土肥村の山の方へ追ひ、その野馬を焼き殺して仕舞つた。だから十月の氏神様の祭日に馬をあげねばならぬ、と。

又、昔ある時、大津波がしてどの村も非常に損害を被つた。そこで小土肥村では村中で氏神様へ毎年祭日には、十二頭の馬を上げるから津波をこの土地へ上げない様にとお願いした。それから毎年十二頭の馬を上げるのださうである。(新聞澄枝)

○名馬の駒

(安倍郡大川村)

大川村栃澤五郎左衛門の五郎左衛門家で「名馬の駒」と言はれる駒を馴らしてゐた。非常な名馬であつて、これに駿府の梶原といふ人が乗つたさうだ。その馬が薬科川の上流の方を歩いて來た時についたと云はれる「名馬の駒のふみ返し」と稱する石は、今でも薬科川の上流に稀にある。

五郎左衛門家では門を入つて向つて左側に馬を飼つた所(又は水浴をさせたとも云ふ)の跡があつて、今でも注連繩がはつてある。(増田きぬ江)

「...」

○ ぬ 鹿 の 鹿

「...」

昔 話 之 部

「...」

1 虫に関する話

○ 蛇と蚯蚓

(各地方)

昔、蚯蚓には目があつたが、聲が出なかつた。蛇には目がない代りに、よい聲で歌がうたへた。蛇が或日、蚯蚓に向つて「お前は何時も土の中に生活して居て目は不必要だ。どうだ、俺の目と交換しては」と言つて、とうとう蚯蚓の目と蛇の美しい聲とを取換へた。蚯蚓には目は無いが聲があり、蛇は目があるが聲はないのだと云ふ。

(補一)

(庵原郡富士川町)

蛇と蚯蚓とが眼と聲とを交換した。其の恩返しに蛇は蚯蚓の爲めに、蛙を捕へては仇討ちをしてやる云ふ。

蚯蚓は大馬鹿で又大心配やである。蛇に眼をやつたので後を心配して、若し土を食つてしまつたら後はどうしようかと大いに心配した。すると蛇が「土を食つてしまつたら、六月の日照りに道へ出て土地になれ」と言つたと云ふ。(西尾茂治)

(補二)

(榛原郡御前崎村)

眼のない蚯蚓は、土が無限にあることが分らないので「此の國の土を食つてしまつたら何を食はずー」

と云つて鳴くのだと云ふ。(川口操)

○ 百 足

(賀茂郡三濱村)

百足にさされた時は朝顔の葉を揉んでつけるといふと云ふ。又、女の唾をかけると百足が弱るとも云ふ。(澤村國子)

○ (静岡市)

百足の足が真赤いとお天気になる。白いと雨が降ると云ふ。(曾根とみ)

○ (志太郡和田村)

昔、蝶が大變百足を好いてゐた。そこで蜻蛉や蜂が蝶に向ひ「蝶さんお前は何故百足と心易くなつた。」と聞くと、「私は、おあしの多いのが好きだ」と云つたさうである。

○ (小長谷光江)

○ (周智郡城西村)

「むかぜ」は毘沙門様のお使ひで、毘沙門様の背中には百足がついてゐると云ふ。

(伊藤こと)

○ 蟋 蟀

(周智郡城西村)

蟋蟀のことを「かんなご」と云ふ。その鳴聲は「一升ついても姑んとこへ、二升ついても姑んとこへ」となくのだといふ。大風の吹いてゐる時、蟋蟀が鳴き出すと風が止むと云ふ。

○ ヤ モ メ (駿東郡清水村)

白い小さい虫である。水田に居て人の足などさしておいて、急いで尻水口(水の流出するところ)へ行つて人が死んで流れて来るのを待つてゐると云ふ。(山本よしゑ)

○ でんでんむし (志太郡焼津町)

でん／＼むしは小さい時、大變親不孝であつたため、或日親から叱られて重いからを背負はされたのだといふ。(近藤喜江)

○まむし

(静岡市)

まむしが矢を刺されてゐた時、わらびが抜いてくれたので、蝮が出て来た時、「かやまのやまのかやまむし、わらびの恩を忘れたか」と云ふと、蝮が來得ないといふことである。

(金子千代子)

○

(安倍郡大川村)

蝮が子をはらんで寝てゐる時に、つんばが地の下から生え出て来て、蝮の腹を突きやぶつた蝮が苦しんでゐるのを、蕨がみて、之を助けてやつた。その恩により、蝮に咬まれた時は蕨の葉を揉んで付けるとよいと云はれる。(小長井しも)

2 鳥に關する話

○杜

鶇

(賀茂郡三濱村)

昔、兄と弟が住んでゐた。兄は盲であつた。弟は大變に兄思ひで、毎日山へ自然薯を取りに

行つては、兄に美味しい所を當へ、自分はごく不味い所を食べてゐた。心のひがんだ兄は、自分にはさへこんな美味しい所を食べさせるとは、弟自身はもつと美味しい所を食べてゐるであらうと、ひどく弟を責めた。弟は大層情なく思つて、終に自分の腹を切つてみせた。兄が弟の腹に手をやつてみると、繊維ばかりの不味いのがたくさん入つてゐるのに氣づいた。そこで兄は後悔して鳥になり「弟戀し」と、一晝夜に八千八聲鳴いて咽喉が裂け、終に血をはいてしまふ。弟は兄が暇なく鳴きつゞけるので餌をとる時がないだらうと思つて、百舌になり、木の枝等に虫を取つてきてさしておいて、これを與へるのださうである。(澤村國子)

○

(賀茂郡下河津村)

昔、兄が盲目である兄弟があつた。或時、弟は自然薯を掘つてきて、自分は悪い所を食べ、兄にはよい所を残して置いた。が、兄はこれを疑ひ、弟を殺した。殺して初めて、自分の悪い事を知り、後鳥となつて「モンドンカケタカ、オトウトコイシイ」と一夜に八千八聲なき、その爲咽喉が破れて血を吐くと云ふ。(川津あき江)

○

(賀茂郡下河津村)

昔、兄弟があつたが、兄の惨酷なのに引換へて弟は頗る兄思ひの人であつた。或時、弟は自分是不味いものを食べて、兄には美味いものを残してやつた。それなのに兄は弟を疑つたので弟はそんなら私を殺して腹中を極めてくれと云ふ。兄は直に咽喉を突いてみると、まづいものばかり入つてゐた。之を見た兄は流石に邪見の角が折れて、鳥に化して「弟戀しや、ほんぞんかけたか」と夜晝八千八聲鳴いて弟の菩提を弔ふ。それで餌を探す暇もなく、遂に咽喉が破れて血を吐くと云ふ。(伊原あき)

○ (賀茂郡下河津村)

杜鵑は「弟戀しい」と鳴くと云ふ。此の鳥の羽を、味の變つた味噌に入れて置くと、その味がよくなると云ふ。(村越ちか)

○ (富士郡田子浦村)

昔、二人の兄弟があつた。兄は目が悪く弟は丈夫だつた。弟は非常に兄を可愛想に思ひ、町へ出て、自分は食べないで、よい土産を買つて持歸つたり、又御飯等も自分が悪い所を取る様にして居た。然し兄は弟をいろ／＼と美んで、お前は目が見えるから町へ出てはうまいもの

を買つて食べるだらう等と弟を困らせた。後弟は裏の澤に落ちて死んでしまつた。兄は目が見えぬので今更ながら弟をうらんだ事を申譯なく思つたが、仕方なく、とう／＼自分も死んで仕舞つた。そして杜鵑となつて「オトトコイシイ、弟戀しい」と鳴く様になつたといふ。

(望月貞子)

○ (静岡市)

昔、両親に早く死別した兄弟が住んでゐた。兄は盲目であつた。氣のやさしい弟は、兄につき、つくつておいしいものを取つて来て食べさせた。兄は、弟はこんなにおいしいものを自分にくれるのだから、弟はもつと食べてゐるに違ひないと思つた。そのうちに弟は病氣になつて死んでしまつた。もう誰も食べ物を持つてきてくれる人はない。唯雨が降ると喉に水が入るので喜ぶ。それで、「弟戀し、弟戀し、ばつ、こう、つち、やつたか」と鳴くと云ふ。

(曾根とみ)

○ (周智郡城西村)

昔、杜鵑は、百舌に弟をとつて食はれたので、「弟を返せ、弟を返せ」と云つて鳴く。そし

て杜鵑の出る時は百舌は出ず、出ない様になると來ると云ふ。
又、杜鵑は地獄の鳥で姿を見せはいと云ふ。(伊藤こと)

○ (周智郡城西村)

杜鵑の弟を百舌が殺したので、兄なる杜鵑は、「弟戀し」と啼き続けたので、流石の百舌も自責の念に堪へかねて、兄なる杜鵑を助けて己れの罪ほろぼしをしようと、木へ鳥や虫を刺して兄の杜鵑に與へるのだと云ふ。(荒山つる)

○ (磐田郡佐久間村)

昔、兄弟があつたが、兄の慘酷なのに引換へて、弟は頗る兄思ひの人であつた。或時弟は野芋を掘つて來て、自分は悪い所ばかり食べ、兄へは良い所を残して置いた。處が思ひやりの無い兄は歸つて來て弟の心を疑ひ、悪いのを残して居たらうと之を責めた。弟はそんなら私を殺して腹の中を檢めてくれと云つた。兄は直にその咽喉を突いてみると、野芋の悪い所ばかり入つて居た。之を見た兄は流石に邪見の角が折れ、鳥と化して、「ホツチヨ、ホツタカ、オトト〜」と鳴いて弟を弔ふのだと云ふ。(尾關ます子)

○ (磐田郡佐久間村)

昔、兄弟があつて、弟が百舌に取られたので、兄は杜鵑となつて弟を探して歩く。そして「弟〜〜」と鳴く。杜鵑の鳴く時季には百舌は居らず、百舌が鳴く頃には杜鵑は居ない。

(尾關ます子)

○ (磐田郡浦川村)

杜鵑は「ホツチヨンカケタカ〜」と、千聲鳴くと咽喉が破れて血を吐くと云ふ。すると百舌が食物を運んでくれるのだと云ふ。

又「モツテツテウチャツタカオツトトノトツト」と鳴くとも云ふ。(古澤はな)

○ (駿東郡清水村)

ほととぎすを黒焼きにして戦地へ持つて行き、どんな處で水を飲む時でもその黒焼の粉を少しつゝ食べると、生水があたらないと云つて、今でも戦地に行く人が持つて行くさうである。

(山本よしゑ)

○

(庵原郡蒲原町)

昔、馬子とその妻とがあつた。或日馬子が妻に、馬に水をやつてくれたかと云ふと、妻は、やらないのに、やつたと答へた。そこで馬は死んでしまった。後、妻も死んで杜鵑になり、千聲八聲泣かねば水が飲めぬとの事である。(鏡島喜世子)

○

(志太郡矢咋)

杜鵑を「ホツチヨツチヨ」と云ふ。此の鳥が「ホツチヨツチヨウチャツタ」と鳴くと、お茶がこわくなると云ふ。(鈴木美代)

○ 杜鵑の鳴聲

ボツチヨ、ウツチャツタ——ボツチヨとは土等を運ぶ道具で、形は丸く、藁で作つてある。これを荷棒の両端にかけ擔ふのである。(磐田郡掛塚町)

ボツチヨウツチャツタ (磐田郡長野村)

ボツチヨンカケタカ (磐田郡上阿多古村)

ボツコーウツチャツタカ (静岡市)

ボツコウツチャツタ (駿東郡浮島村)

ボツコロウツチャツタカ (庵原郡富士川町)

ボツコウツチャツタカ (富士郡須津村)

ボツコシヨ (田方郡西豆村)

ホツキヨツキヨ (濱松市)

ホツキヨツキヨ—この鳥の名を「ホツチヨツチヨ」と云ふ(榛原郡上川根村)

ホツチヨチヨ (安倍郡大川村)

ホツテウツチャツタカ (庵原郡兩河内村)

オトトコヒシ (富士郡島田村)

○ 頬白の鳴聲

ひよつと一五粒、二朱負けた
一筆啓上仕る (賀茂郡三濱村)

一筆啓上仕候

ちよつくり行つて、二朱負けた (賀茂郡下河津村)

ひよつと一五粒、二朱負けた

ちよつくりいつて、二朱まけた (賀茂郡竹麻村)

ちよつと一べん、にしまけた (賀茂郡中川村)

此の鳥を「ひよ」といふ。(同右)

ちよつくら五つ、二しまけた (田方郡西豆村)

ちんちろりん (駿東郡浮島村)

ちんちりすく二朱まけた、おやちに貰つて、又まけた (富士郡須津村)

ちきちん鳥二朱まけた、旦那に貰つて、又まけた (富士郡田子浦村)

ちよつべん五粒、二朱まけた、四文貰つて、もとにした (庵原郡雨内村)

天邊白頬白、ちよつくり行つて、二朱まけた、旦那に貸して、又敗けた (庵原郡富士川町)

てつべん、五粒、ほーじろりん (清水市)

てつべん五粒、二朱まけた、旦那に貰つて、又まけた。

てつべん、ちきちん

とんと一粒、二朱負けた、五文貰つて、元にした (静岡市)

とんと一粒、二朱負けた、三文貰つて、元にした

つんつ五粒、二朱負けた、三文貰つて、元にした

此の鳥を「ちんちん」といふ。(同右)

ちんちんころりん、ほーじろりん、ちよつくりいつて、二朱まけた、一分にしようと

またまけた (安倍郡千代田村)

ちんちろ五粒、二朱まけた、五文貰つて、元にした (榛原郡御前崎村)

此の鳥の方言を「ちんちろ」といふ。(同右)

ちんちろ五粒、二朱まけた、五文貰つて、元にせよ (榛原郡相良町)

此の鳥を「ちんちろ」といふ、必ず五粒卵を産むといふ。(同右)

つんつ五つば、二朱まけて、五文貰つて元にした

つんつ五つば、七つば八つば、八つ貰つて元にした (小笠郡横須賀町)

此の鳥を「つんつ」といふ。(同右)
ちんちろ五粒、二朱まけた、五文貰つて、元にした (小笠郡相草村)

此の鳥を「ちんちろ」といふ。(同右)

とんと、五粒、二朱まけた (周智郡城四村)
親死ね子死ね、弟の目つぶれ

此の鳥を「ひこと」といひ、鳴聲が縁起が悪いので、その巢をとらない。(同右)

わたしや頬白、ばくちに負けた、つんつ五粒、二朱まけた (磐田郡掛塚町)

とんと五粒、二朱まけた、五文貰つて、元にした (磐田郡長野村)

つんとしとしよう、二朱まうけた (磐田郡上阿多古村)

とんとう五粒、二朱まけた (磐田郡佐久間村)

どんと一つ、二朱まけた (磐田郡佐久間村)

親死ね子死ね、四十九の餅つけ

此の鳥を「ひこと」といって、捕つて来ても、夜中に、「親死ね子死ね……」と鳴く

ので、放してやるといふ。(同右)

つんといつて、にしまけた (濱名郡飯田村)

○ 鶴 鴿 (安倍郡大川村)

鶴鴿の真似をすると、この鳥の様に尻をふる病にかゝると云ふ。

「むぎようどり」と名付ける。(小長井しも)

(榛原郡相良町)

○ 鶴鴿が畑に盛んに来る頃は、麥を蒔くに好時季であると云ふ。それでこの鳥を「麥蒔き鳥」とも「尻ふり鳥」とも云ふ。(植田正代)

(榛原郡御前崎村)

○ 「しりふり鳥」はおてんとう様のお使ひ、又は神様のお使ひだから追つてはいけないと云ふ。この鳥が庭に下りれば其の家に凶事がないと云ひ、家に巢をつくと其の家の主な人が死ぬと云ふ。(川口操)

(小笠郡三濱村)

これは太陽のお使ひ鳥で、いちめると罰があたると云ふ。(松下きん)

○ (小笠原相草村)

「ちちんひよどり」とも「しりふり鳥」とも云ひ、おてんとう様のお使だと云ふ。(齊能壽子)

○ (小笠原横須賀町)

この鳥はおてんとう様のお使だから捕へてはならぬと云ふ。又此の鳥が地を歩く時常に尾を振つて居るので「おさんしりふり」と名付けてゐる。

「おさんしりふり」七振り八振り

もちつと長けりや 江戸まで届く

江戸の若衆が とんび風あげる。」と云ふ唄もある。(横山てい)

○ (磐田郡掛塚町)

「しりふり」とも「おさんしりふり」とも名付ける。長い尾を常に動かしてゐるので「おさんしりふり、七ふり八ふり、江戸が火事だ、丸焼けだ」と唄ふ。(鈴木きよ、川合金女)

○ (磐田郡長野村)

「おさんしりふり」と名付け「おさんしりふり、七ふり八ふり、もつと長けりや天までとどく」と云ふ。(石川ちかゑ)

○ (磐田郡佐久間村)

この鳥は伊勢皇大神宮のお使ひだと云ふ。(尾關すゞ子)

○ (濱名郡飯田村)

この鳥が来ると麥を蒔くによい時と云ひ、「麥まき鳥」と名付ける。又、「しりふり鳥」とも云つて「しりふり」とらげやからんつば」と云ふ。(長谷川小柳)

○ 「いしたたき」「ちちん」と云ふ。(賀茂郡下河津村)

「ちよつちよ」と云ふ。(駿東郡清水村)

「むぎまきどり」と云ふ。(富士郡須津町、田子浦村)

「おいせ鳥」と云ふ。(庵原郡富士川町)

「ちんちんどり」と云ふ。(庵原郡兩河内村)

お伊勢様のお使ひと云つて捕らぬ。「しりふりどり」と云ふ。(安倍郡千代田村)

神さまのお使だから捕ると罪があたると云ふ。「しりふりどり」といふ(静岡市)

神さまの使ひだから捕つてはならない。「せきれん」と云ふ。(周智郡城西村)

「しりふりどり」と云ふ。(濱松市)

〇 百 舌

(賀茂郡下河津村)

百舌が日の入り方に鳴くと翌日天氣がよいと云ふ。虫や蛙を木にさして置くが、これはいくら立つても腐さらぬのは不思議だと云ふ。(川津あき江)

〇 (賀茂郡竹麻村)

杜鵑が晝夜八千八聲なくので餌をとる暇がないから、百舌が、杜鵑のために餌を木にさしておいてやるのだと云ふ。(大野しげ子)

〇 (富士郡須津村)

百舌が鳴くと其の翌日は晴れると云ふ。木の先等に虫や蛙が刺してあるのを、百舌が忘れて行つたのだと云ふ。(齋藤かつ江)

〇 (庵原郡富士川町)

百舌は真似が上手だから、何でも出来る人や、人真似の上手な人のことを、あれは百舌だと云ふ。(西尾茂治)

〇 (静岡市)

人間の後頭部の處をモズと云ふ。百舌の後頭の毛は目立つてゐるので此の鳥をモズと云ふのだ。そして此の鳥の啼き聲がキーキーと云ふので人間の子供の後頭部の短い毛をモズキーキーといふ。(片井はつ)

〇 (静岡市)

蛙や蝗をとつて收つておき、冬のご食物とする。その時空の白い雲を目標にするが、白い雲は行つてしまふので、收つておいた虫は何處か分らなくなる。

又この鳥が鳴くと雨が止む。そして空を見て野良に行くやうに云ふのだ。その鳴聲は「ああぬけ／＼かまをとぐ（仰向け／＼鎌をとぐ）」と鳴く。

又この鳴聲を「ほほ／＼はげた」とも云ふ。それで人が何處が禿げたと云ふと、百舌が「びんちよ／＼はげた」と鳴くと云ふ。だから禿げた人が来ると百舌が来たと云ふ。（曾根さみ）

○（志太郡焼津町）

百姓が木綿地へ綿の木を植えて相當に延びると、切つて太らすのださうだ。すると此の悪戯な百舌が冬の餌に蛙を干して貯める爲に、その綿の木の先に突き刺しておいて忘れてしまふ。百舌が秋に鳴く聲が丁度鎌をとぐ様であるので「百舌んかまあとぐ（百舌が鎌をとぐ）」と云ふ。（神尾すず、岸本かつよ）

○（榛原郡御前崎村）

「秋百舌が鳴いたら鎌といで待ちよう（待て）」と云つて、百舌が鳴けばお天氣になると云ふ

○（小笠郡相草村）

百舌が栗に小便をかけると、實がいらすと云ふ。（齋能壽子）

○（磐田郡佐久間村）

この鳥を「もすきち」と云ひ、色々の鳥の鳴聲を眞似し、小鳥を捕つて食ふ。又柚の棘に虫等を突刺しておいて、忘れてしまふとも云ふ。（尾關すず子）

○（榛原郡御前崎村）

○ 梟
梟の事を「げんぢ」と云ふ。この鳥は怠者で自分の巢を持たず、晝他の小鳥は巢の中に居ないので、其の中に入つてゐる。晩になつて、小鳥達がみな自分の巢に歸つてくると梟をつゝいて追ひ出して仕舞ふ。其時梟はつくづく宿無しの悲哀を感じて「げんぢほうほう、夜が明けたら巢作らう」と云つて鳴くが、夜が明けると、他の鳥達はみな巢を出て行くので又其のあとへ入つて「夜があけりやい買うてもえ／＼／＼」と鳴いて遊んでゐると云ふ。それで人間でも怠物の事を「げんぢ」だと云ふ。（川口操）

○ その鳴聲、「ごろすけほー夜が明けたら巢つくらう」(小笠郡横須賀町)

○ (小笠郡相草村)

「げんち」はたまらん(たいへん)するい鳥で、晝は眼が見えないけれども、夜は見えるのに巢を作らずとはしなんだ。夜になつて巢がなくて、つまらんなあと思つても面倒くさいので「こーてもまゝい〜夜が明けたら巢をすつつくらう、ほーほー」と鳴くと云ふ。「げんち」は一生巢なしで終るのださうだ。(齊能壽子)

○ (小笠郡三濱村)

梟は夜になると巢がないので大變つらく思ひ「夜が明けたら巢を作らう」と云ふ。だけど夜が明けると目が見えなくなるので、どうしても巢をつくる事が出来ない。それで今でも巢がなく木の子にとまつてゐると云ふ。(松下きん)

○ (濱名郡飯田村)

「ごろすけ」は非常に親不孝な鳥であると云ふ。又非常に怠者であつて、夜になると朝起きたら巢を作らうと思つて「あした起きたら巢つくらう」と鳴くけれ共、朝になるともう目が見えなくなるから、何時までたつても巢を作らず、他の鳥にいちめられるのである。又「ごろすけほつこしよ」と鳴くとも云ふ。(長谷川小柳)

○ (磐田郡佐久間村)

「ホツコ」は明神様の使ひだと云ふ。

○ 鶴 鶴

○ (庵原郡富士川町)

この鳥は強いので鷹の仲間に入ると云ふ。それはこの鳥が猪の耳の中に入り、爲に猪は苦しみころけて(轉けて)死んだからだ。(西尾茂治)

○ (周智郡城西村)